

ど今日ぞ供養せさせ給ふ。例の宵の御行に、御手水まゐらする中將の君の扇に、

君こふる涙はきはもなきものを今日をば何のはてといふらむ

と書きつけたるを取りて見給ひて、

人こふる我が身も末になりゆけど残りおほかる涙なりけりと書きそへ給ふ。

通釋

風の音さへ悲しみを加へて行く秋の頃、六條院では御法事の準備で、ついたち頃には、とかく忙しさに紛れてゐるやうである。源氏は今までよくもまあ過ぎてきた月日であることよと、思召すにつけても、あきれて明し暮される。紫の上の御命日には、上下の人々がみな精進潔齋して、極樂の曼陀羅など、今日供養される。例の初夜の御念佛に御手水をさし上げられる時に、中將の君の扇に

君戀ふる涙はきはもなきものを今日をば何のはてといふらむ

——あなたを戀ひ慕ふ涙は際限もないものを、なぜ今日を一周忌の「はて」といふのであらう。と書きつけてあるのをおとりになつて、御らんになつて、

人戀ふるわが身も末になりゆけどのこり多かる涙なりけり

——亡き人を追慕するこの身も終りになつて行つたけれど、いつまでも残り多く流れてやまない涙であることよ。

とお書きそへになる。

九月ながつきになりて、九日、綿おほひたる菊を御覽じて、

もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな

通釋

九月になつて九日に綿をおほつてある菊を御らんになつて、

もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝる秋かな

——かつては紫上ともろともにおきて見た菊のきせ綿も、けさは私一人の袂に露のかかる淋しい秋であるよ。

神無月は、大方も時雨がちななる頃、いとゞ眺め給ひて、夕暮の空の氣色なども、えも言はぬ心細さに、降りしかど」と獨言ちおはす。雲居をわたる雁の翼つばさも、羨ましくまもられ給ふ。

大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行方ゆくへたづねよ何事につけても紛れずのみ月日に添へておぼさる。

通釋

十月には一體に時雨がちな頃、大そう思ひにふけられて、夕暮の空の様子なども、云ひやうもない程心細いにつけて、思はず「降りしかど」と獨言を云つておいてになる。大空を自由に渡る雁のつばさもそぞろにうらやましく見守られなさる。

大空をかよふまぼろし夢にだに見えぬ魂の行方たづねよ

——大空を通ふ方術者でもあつて、せめて夢にさへも見えて來ない紫の上の魂の行方を尋ねてくれ

何事につけても、氣が紛れずばかり、どうかすると月日にそへて紫の上のことが思ひ出されなさる。

五節などいひて、世の中そこはかとなく今めかしげなる頃、大將殿の君達、殿上し給ひて參り給へり。同じ程にて、二人いと美しきさまなり。御叔父の頭中將、藏人少將など小忌にて、青摺の姿ども、清げにめやすく、皆うち續き、もてかしづきつゝ、諸共に參り給ふ。思ふ事なげなる様どもを見給ふに、いにしへあやしかりし日影のをり、さすがに思し出でらるべし。

みやびとは豊明とよあかりにいそぐ今日日影もしらで暮しつるかな。

通釋

十一月五節などいひて、世の中が何とはなしに、陽氣さうで賑やかなころ、夕霧の若君が重殿上をなされたのが、源氏の御殿にお見えになつた。同じ位の年恰好で二人、とても可愛らしい様子だ。御叔父の頭中將や藏人少將などが、小忌の衣の青摺の袍を着た姿などがきれいで、見苦しくなく、二人の若君の介添をしながら、皆が一緒にお出でになる。その何の屈托もなささうな様子などをごらんになるにつけて、筑紫の舞姫に文をおやりになつた折のあの妙ないきさつを、さすがにお思ひ出しになるのであらう。

宮人は豊明にいそぐ今日日かげも知らず暮しつるかな

——大宮人はみな豊明の御宴に召されていそぐ今日であるのに、自分だけは月日の行方も知らず、日かげのかづらも知らず、涙にほけて暮してゐることよ。

今年をばかくて忍び過しつれば、今はと世を去り給ふべきほど、近く思し設くるに、哀なること盡きせず。やうく然るべき事も、御心のうちに思しつゞけて、侍ふ人々にも、ほどくにつけて物賜ひなど、おどろくしく、今なむ限としなし給はねど、近う惜ふ人々は御本意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れゆくも心細う、悲しきこと限なし。落ちとまりてかたはなるべき人の御文

ども、「破れば侍し」と思されけるにや、少しづつ残し給へりけるを、物のついでに御覽じつけて、破らせ給ひなどするに、かの須磨の頃ほひ、所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは、殊に結ひあはせてぞありける。自らし置き給ひける事なれど、久しうなりにける世の事と思すに、たゞ今のやうなる墨つきなど、實に千歳の形見にしつべかりけるを見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせ給ふ。いとかゝらぬ程の事にてだに、過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとゞかき昏らし、それとも見わかぬまで降りおつる御涙の、水莖に流れそふを、人もあまり心弱しと見奉るべきが、かたはらいたう、はしたなければ、押遣り給ひて、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つゝもなほまどふかな

侍ふ人々も、まほにはえ引きひろげねど、それとほのゝ見ゆるに、

心惑ひども疎ならず。この世ながら遠からぬ御別のほどを、いみじと思しけるまゝに書い給へる言の葉、實にその折よりもせきあへぬ悲しさ、やらむ方なし。いとうたて、今ひとときはの御心惑ひも、女々しく人わろくなりぬべければ、よくも見給はで、こまやかに書き給へるかたはらに、

かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲居の烟とをなれ

と書きつけさせ給ひて、皆焼かせ給ひつ。

通釋

今年をば、かうしてがまんして過してしまつたから、今はいよいよ出家をなさるべき時期が近くなつたと、心に思ひかけられるのにつけて、あはれなことが益々深い。段々と然るべき準備など、御心の中に思ひつづけられて、おつかへしてゐる人々にも、身分身分に應じて形見を分けたりなど、さも仰山らしく、今こそ出家してしまふといふ風にはなさないけれど、近くお仕へしてゐる人々は、これはきつと、平素の御本意をとげて御出家になるべき御様子だと見奉るので、年の暮れ行くにつけても、心細く悲しいことが限りもない。あとに散らばつては、見苦しいやうな婦人の御手紙など、破つてしまへば惜しいと思召されたせい、か、少々づつは残していらつしやつたのを、

何かのついでにお見つけになつて、お破りになつたりなどする中に、かの須磨論居のころ、所々の女房からおあげになつたのもある中に、かの紫の上の御手蹟のものは、格別にして結び合はせてあつた。自分でかうしてお置きになつた事ではあるが、これも久しくなつてしまつた世の事と思し召すのに、ついこの間のやうに見える筆蹟など、ほんとうにこれこそ千年の形見としてもよからうのに、それを見ないやうになつてしまふこれからの生活とお思ひになると、何のかひもないので、うとましくない親しい人々を二三人ばかり、御前に召して、お破りになる。本當にかうした出家の前といふやうな折でない場合のことであつてさへ、故人の筆のあとと見るのはあはれてあるのを、まして今日はひどくかき暮し、文字がそれとも見えない位に降りおちる御涙が、お手紙の上に流れ添ふのを、人もあまり心弱いと見奉るであらうのが、我ながら不體裁で、へんなので、かたはらにおしやられなされて、

しての山越えにし山をしたふとて跡を見つものなほまどふかな

——死出の山を越えて行つてしまつた人を慕ふと云つて、筆のあとを見つものなほ心をまどはし途方にくれることであるよ。

そこにおつかへしてゐる女房達も、まともにはえう開けて見ないが、大體それと見えるので、悲しみの心迷ひもなみたいていでない。この世ながらの須磨と都との遠くもないお別れのほどを、紫の上がひどく悲しいと思召されたままに、お書きになつたこの手紙は、本當にその當時よりもまして堪へ難い悲しみは、やり場もない。いやどうもこの上一段と心を取亂すのも女々しく不體裁になるであらうから、よくも御らんになることが出来ないで、こまごまとお書きになつたその傍に、

書きつめて見るもかひなし藻鹽草おなじ雲居の煙とをなれ

——取あつめて、見るのも、今は何の甲斐もない藻鹽草よ、今はお前を書いた紫の上と同じ煙になるがよい。

とお書きつけになつて、皆おやきになつてしまつた。

御佛名も、今年ばかりにこそは、と思せばにや、常よりも異に、錫杖きんせうの聲々などあはれに思さる。行末ながきことを請ひ願ふも、佛の聞き給はむことかたはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。導師のまかづるを御前に召して盃など常の作法よりも、さしわかせ給ひて、殊に祿など賜はず。年頃久しくまゐり、おほやけにも仕う奉りて、院にも御覽じ馴れたる御導師の、頭はやうやう色かはりて侍ふも、哀に思さる。例の宮達上達部など、あまた参り給へり。梅の花の僅に氣色ばみはじめ、雪にもてはやされたる程をかしきを、御遊などもありぬべけれど、猶今年までは物の音もむせびぬべき心地し給へば、時によりたるものうち誦うたしなどは

かりぞせさせ給ふ。まことや、導師の盃の序に、

春までのいのちも知らず雪のうちにいろづく梅をけふかさ
してむ

御かへし、

ちよの春見るべき花といのりおきて我が身ぞ雪とともにふ
りぬる

人々多く詠みおきたれど漏らしつ。その日ぞ出でぬ給へる。御
容貌昔の御光にも亦多くそひて、ありがたくめでたく見え給ふを、
このふりぬる齡の僧は、あいなう涙もとどめざりけり。

通釋

お佛名を管むのも、も早や今年きりだと思し召されるせいか、いつもよりも格別に錫杖の
聲々などはれに思召される。僧たちが、源氏の壽命の長いやうにお祈りをしてゐるをおききな
るにつけても佛のお聞きになることが傍から見てもきまりがある。雪が大そう降つて、がつちりと
積つてしまつた。お佛名會がすんで導師たちが退出して行くのを、御前にお召しになつて、盃など
下さるにも、平素の作法よりは格別もてなされて、引出物なども特別におやりになる。長年の間、
久しく源氏の邸に参り、朝廷へもお仕へ申して、朱雀院にもよくお見知りなれてお出でになる御導

師が、頭はだん／＼白髪に變つて、そこにゐるのも、源氏はあはれと思召される。いつものやうに、
宮達や上達部などが大勢おいてになつた。梅の花がわづかに色づきはじめて、雪のために一しほ美
しく見えた折が面白いのに、丁度管絃のお遊びなどもあるべきであるが、やはり今年一つばいは、
音楽の音もむせび泣きさうな心持がなざるので、折につかはしいものを吟じたりなどばかりなさ
れる。さうさう——源氏は盃のついでに、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてむ

——春までの命があるのやらないのやら分らないから、せめて雪の中にわづかに色づきはじめ
た梅を、かざしにして心やりともしよう。

導師の御かへし、

千代の春見るべき花といのりおきてわが身ぞ雪と共にふりぬる

——あなた様が千年の春を保たれて御らんになるべき花とお祈り申しておきまして、私共はこ
の通りふる雪と同じ色になつて年をとつたことでございます。

他の人々も澤山歌をよんでおいたが、こゝには書きもらしてしまつた。その日はじめて客間にお
出でになつた。御容姿は昔の御光の上にもまた多く光が添はつて、世にも珍らしくお立派にお見え
になるのを、この年をとつた僧は、ただわけもなく涙をとどめなかつたのであつた。

年暮れぬと思すも心細きに、若宮の、^な「懺」やらはむに、音高かるべ
きこと、何わざをせさせむと、走りありき給ふも、をかしき御有様を

見ざらむ事と、よろづに忍びがたし。

もの思ふと過ぐる月日もしらぬまに年も我が世もけふや盡きぬる

朔日のほどのこと、常より異なるべくと掟てさせ給ふ。親王たち大臣の御引出物、品々の祿どもなど、二無う思し設けてとぞ。

通釋

年も暮れてしまつたと思ひになるのも心細いのに、匂宮が、「おにやらひをするのに、音高くするには、どうしたらよいであらう」と走り廻つてをられるにつけても、出家してしまつたら、もうかはい御様子も見られなくなつてしまはうことと、萬事につけて悲しみに堪へがたい。

もの思ふとすぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日やつきぬる

——物思ひのために、すぎて行く月日も知らない中に、年もくれわが世も今日でつきてしまつたであらうか。

元日拜賀の折のこと、いつもより格別に鄭重にするやうにお指圖になる。親王方や大臣たちへの御引出物や、その他の色々の祝儀などを二つとなく立派に御用意になつたとか。

源氏物語 後篇 終

枕草子 [前篇]

鳥野幸次

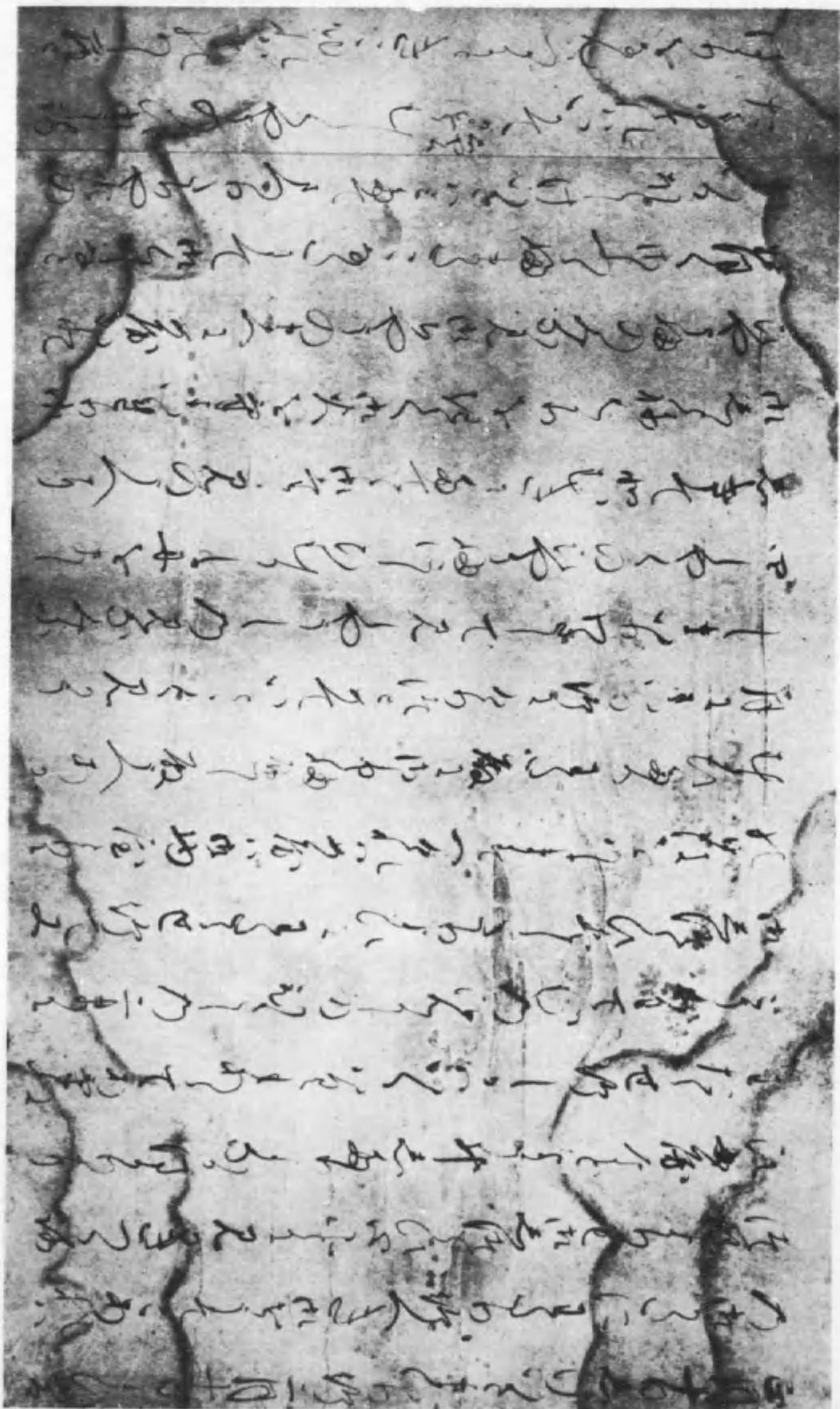
枕草子 前篇 目次

枕草子繪卷

解 說	一
詞 書	四

總 說

一 序 言	一
二 時代の概観	三
重要事項表	一
三 清少納言の家系	一七
四 清少納言の經歷	二九
五 清少納言の性格と其の文章	四一
六 枕草子といふ題號	五五

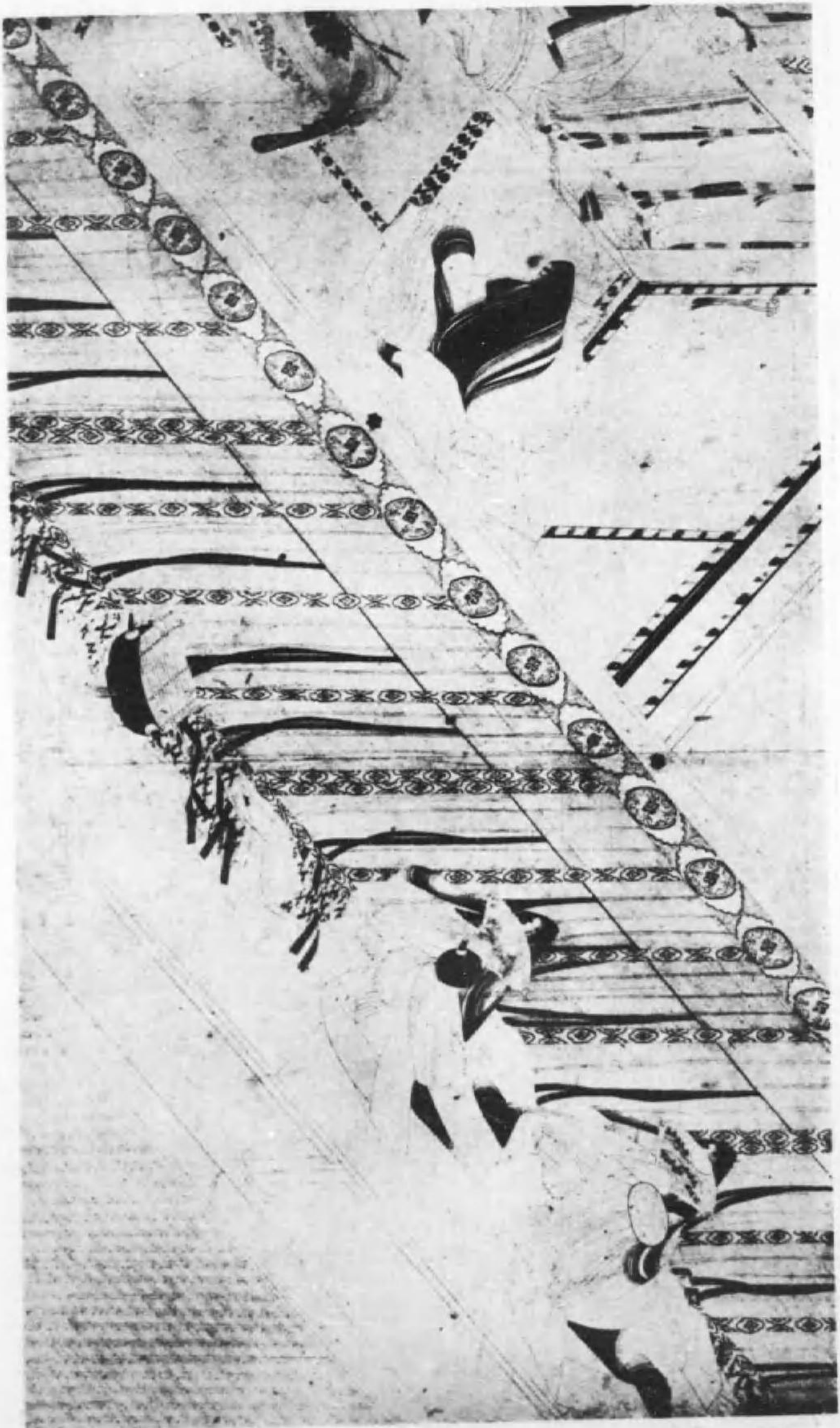


批草子繪卷一

七 諸本並に註釋書
本文解釋

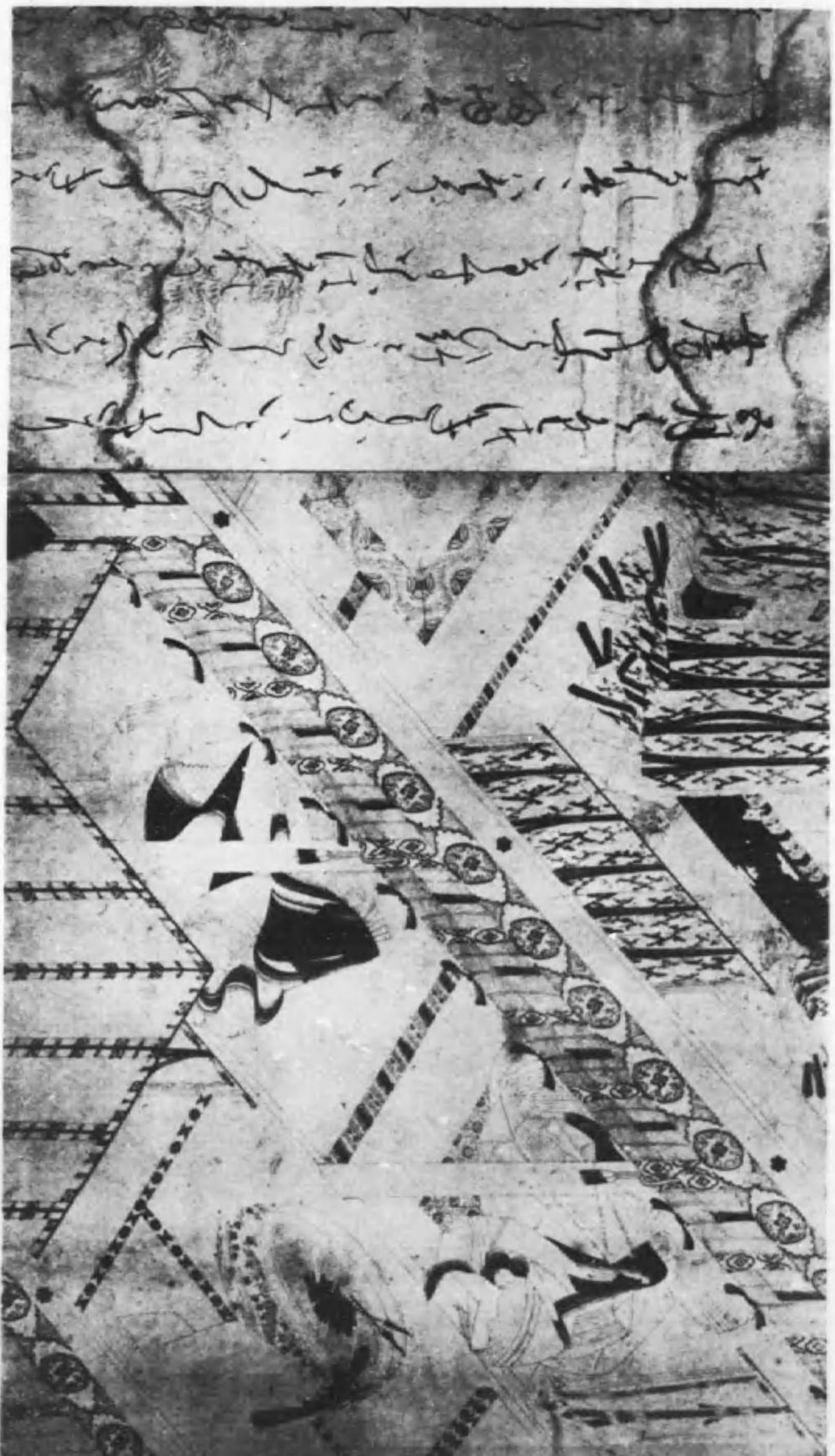
三十二段

— 目次終 —



比草子繪卷二

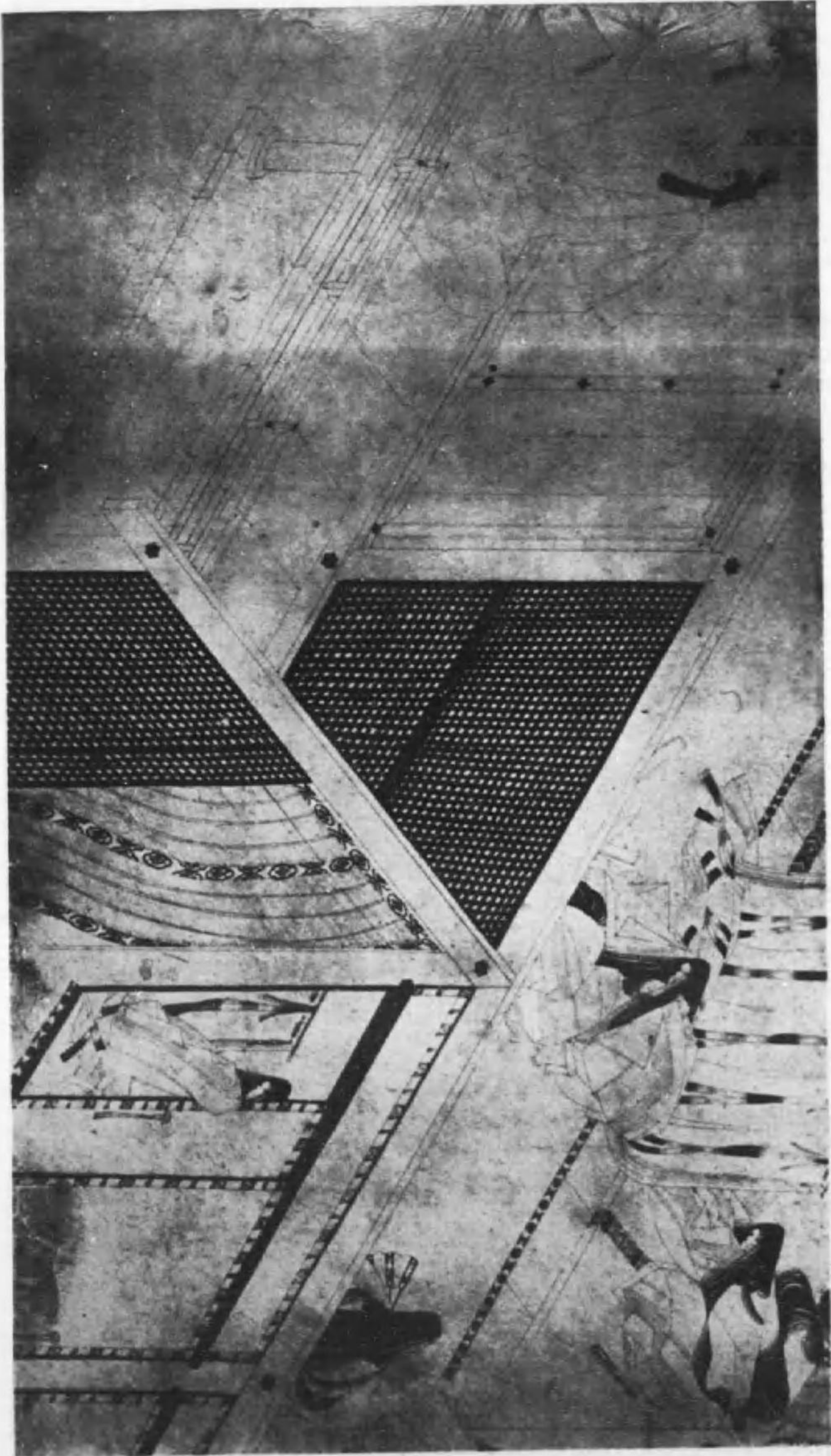
浪景舍春宮にまゐり給ふ其一



比草子繪卷三

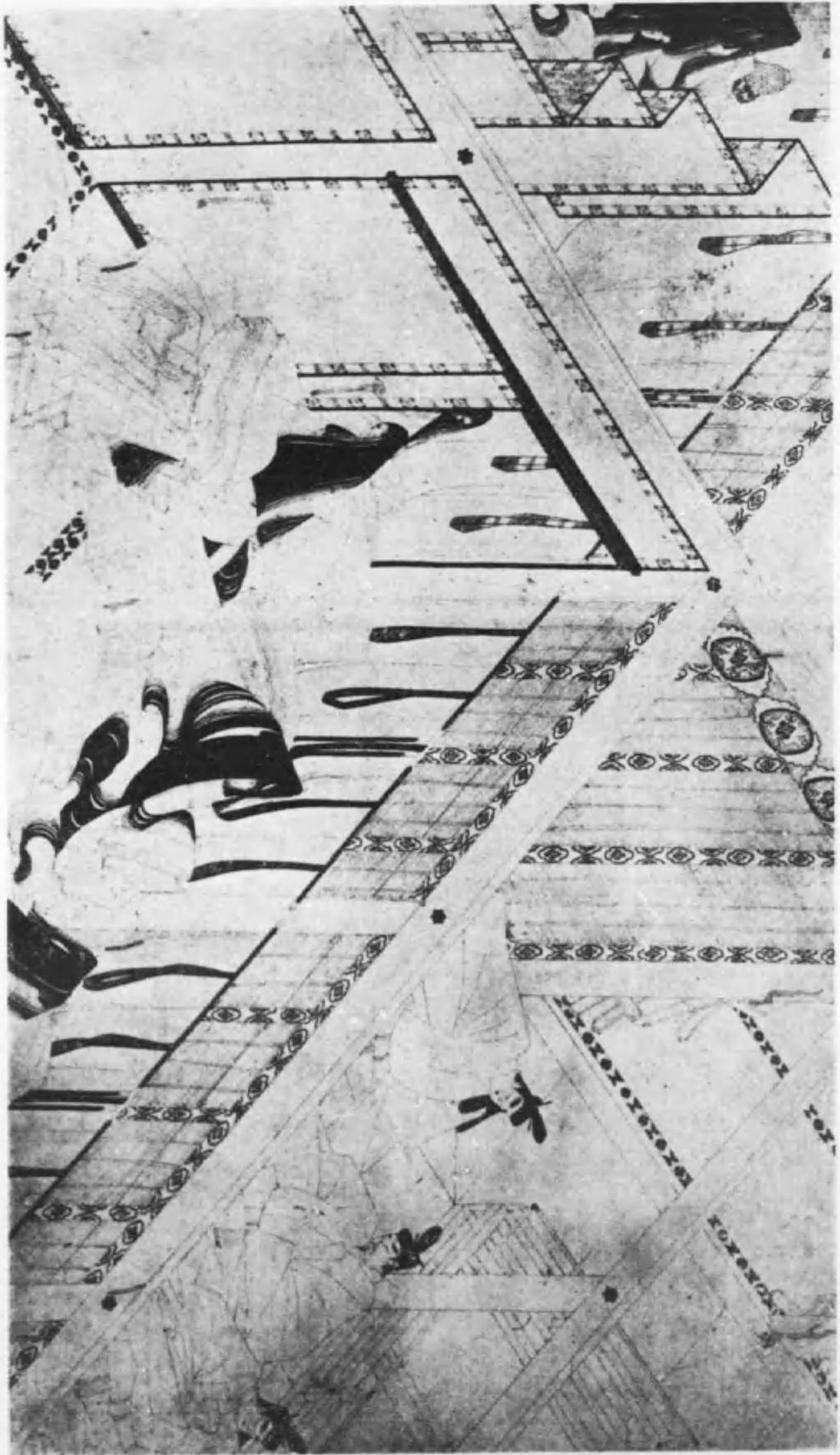
浪景舍春宮にまゐり給ふ其二

吳竹をこの君といふこと



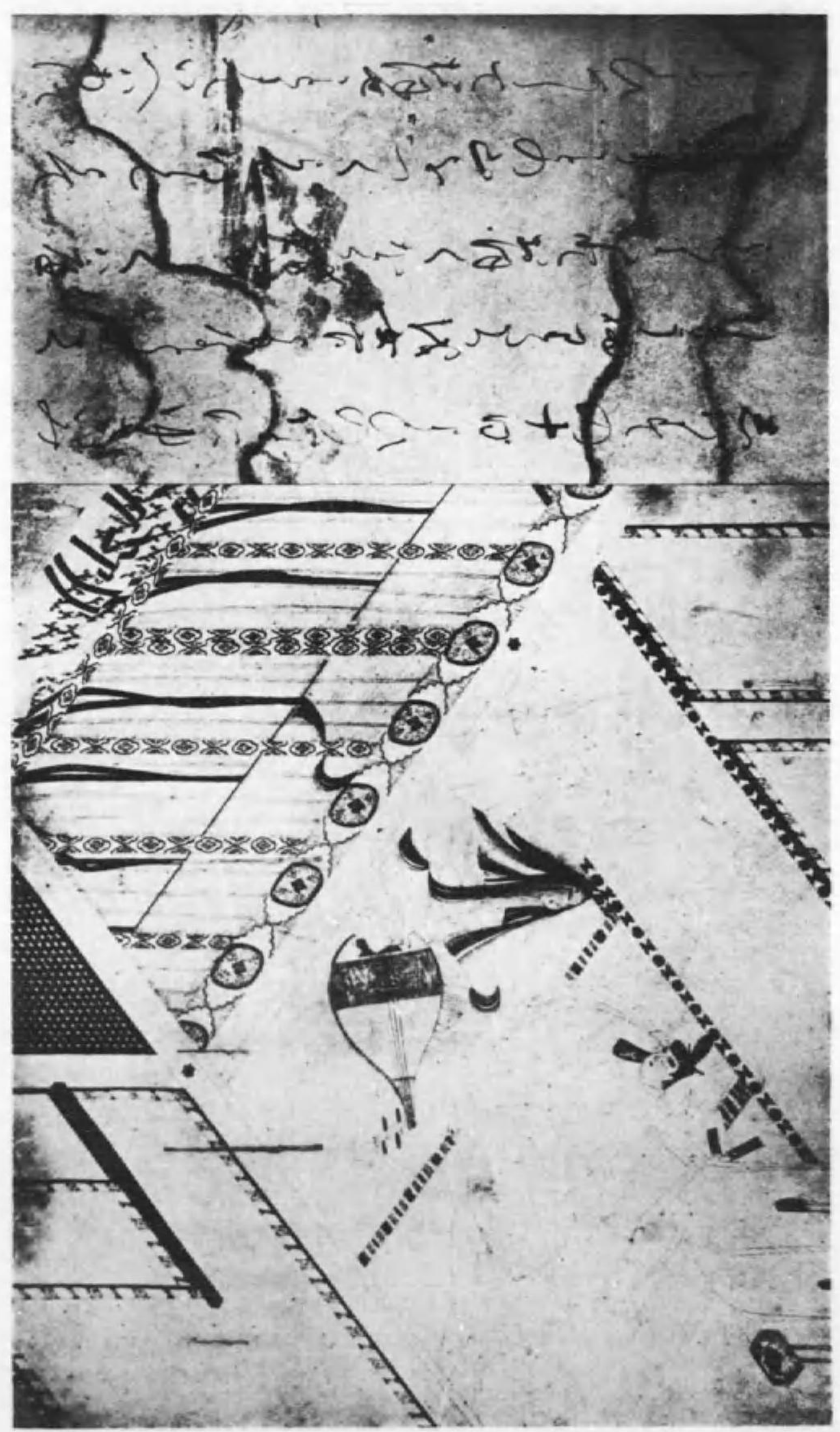
枕草子繪卷四

職の御書子にて供養の圖



枕草子繪卷五

無名といふ狂遊のこと

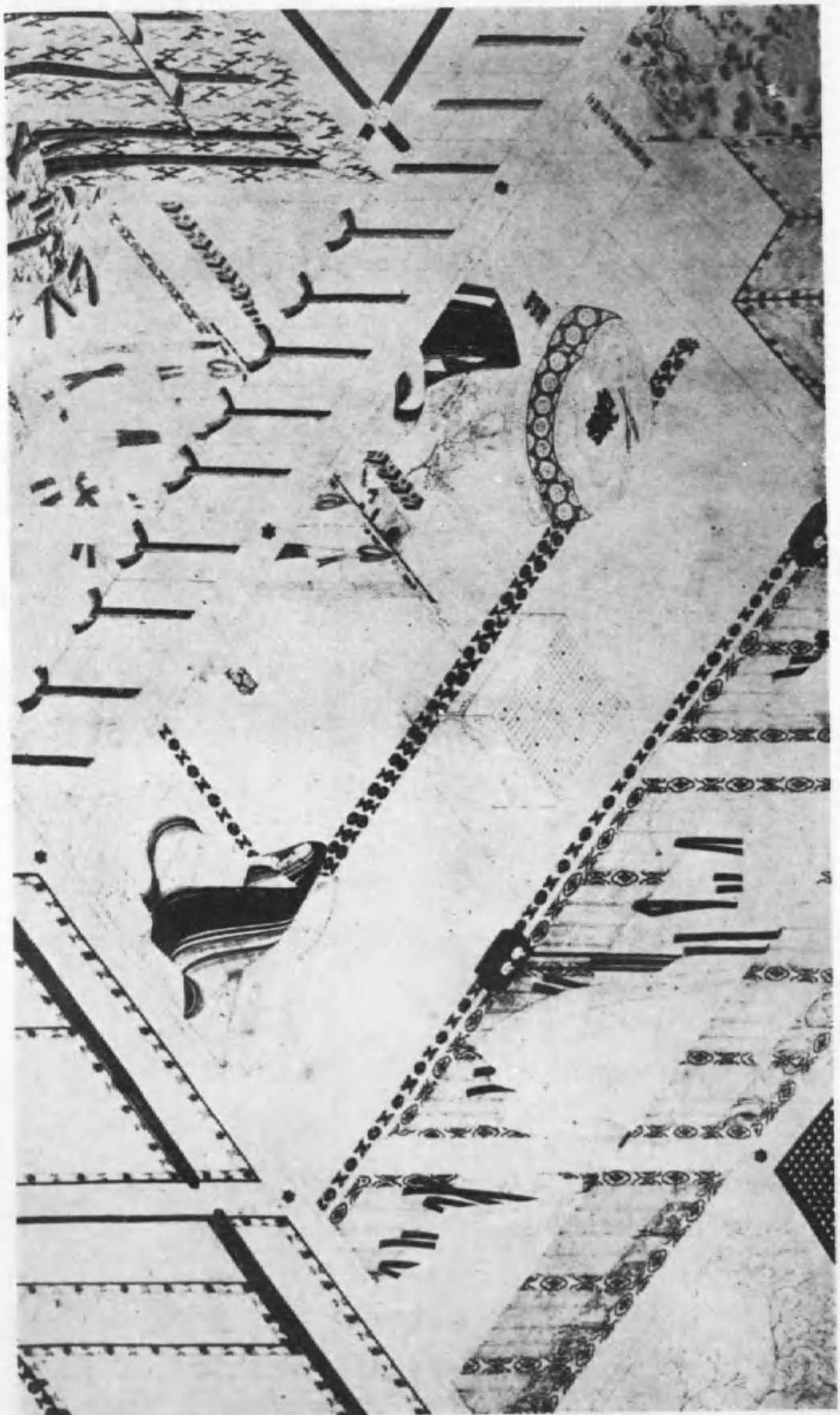


枕草子繪卷 六



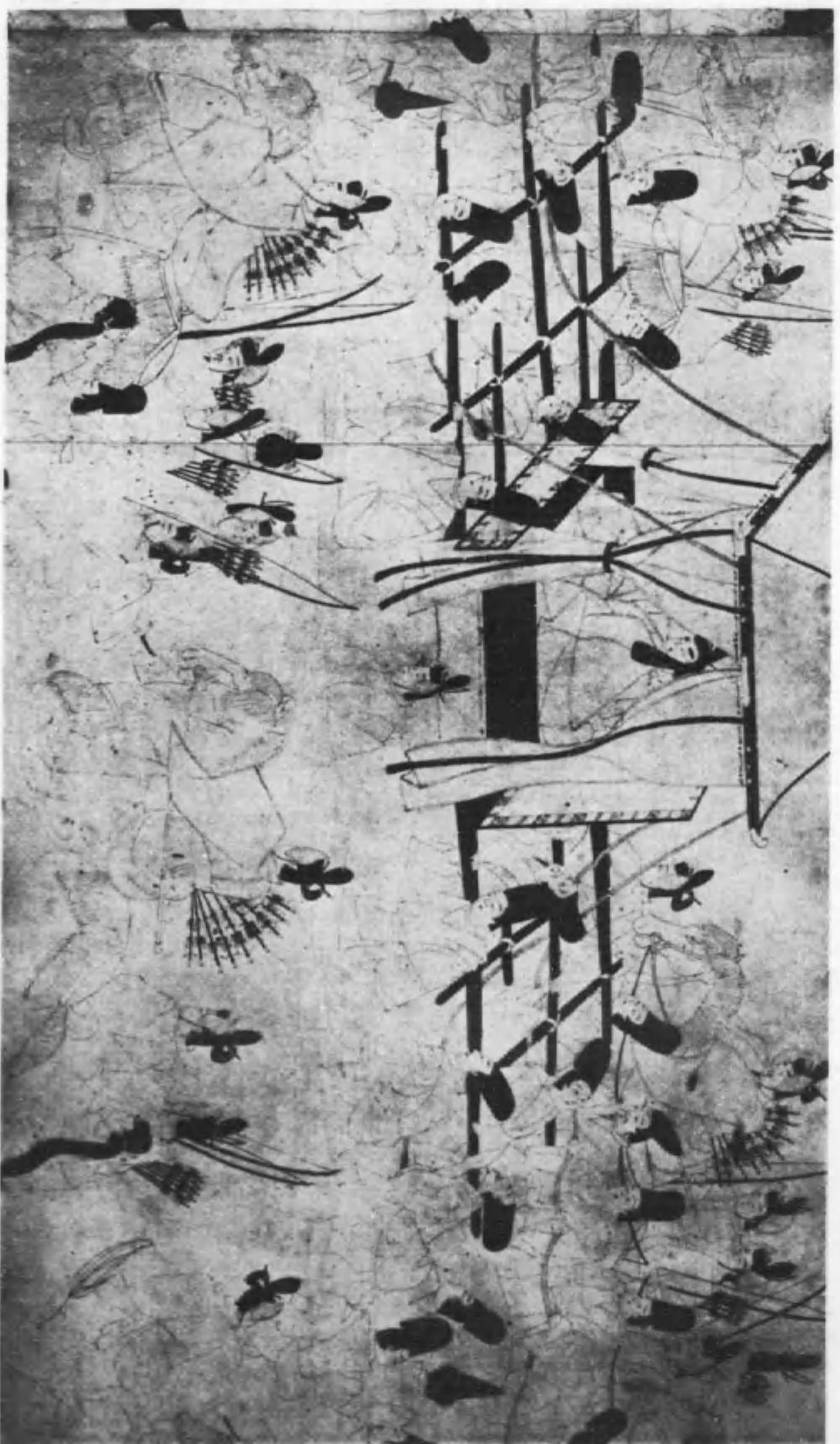
侍共をめてして雪山をつくる

枕草子繪卷 七



齊院より卯榎を贈らる

枕草子繪卷 八



八幡の行幸よりかへらせ給ふ 其一

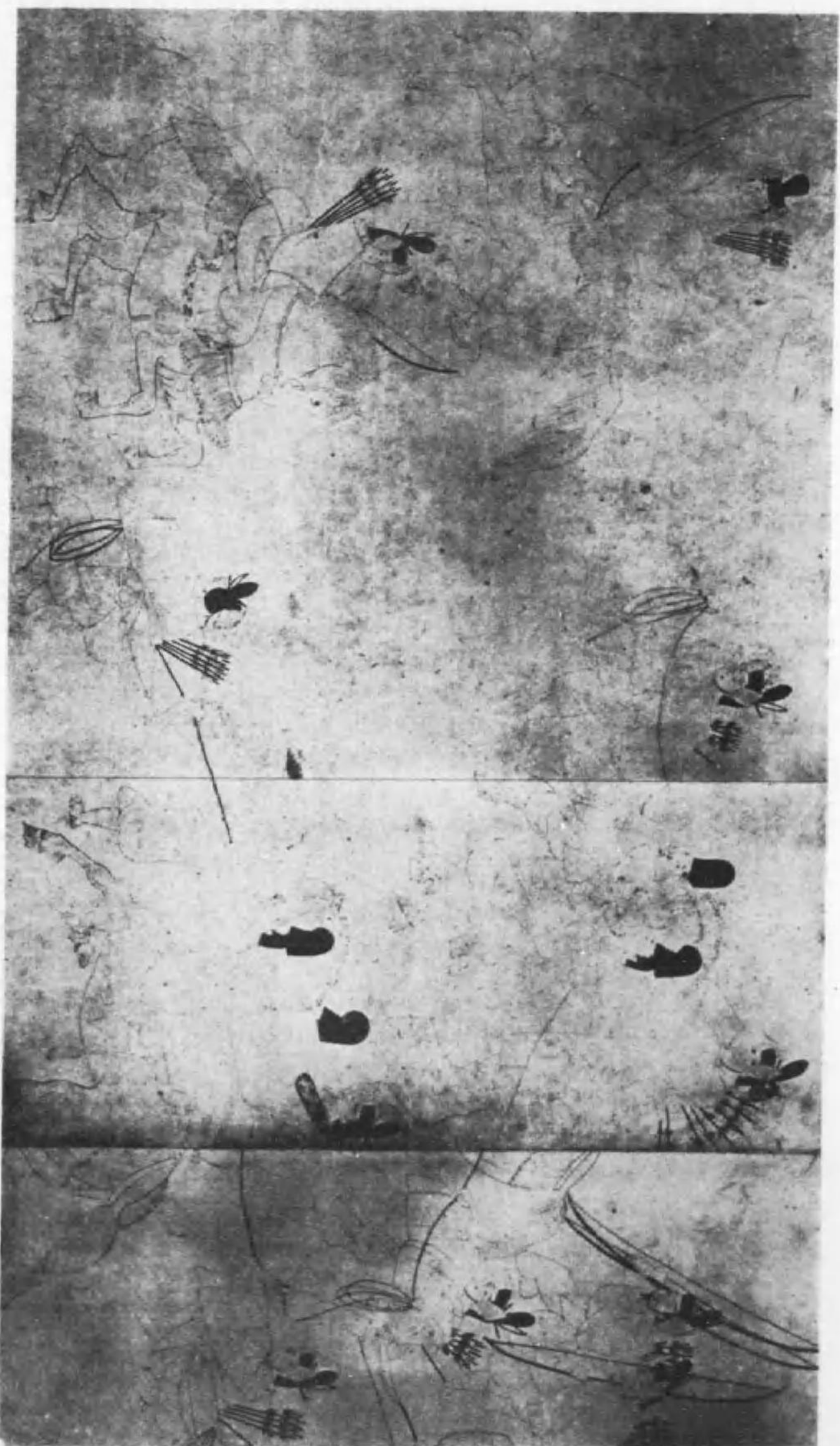
枕草子繪卷 九

八幡の行幸よりかへらせ給ふ 其二

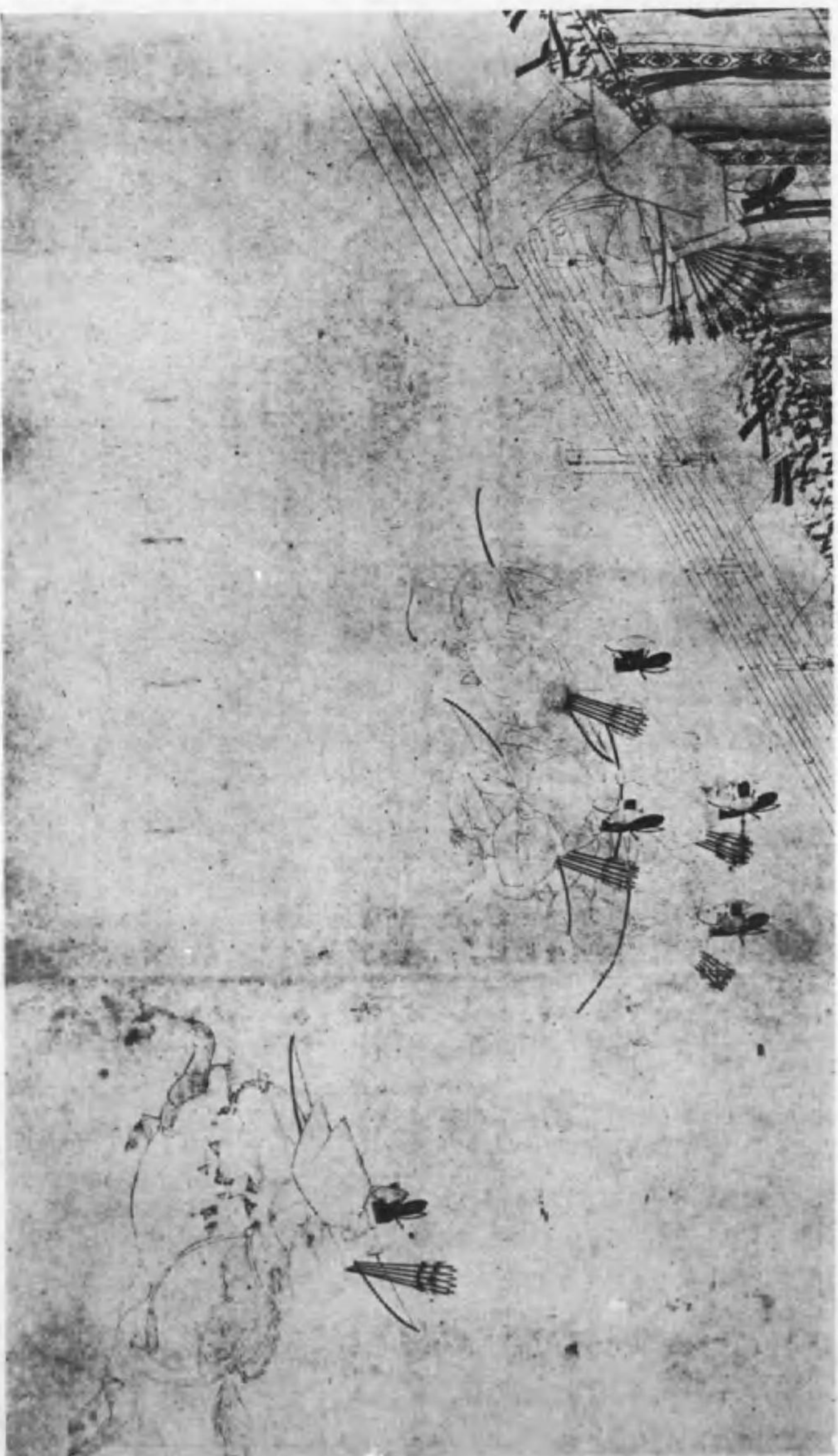


枕草子繪卷十

八幡の行幸よりかへらせ給ふ 其三



枕草子繪卷十一



枕草子繪卷 十一

枕草子繪卷(淺野侯爵家藏)解説

此の繪卷は、竪八寸四分、長さ三丈二尺九寸五分の紙本一卷、「後光嚴院宸翰繪女筆」とのみあつたので、是れが枕草子繪卷である事の知られたのは、近時の事に屬する。即ち大正十一年八月發行の國華、第三十三編第二冊に於いて獅崎庵氏の解説を附して、繪と詞との一部が發表され、其の後大和繪同好會で全部を複製して世に弘め、雄山閣發行の日本繪卷物集成第五卷にも、繪全部と詞の一部とを收め、是れには田中一松氏の解説が添うてゐる。全部と云つても、詞七段、繪七段に過ぎぬけれども、源氏や其の他の物語類の繪卷は、平安末期の方、多く作製されたに拘らず、枕草子には繪卷のないものと考へられてゐたのに、此の一卷の世にあらはれたのは、實に悦ぶべき事である。繪は即ち白描で、時代その他に就いては、松岡映丘氏の繪卷物小釋に「謹嚴な線畫で、濃淡二調の墨色を局所に施し、人物の口唇に朱色を點じたのみで、却て豊富なる色彩感を暗示して居る。もと後光嚴院宸翰繪女筆と傳へられ、筆者は明かでないが、南北朝を下らぬ年代の製作であらう。源氏繪をはじめ、富麗な賦彩を施した宮殿畫は多いが、この種の白描は珍らしく、多彩の繪に飽きた時代の反映であらう」といつてをられるのが、大體専門家の間の定説であらう。私も嘗て侯爵家に就いて原本を一見した事があるが、實に細い線條を用ひて、人物はいふまでもなく、宮殿調度の類をも、極めて丹念に描寫したものであるが、複製本ではそれを十分にあらはし得

ぬのは遺憾である。

詞には此の時代通有の假名ちがひが多く、語句にも流布本とは出入がある。中でも「しはす十日よひのほどに」の段に「けふこの山つくる人には日三日たふへし又まいらさらんものはおなしからすとよめむなといへは」とあつて、古本と一致し、意もよく通ずるが、徳川時代のもものでは、木活字本に「けふこの山つくる人にはろく給はすべし雪山に参らざらん人にはおなじからずにとよめよなどいへば」慶安刊本同じ。春曙抄本、盤齋抄本も、末の所が「おなとなつてゐて、解けぬ事はないが、意は別の事になる。是を以て見ても、此の本が古本と同一系統に屬する、好考本たる事は知られるが、如何にも段數の少いのは惜しい。それから「めてたきことをみきくには」の段の「八幡の行幸のうづらせ給に」とよめるのは、なほ「かへらせ」の筆づかひが、不十分に終つたものなのであらう。

さて茲に載せたのは、繪は全部であるけれども、詞は割愛し、別に活版に付したものを掲げる事にした。なほ其の詞と繪との關係は、次の通りであるから、對照して参考に供せられん事を望むのである。

詞第一段 「正月十日しけいさまいり給云々」より七十四行。(金子元臣氏の評釋本、九十段の初)

繪一段、二段

詞第二段 「五月ばかり月もなう云々」より三十行。(同、百十八段)

詞第三段 「故殿の御ために云々」より三十五行。(同、百十六段)

繪三段

詞第四段 「無名といふひわの御ことを云々」より七行。(同、七十九段)

繪四段

詞第五段 「しはすの十日よひのほどに云々」より十九行。(同、七十五段の中)

繪五段

詞第六段 「つほねへいとくをるれば云々」より二十二行。(同、同段中の末)

繪六段

詞第七段 「めてたきことをみきくには云々」より二十行。(同、百九段の大部分)

繪七段

枕草子繪卷 (淺野侯藏) 詞書

正月十日淑景舎しけいさまいり給。二月十日よひ宮用意の御かたにわたり給へき御せう消息そこあれば、「つねよりも御しつらひ心ことにみかきつくる」ひ、女房用意なとよういたり、よなかはかりに「わたらせ給しかは、いくはくもあらてあげぬ。」登華殿とうくわてむのひんかしのひさしの二まに「御しつらひはしたり、よひにわたらせ給て、又」の日はをしますすへければ、女房は御納屋とりに「むかひたるわた殿にさふふへし。(マ、)殿うへあか」月にまいる給にけり、つとめていとくみかう御格子しまいりわたして、みしやうしのみなみに「四尺しやくのひやうふ、にしひむかしにをまし」しきて北むきにたて、御たみ帳のうへに「御しとねはかりをきて、御火をけまいれり、御」ひやうふのみなみ御ちやうのまへに女房いと「おほくさふらふ、またこなたにて御くしなと」まいるほど、しけいさはみたてまつりたりやとの「たまはすれば、いかてかしやくせむしくやうのひ御うしろ」はかりをなん、はつか備かにときこゆれば、そのはしらと屏風ひやふとのもとによりて我うしろより見よ、いと「めてたく見えさせ給、たてまつる御そのいろ」こ

とにやかて御かたちのにほひあはせ給そ、「なをことよき人もかうやははしますらんと」ゆかしき、さていさりいらせ給ぬれば、やかて御「屏風障子にそひつきてのそくを、あしかむめり」うしろめたきわかかなときこえこつひとくも「おかし、さうし障子のいとひろうあきたれはいとよ」くみゆ、うへはしろき御そともくれなゐのはり」たるふたつはかり、女房裳のもなめり、ひきかけて「おくによりてひむかしむきにをすれば、た」御そなとそみゆる、しけいさはきたにすこしより「てみなみむきにおはす、こうはい」とあまたこく」うすくて、うへにこきあやの御そ、すこしあかき小鞋蘇枋こうちきすわうのをり物、もえきのわかやかなる」かたもんの御そたてまつりてあふきをつと」さしかくし給へる、いみしうけにめてたくうつく」しとみえ給、とのはうす色の御直衣なをし、もえきのおり物の」さしぬき、くれなゐ(マ、)のの御そとも御紐ひもさしてひさ」しのはしらにうしろをあて、こなたむきにおはし」ます、めてたき御ありさまをうちえみつゝれいの」たはふれことせさせ給、しけいさのいとうつくしけ」にゑにかいたるやうにてゐさせ給へるに、宮はいとやす」らかにいますすこしおとなひさせ給へる御けしき」の、くれなゐの御そにひかりあはせたまへる、なを」たくひはいかてか見えさせ給、御てう手水つまいる、かの「御かたのはせむゑうてん貞觀殿をとりてとう」女二人童下仕しもつかへ四人してもてまいるめり、から」ひさしのこなたのらうにそ女房六人はかり

さふらふ、「せはしとてかたへは御おくりしてみなかへりに」けり、さくらのかさみ、もえきこうはいなといみし
う、かさみなかくひきてとりつきまいら「するいとなまめきおかし、をり物のからきぬ」ともこほしいて、すけ
まさのむまのかみの「むすめ少將きたのさいしやうのむすめさい相」の君なとそちかうはある、おかしとみる程に「
こなたの御てうつは番のうねへのあをすそ」このもからきぬ、くたいひれなとして、おも「ていとしろくてしもなと
りつきまいる」程、これはたおほやけしうからめきておかし、「をもの、をりになりてみくしあけまいり」て、く
ら人も御まかなひのかみあけてまいら「するほとは、へたてたりつる御ひやう風もをしあ」けつれば、かいまみ
の人かくれみのとられたる「心地してあかすわひしければ、みすとき」丁となかにて、はしらのとよりそみたて「
まつる、きぬのすそなどはみすのみにみなをし」いたされたれば、とのはしのかたより御らんし「いたして、あ
れはたそや、かのすみのまより」みゆるはと、かめさせ給に、少納言かものゆか「しかりて侍ならんと申させたまへ
は、「あなはつかし、かれはふるきとくいを、いと」にくさけなるむすめとももたりとも」こそみ侍れなどの給御氣
色いとし「たりかほ也」

(繪) 第二圖、第三圖

(淑景舍春宮にまわり給ふ)

五月はかりつきもなういとくらきに、「女房やさふらひ給とこゑくしていへは、いて」て見よれいならすいふはた
れそとよとおほ「せらるれば、こはたそいとおとろくしうきは」やかなるはといふ、物はいは「みすをもたけて、」
そよろとさしいるゝくれ竹なりけり、をいこの「君にこそといひたるをきゝて、いさくこれまつ」殿上にいきて
かたらむとて、式部卿宮の源中「將六位ともなとありけるはいぬ、頭辨はとまりた」まへり。あやしうてもいぬる
物ともかな、御せん「の竹をおりて歌よまむとてしつるを、おなし」くはしきにまいりて女房なとよひいてきこ「ゑ
てとてきつるに、くれ竹の名をいとく」いはれていぬるこそいとをかしけれ、たかを「しへをきゝて、人のなへ
てしるへうもあらぬ事をはいふそなどの給へは、たけの名とも「しらぬものをなめしとやおほしつらんといへは、」
まことにそはしらしをなどの給、まめことなど「いひあはせてみ給へるに、うへてこの君とし」ようすとすむしてま
たあつまりきたれば、「殿上にいてひきしつるほいもなくては、なとかへ」り給ぬるそと、あやしうこそありつれと

のた」まへは、さることにはなにのいらへをかせん、なか／＼」ならん、殿上にていひのゝしりつるを、うへもきこしめしてけうせさせおはしましつとかたる。「辨もろともにおなしことをかへす／＼すんし」たまひていとをかしければ、人々みなとり／＼」に物なといひあかしてかへるとも、なをおなし」ことをもろこゑにすして左衛門陣ちん入まで」きこゆ」

(繪) 第四圖

(吳竹をこの君といふこと)

故殿の御ために月ことの十日經佛など」供養くやうをさせたまひしを、九月十日しき」の御さうしにてせさせ給、かむたちめ殿上人」いとおほかり、清範 講師せいはんかうしにて、とくことゝも」はたいとかなしければ、ことに物のあはれふ」かゝるまじきわかき人／＼みななくめり、はてゝ」酒さけのみ詩すむしなとするに、頭中將たゝのふ」の君の、月と秋と期して身いつくかといふこと」をうちいたし給へりしは、いみしうめてた」し、いかてさはおもひいてたまひけむ、おはし」ますところ_にわけまいる程に、たちいてさせ給」て、めてたしな、いみしうけふのれうにいひた」

りける事にこそあれとのたまはすれば、それけいしにとて物も見さしてまいり侍つる」なり、なほいとめてたくこそおほへ侍つれと」けいすれば、まいてさおほゆらんかしとおほせ」らる、わさとよひもいてあふところにては、なとかまろをまことにちかくかたらひ給はぬ、」さすかににくしと思たるにはあらずとしりたる」を、いとあやしくなむおほゆる、かはかりとし」ころになりぬるとくいの、うとくてやむは」なし、殿上などにあけくれなきおりもあら」は、何事をおおもひいてにせむとのたまへは、さら」なり、かたかるへきことにもあらぬを、さもあらん」のちにはえほめたてまつららんかくちおしき」なり、うへのおまへなにとでもやくとあつかりて」ほめきこゆるに、いかてかたゝおほせかし、かたはら」いたく心のおにいてきていひにくゝなり侍なん」といへは、なとてさる人をしも、うそめよりほか」にほむるたくひあれとのたまへは、それかにく」からすおほへはこそあらめ、おとこも女もけちか」き人思ふかたひきほめ、人のいさゝかあしき」ことなといへは、はらたちなとするかわひしう」おほゆるなりといへは、たのもしけのことや」との給もいとをかし」

(繪) 第五圖

(職の御曹司にて供養の圖)

無名といふ^{琵琶}の御^琴ことをうへのもてわたらせ給へる、見なとしてかきならしなとすといへは、ひくにはあらてを^緒なとをて「まさくりにして、これかなよ、いかにとか」ときこえさするに、たゞいとはなく名もなしとの給はせたるは、なをいとめ「てたしとこそおほえしか」

(繪) 第六圖

(無名といふ琵琶のこと)

しはすの十日よひのほとにゆき^雪いみ「しうふりたるを、女官ともなとして」みんな、いとおほくをくを、なしくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、「さふらひめしておほせことにていへは、あつ」まりてつくる、^{主殿}とのもりの宮人の御きよめに「まいりたるなとも、みなよりていと」たかうつくりなす、宮つかさなとも「まいりあつまりてことくはへ^興けうす、三四人ま」いりつるとのもつかさのものらも廿人はかり」になりけり、^里さとなるさふらひめしに「つかはしなとす、けふこのやまつくる人」には日三日たふへし、又まいらさらんものは「おなしか^数すと」

めむなといへは、き^衣つけ「たるはまとひまいるもあり、^里さと^遠をきは」えつけ^告やらす、つくりはてつればみやつかさ^衣めして、きぬ^衣ふたゆいとらせて、^緑ゑむに「なけいたしたるを、ひとつとりとりて」をかみつゝ、こしにさしてみなまかてぬ」

(繪) 第七圖

(侍共をめてして雪山をつくる)

つほねへいとく^松をるれば、さふらひの^長をさなるもの、^{袖葉}ゆのはのことくなるとの「ぬきぬ袖のうへに、あを^紙かみのまつ」につけたるをきてわな^きいて「たり、それはいつこのそとへは、^齋さい院より」といふに、ふとめてたうおほえてとりて「まいりぬ、またおほとのもりたれば、御帳に「あたりたるみかうしをこはむなと、かき」よせてひとりねんしくる、いとをもし、「かたつかたなればきしめくに、おとろかせ」給て、なとさはすることその給はすれ」は、さい院より御文の候はむにはいかてか「いそきあけ侍らさらむと申すに、けにいと」とかりけりとてをきさせ給へり、御文「あけさせ給へれば、五寸はかりなるう^{卯槌}つちふたつ」をう^{卯杖}つゑのさまにかしらなとをつゝみ

て、やま「たちはな、ひかけ、やますけなとうつくしけに」かさりて御文はなし、たゝなるやうあらむやはとて」
御らんすれば、うつえのかしらつゝみたるちむさき紙に「

やまとよむをのゝひゝきをたつぬれは「

いはひのつゑのおとにそ有ける、御かへりかゝせ給ほとも「いとめてたし。」

(繪) 第八圖

(齋院より卯槌を贈らる)

めてたきことを見きくには、なみたの「まつたゝいてきにそいてくる、^{八幡}やはたの」行幸のうつらせ給に、女院の
御さしきのあな「たに御こしとゝめて御せうそく申させ給、」世にしらすめてたきにこほるはかりけしやう」したる
かみゝなあらはれていかに見るしか「らむ、^{宣旨}せんしのつかひにてたゝのふのさいしやう」の中將の、御さしきへ
まいり給しこそいと「をかしう見えしか、たゝ^{隨身}すいしむ四人いみし」うしやうそきたる、むまそひのほそくしろう」
したるはかりして、二條のおほちのひろくきよ^{大路}」けなるに、めてたきむまをうちはやめていそ「きまいりて、すこ

しとをくよりおりて、そはの「みすのまへにさふらひ給しなといとをかし、」御返うけたまはりて、又かへりまいり
て御輿「のもとにてそうし給ほとなといふもおろか」なり、さてうちのわたらせ給を見たてまつらせ」給らむ御心
ち、おもひやりまいらするは、とひ「たちぬへうこそおほえしか、それには^{長泣}なかな」きをしてわらはるゝそかし」

(繪) 自第九圖至第十二圖

(八幡行幸圖)

枕草子前篇

鳥野幸次

總說

一序言

凡そ文學上の作品に對しては、先づ其の辭句を解すると同時に、内容に通じ、詞章を味ふと共に、思想に觸れるべきで、此の兩方面にわたり、讀者は常に批評眼を光らせつゝ、其の作物を鑑賞せねばならぬ。それには第一に時代を知り、作者を知り、若し序跋等のある書ならば、初に之を讀んで、其の書の由來を悟り、それから徐に本文に入るべきである。

とはいへ、是れが現代文であるならば、辭句は格別問題でないのみか、時代、作者等も大方既知の事に屬する。けれども時代文である時には、用語一つでも、出典を明らかにしたり、適譯を求めようとするには、相當骨が折れる。況や其の時代の制度、文物に屬する、職官とか、儀式とか、信仰とか、又は衣食住とかいふ類の事になると、

各専門の一分科を爲すほどで、容易ならぬ事である。だといつて、是れがわからなくては、古典が解けたとはいへぬ。それ故、先づ之を勉めねばならぬ。是れが即ち今日の註解上の語でいふ語釋である。

語釋が出来れば、次の文意を譯すること、即ち通釋は何でもない様に思はれるか知れぬが、決してさうでない。まして思想の問題になると、是れにはどうしても、讀者の見識が必要なので、古人は「眼光紙背に徹る」といふうまい語で之をあらはしてゐるが、そこに至るには、やはり學問や經驗が基礎を爲すのであるから、常々細心の努力を拂ひ、寸を積んで尺に満たしめる態度であらねばならぬ。

是れは一般修學の要で、實にむづかしいものである。とはいへ、或時期の限られた、入學とか受験とかの爲に必要な學書は、そんな面倒なものではない。語釋の側で、最も困難とされてゐる、有職故實の如きも、平安時代、武家時代等に分けて、一通り記憶すれば、それが其の時代の書物には皆應用が出来る。其の他の用語の如きも亦同じである。されば項なり語句なりを、徒に語記する様な事はせずに、成るべく綜合し統一して、應用力を盛にすべきである。数の多い學書を別々なものとせず、其の間の關係連絡を求め、甲の知識を以て乙に對すべきである。それには多讀もせねばならぬが、其の中の一種を最も精讀して、之を基礎にするがよい。今の學校教育では、多くの教科書に就いて、或部分的の教授をするのみで、自然散漫に流れ、どうも是れが出来て居らぬ様に思はれるのは、甚だ遺憾な事である。

さて私の講義は、枕草子の成立した時代、作者、諸本、註釋書等について略説し、本文講義に移るので、是れに

は年代のわかつてゐるものの中で、其の最も古いのから順に講じて、次に「何は」、「何々するもの」等に及ぼす積りである。教室に於ても、此の種の講座に於ても、其の講ずるのは代表的の部分を選び、他は自然割愛する事になるから、是れは讀者の自修に俟たねばならぬ。而して通釋はわりあひに委しく書いてあるから、讀者は之を單に本書の豫備知識又は研究の参考とのみせず、解釋の一端とも考へて、讀まれん事を望むのである。

二 時代の概観

平安朝は誰もいふ如く情趣偏重の時代である。朝の重事は三節會、五節句であり、五節、臨時祭であり、公卿殿上人の職能は、詩歌管絃である。而も其の最盛爛熟の時期は、寛和、永延から寛弘度にかけてであり、紫清二女が形管を揮つた時代である。宮殿調度からはじまつて、服飾遊玩の類に至るまで、華美を極め、織麗を盡した。而して是等の佳人才子の周旋し、應酬する所は、山紫水明の都であり、柳暗花明の巷である。長裾を引き、彩袖を翳し、口から迸る一言半句も、朗詠や和歌の引句で美化され、無限の餘韻を言外に漂はせた。甘谷といふ人の雛の句に、

物いはば皆歌ならん雛の君

といふのが、畢竟此の雛の活きて動いた世界、其のいふ事は皆歌であつた時代である。近藤芳樹の寄居歌

談、卷一に「風俗の柔媚になれるは式部(紫)も少納言(清)も、罪人の中なり」といつてゐるが、是れは甚だしい酷薄の論で、紫清二女は寧ろ此の時代の美しい情趣を玩味すると同時に、客觀的にこれが描寫をしたもので、是れあればこそ、吾人が此の時代の感情生活に觸れ、夢の世界に逍遙する事が出来るのである。

といへば、淨土か天國か、煩惱もなく、罪障もなかつたかの様に聞えるであらうが、一旦眼を政治史の方面に向けると、そこには又しばしば恐ろしくも忌はしい慘劇が繰り返された。而してそれはいふまでもなく、藤原氏が政權争奪の策謀から胚胎した。少しく溯つて述べるが、先づ忠仁公良房が其の女の明子を文徳天皇の後宮に奉り、其の御腹に惟仁親王がお生れになつた。其の御兄には既に紀靜子の御腹である惟喬親王がおりになり、天皇の御寵愛も深かつたに拘らず、良房を憚つて、東宮をお選びになる場合には、之をさしおいて御當歳の惟仁親王をお立てになつた。是れが後世に惟喬、惟仁兩親王の位争ひなどいふ物語も出來た所以である。(平家物語卷八、名都羅の事の段)かくて惟仁親王は九歳で天位を踐まれる事になつたので、外祖父の太政大臣良房は攝政と爲つて、政治の實權を握つた。是れが人臣攝政の始である。

此の良房の兄長良の子で、良房の嗣とした昭宣公基經は、又其の女の隱子を醍醐天皇に奉つたが、是れがやがて朱雀、村上御二代の母后となられたのである。それから前に立ちもどるが、清和天皇の第一皇子で、長良の女の高子の御腹である陽成天皇が、同じく九歳で即位さるゝに際しては、右大臣基經は左大臣源融を越えて攝政と爲り、後に太政大臣に上つた。是れが光孝天皇の御代を経て、仁和三年宇多天皇が二十一歳で即位さるゝに及び、攝政を

罷め、改めて關白の宣旨を蒙つた。是れが關白といふ職官の始である。

何にしる此の忠仁公、昭宣公の二代の勢力は非常なもので、是れ以來藤氏の地位は、牢乎として動かすべからざるものとなつた。常用の手段としては、其の女を後宮に容れ、其の御腹の天皇を擁し、自らは朝家の外戚たる地位を利用したので、天子御幼少の時には攝政と爲り、御成人あそばしてからは關白に任じ、絶大の勢力を振つて申關白や御堂關白の全盛時代に及んでゐる。大鏡の作者が道長の榮花を讚歎し、其の顛末を語らうとして、其の由來する本源に溯り、帝王の本紀を第五十五代文徳天皇から、大臣の列傳を次郎良房、五郎良相、太郎長良の父なる、左大臣冬嗣から始めたのも亦、當然の用意である。

平家物語卷一の「禿童の事」の段に「いかなる賢主の御政、攝政關白の御成敗にも、世にあまされたる程のいたづら者などの、傍に寄り合ひて、何となう誹り傾け申す事は、常のならひ」といふ様な事が書いてあるが、如何にも其の通りで、攝政忠平に仕へ、檢非違使を望んで得られなかつた爲に、憤怨關東に下り、反を謀るに至つたといふ、平將門の如きは此の側での代表的人物である。しかし山賊海盜は別として、當時一般社會の狀勢からも、かやうな脱線者はさう多く出る筈はなかつたのであるが、藤氏との對立者は時々現出したので、之を排擠する爲に弄した手段は、随分陰險なものであつた。延喜の左大臣時平が、右大臣道眞に對して執つた行動、あまり表面には安和の左大臣源高明と、右大臣師尹との關係の如き、實に人をして戰慄せしめるものがある。榮花物語、月宴の卷に次の様な事が書いてある。

かゝる程に、世の中にいとけしからぬ事をぞいひ出でたるや。それは源氏の左の大臣(高明)の、式部卿の宮(爲平)の御事を思ひて、帝(冷泉)を傾け奉らんと思し構ふといふ事いで来て、世にいと聞きにくくものしる。いでや世にさるけしからぬ事あらじなど、世の人申し思ふ程に、佛神の御ゆるしにや、げに御心の中にも、あるまじき御心やありけん、三月二十六日に、此の左大臣殿を檢非違使うち圍みて、宣命讀みのしりて、帝を傾け奉らんと構ふる罪に由りて、太宰權帥になして、流しつかばすといふ事を讀みのしる。

菅公の時のも同様の事情であり。伊周隆家の左遷も、相似た事柄である。此の事は後に述べる。

所謂黨同伐異で、他氏の對抗者を飽くまでも排撃して、一人の競争者が無いといつてもよい程にしてみました。即ち藤氏の思ふまゝの時代が来た。すると、我慾の所有者たる、人間のあさましさが忽ち燃えさかつて、同族排擠を始めた。其の最も甚だしいのが、兼通兼家兄弟の不和である。是れに關しては、榮華物語、花山天延二や、大鏡兼家傳に見えてゐるが、今は榮華のを引用して置く。

此の東三條殿(兼家)、關白殿(兼通)との御中ことにあしきを、世の人あやしき事に思ひ聞えたり。いかで此の大將(兼家)をなくしてばやとぞ、御心にかゝりて大殿(兼通)はおぼしけれど、いかでかは東三條殿は、なほいかで此の姫君(詮子)を内に参らせん、いひもていけば、何の恐ろしかるべきぞと覺しとりて、人知れず覺し急ぎけり。されど其のけしき人に見せ聞かせ給はず。此の堀河殿(兼通)と東三條殿(兼家)とは、唯閑院を隔てたりければ、東三條に参る馬、車をも大殿(兼通)には「それ参りたり、かれまうづなり」といふ事を聞こしめて、それかれ、そは追従するものはあなれ(兼通の言)など、くせなくしうのたまはすれば、いと恐ろしき事にて、夜などぞ忍びて参る人もありける。さるべき佛神の御も

よほしにや、東三條殿なほいかで、今日明日も此の女君(詮子)参らせんなどおぼし立つと、おのづから大殿(兼通)聞こしめて、いとめざましき事なり。中宮(煇子)のかくておはしますに、此の大納言(兼家)のかく思ひかくるもあさましうこそ。いかによろづに我を呪ふらんなどいふ事をさへ、常にのたまはせければ、大納言殿いとわづらはしくおぼし隔て、さりとともおのづからとおぼしたり。

兼通の女の煇子が、圓融天皇の中宮になつてゐるのに、弟兼家が其の女の詮子を後宮に容れようとの心構へで、着々其の實現を計つてゐるのを、かねて中のわるい兼通が聞知して、自分なり自分の女の對抗者の顯はれる事を恐れ、且は憤つたのであるが、此の兼通は間もなく貞元二年に悶々の情を抱きつゝ病歿し、やがて世の中は夢解の解き合せた通りになつた。大鏡、兼家傳参照 左大臣頼忠は代つて關白となり、翌年更に太政大臣に上り、源雅信と兼家とが大員として左右に相並んだ。當時頼忠五十五歳、雅信五十九歳、兼家は五十歳であつた。即ち同じ一族ではあり、年齢からいつても、官位からいつても頼忠が一人の人である。然るに圓融天皇は、師輔の女で兼通や兼家の兄弟である安子皇后の御腹であつて、自分とは何等外戚關係がない爲に、大鏡の傳に、

此の頼忠の大臣、一の人におはしまししかど、御直衣にて内に参り給ふ事侍らざりき。奏せさせ給ふべき事ある折は、布袴にてぞ参り給ふ。さて殿上に候はせ給ひ、年中行事の御障子のもとにて、さるべき職事藏人などしてぞ奏せさせ給ひ、うけたまはり給ひける。又ある折は、鬼の間に御門出でさせ給ひて、召ある折ぞ参らせ給ひし。關白し給へど、よそ人にておはしましければにや。

と書いた程の謹慎ぶりです。一條院位に即かせ給ひにしかば、よそ人にて、關白のかせ給ひにき」といふ如き、あざ

やかな退却振を示した。頼忠は斯の如く、明哲身を保つといふ風の人であつたので、其の終を全うした。

圓融天皇に繼いで、花山天皇が即位されたが、在位三年十九歳の御弱齡で、自ら宮中を脱して出家あそばされ、一條天皇の御代となつたが、御歳わづかに九歳であつたので、外祖父の御關係にあつた左大臣兼家が、太政大臣頼忠や、左大臣雅信をさしおいて攝政となり、朝權を掌にした。兼家の我は顔なる豪放振は、大鏡の傳にも見えて、頼忠とはおもしろい對照を爲すのである。

花山天皇の御遜位は、最愛の女御恆子の卒去に伴うて發した朕世の御思想が、直接の動機であり、表面の理由となつてゐるが、其の裏面で絲を引いたものは、主として父兼家の意を受けた粟田殿道兼で、此の邊の消息は、榮華の花山の卷や、大鏡の花山院の本紀、並に道兼傳等に詳述され、「粟田殿、花山院すかしおろし奉り、左衛門督(兼隆)小一條院すかしおろし奉り給へり。御門東宮のあたり、近づかでありぬべき御族といふ事、出で來にしぞかし」大鏡、と見え、又兼家の歿した時に、道兼の嘆きもせず、謹慎もしなかつたのは、「花山院をば我こそすかしおろし道兼傳、と見え、されば關白をも譲らせ給ふべきなり」^上との怨恨からだといふ。實にひどい人ではないか。

此の大入道殿子の道長を入道殿と稱兼家について、關白職に就いたのが、其の長子道隆である。道隆も父祖の故智にならひ、其の長女の定子を一條院に奉つて、權勢を擅にし、一門悉く榮花を極め、中關白家全盛の時代が展開した。即ち枕草子の時代である。然るに運命の神ほど世にあやにくなものはない。道隆の薨去が一家否運の發端で、續々悲痛事が發生した。即ち道隆の弟の道長が、其の姉の詮子皇太后と結託し、七日關白の道兼について、其の職

權を己に收め、定子中宮のあるに拘らず、其の長女彰子を後宮に進めたのは、恰も兼通の憤懣に堪へなかつた、兼家のやり方と一つであつた。かくして伊周隆家をして、自ら墓穴を掘らしめ、定子中宮をして血涙に咽ばしめ奉つた。一榮一落は是れ春秋といふもの、此の赫奕たる光明から、黄泉のどん底にも等しい暗黒への轉落は、あきらめでもあきらめきれぬ急變化であつたに違ひない。それも伊周隆家の如きはまだしも、最貴の御女性たる定子中宮の御上にとつては、何とも申し上げようもない。榮華物語、浦々のわかれの卷の此の條を讀んでは、いつも自然とあつい涙がにじむ。定子中宮こそは、藤原氏が常用の政權争奪の犠牲となつて、申すも畏れ多い事ではあるが、わづか二十五歳の其の御晩年を、最も惱みぬかれた御方ではなかつたらうか。

事新らしくいふまでもないが、清少納言は此の中宮の女房として、約十年御側に奉仕した婦人である。光明と暗黒との前後の兩極を、まざりと見てゐた人である。主人の光明は従者の光明であり、主人の苦惱は従者の苦惱である事は、いふまでもない。然るに其の枕草子には、唯此の兩極を通じて、専ら光明の側にのみ題目を求めて、宮中生活の長閑さ花やかさを強調せんと力めてゐる。嬉しさ快さには有頂天になつてゐるけれども、悲しさ辛さにはあまり情を動かした様にも見えぬ。是れは畢竟その側に觸れる事を避けたからである。それ故、此の時代を知らないで、枕草子を讀む時は、中宮の御身邊にそんな御變化のあつた事も氣づかぬ程である。「故殿の御爲に」(一一六段)とか、「故殿などおはしませで」(一二四段)とかの起筆の一行にさへ、無限の哀愁を感じるのには、其の裏面を知つてゐるからで、全く其文章の有する内容以外に屬する。藤岡博士が國文學全史に「枕草紙以外の清少納言こそ一篇の

同月二十五日、内大臣道隆の長女定子入内。年十五。同二月十五日、定子を女御と爲す。
五月五日、兼家攝政を辭し、改めて關白に任ず。同八日、兼家出家、道隆關白の宣旨を蒙り、二十六日攝政と爲る。年三十
八。

五月十日、兼家の二條京極第を永く佛寺と爲し、法興院と號す。

七月二日、兼家薨す。年六十二。

十月五日、女御定子を中宮と爲す。

正曆二年（一六五一）

二月十二日、圓融法皇崩す。御年三十三。御遜位の後八年。

七月二十七日、道隆上表、内大臣を辭す。攝政元の如し。

九月七日、中宮大夫道長、權大納言に任ず。年二十六。同日伊周、權中納言に任ず。年十八。

十二月一日、左大將濟時の女姪子。東宮（居貞親王。後に三條天皇）に參る。宣陽殿と稱す。

正曆三年（一六五二）

八月二十八日、伊周權大納言となる。

十一月二十七日、中宮、内裏より新造の二條院に遷御。

十二月十三日、興福寺の僧徒等、道隆の四十算を賀す。

正曆四年（一六五三）

四月二十二日、道隆攝政を罷め、關白と爲る。

正曆五年（一六五四）

二月二十日、道隆法興院内に建てたる、積善寺の供養を行ふ。中宮定子、東三條院詮子、同じく行啓。彈正尹爲尊親王、四
品敦道親王、右大將道兼以下の諸卿參入。

今年疫疾流行、去る四月より七月に至るまでに死する者甚だ多く、五位以上六十七人。

八月二十八日、内大臣道兼を右大臣と爲し、權大納言伊周を内大臣と爲す。年二十一。公卿相率ゐて伊周の小二條の第に赴
き、饗祿の事あり。

長徳元年（一六五五）

正曆六年二月二十二日、改元。

正月十九日、道隆の二女原子、東宮に參る。淑景舎と稱す。

三月九日、關白道隆病氣中、太政官並に殿上より奏下の文書は、内大臣伊周に觸るべき由の宣旨あり。

四月六日、隆家權中納言に任じ、六月十九日、正官に轉ず。

四月六日、道隆病に依りて入道す。中宮（定子）並に東宮女御（國史大系本、日本紀略の割註に、子とあれども、恐らく
中宮の御妹原子なるべし）彼の里第に行啓あり。同十一日、道隆南院に薨す。年四十三。

同月二十七日、右大臣道兼に、萬機關白の詔あり。同日除目あり、大納言道長を左大將と爲す。

五月一日、道兼薨す。年三十五。

同十一日、外記に仰せて云ふ、太政官申す所の文書、先づ權大納言道長に觸れて奉行すべしと。

六月十九日、道長右大臣に任ず。

今年四月より五月に至り。疫疾殊に盛なり、納言以上薨するもの八人、四位七人、五位五十四人、六位以下勝けて數ふべからず。

長徳二年（一六五六）

正月十六日夜、隆家等花山法皇を道に要し、射て袖に中て奉る。是れより先、伊周鷹司殿なる爲光の三女に通ひ、法皇は四の君に通ひ給ひしを、伊周はなほ三の君ならんと思ひ誤り、隆家に計りしかば、隆家は院を脅し奉らんが爲に、斯くばし奉れるなり。

四月一日、法琳寺、伊周が大元帥法（朝廷にてのみ行はるゝもの）を修する由を申す。

同二十四日、伊周を太宰権帥に、隆家を出雲權守に左遷せらる。去正月、花山院を射危ぶめ、又東三條院を呪咀し奉る由の、風聞あるを以てなり。

五月一日、隆家は配所に赴きしかども、伊周は脱出して赴かず。檢非違使ども中宮の御在所に参りて騒ぎのゝしる。今日中宮定子、自ら鉄を取り、髪を削りて尼と爲り給ふ。

同四日、伊周春日社より歸京して、配所に向ふ。

六月八日、中宮の此の間の御座所焼亡。仍りて亮高階明順の宅に渡御。

六月二十二日、中宮宮中に還り入らる。

七月二十日、右大臣道長左大臣に轉ず。同夜大納言公季の女義子入内。

八月九日、義子を以て女御と爲す。弘徽殿と稱す。

十月十日、伊周入京の由、其の實あり。隨兵を以て山崎に追ひ遣さる。

十一月十四日、右大臣顯光の女、元子入内。

十二月二日、元子を女御と爲す。承香殿と稱す。

同十六日、中宮定子第一皇女修子内親王を生み給ふ。

長徳三年（一六五七）

三月二十五日、天下に大赦す。東三條院詮子、御病惱の事あるに由りてなり。

四月、伊周隆家、赦に遭ひて召し還さる。

六月二十二日、天皇、東三條院に行幸。定子中宮、職御曹司に参り給ふ。

長徳四年（一六五八）

二月八日、故關白右大臣道兼の女、尊子入内。

三月四日、道長病に依り、出家すべき由を奏す。許されず。

長保元年（一六五九）

長徳五年正月十三日、改元。

六月十四日、内裏焼亡。天皇太政官に渡御。

同十六日、天皇一條大宮院に渡御。

八月九日、中宮職御曹司より、前但馬守平生昌の宅に移御。

十一月一日、道長の第一女、從三位彰子入内。年十二。

同六日、中宮、第一皇子敦康親王を生み給ふ。此の日、彰子を以て女御と爲す。御在所、藤壺（飛香舍）。

長保二年（一六六〇）

二月十日、女御彰子、立後の宣旨を蒙るべきに依り、内裏より退出。
 同十二日、中宮宮中に入り給ふ。
 同二十日、彰子を立て、皇后と爲し、中宮と稱す。即ち宮司を任せらる。元の中宮職を以て皇后宮職と爲し、定子を皇后宮と稱す。

三月二十七日、定子皇后、平生昌の宅に出御。
 四月七日、中宮彰子、宮中に入り給ふ。

五月二十六日、道長の家に於て法華八講を修す。五六月の間、東三條院並に道長、久しく重病を煩はるゝに由りてなり。

七月二十三日、中宮彰子、左大臣の土御門第より、權亮源則忠の堀河の宅に移御。

八月八日、皇后定子、生昌の宅より内裏に入御。

同二十日、尊子を女御と爲す。暗部屋の女御と稱す。

同二十七日、皇后本宮に還御。

十月十一日、天皇、一條院より新造の内裏に還御。中宮彰子入御。所々の饗あり。

十二月十五日、皇后生昌の宅に於て、第二皇女嬪子内親王を生み給ふ。翌十六日、皇后崩す。御年二十五。在位十一年。

長保三年（一六六一）

二月四日、左大臣道長の養子、右近權中將源成信、右大臣顯光の息男、右近少將重家と相伴ひ、三井寺に向ひて出家す。仍りて兩大臣驚きて彼の寺に向ふ。

十月九日、道長、東三條院の四十算を上東門の第に賀し奉る。天皇、中宮と共に臨幸。

十一月十八日、内裏焼亡。天皇職御曹司に渡御。

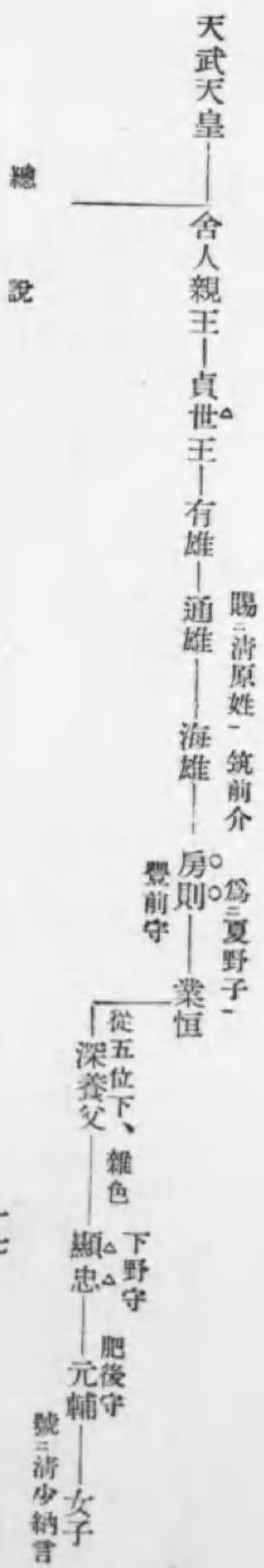
長保四年（一六六二）

三月一日、道長の家に於て、法華八講を修す。

八月三日、東宮の女御原子（淑景會）卒す。故關白道隆の第二女なり。

三 清少納言の家系

清少納言は、天武天皇の皇子舍人親王の裔たる深養父の曾孫で、肥後守元輔の女である。而して其の家系を詳にすべき清原系圖は、尊卑分脉、卷十二、諸家大系圖卷四、扶桑拾葉集等に載せたもの外、續群書類從、系圖部に七本ある。此の中第三本のみが庶子近澄。今諸家大系圖所載の者を挙げると、次の如くである。



御原王正三位—小倉王正五下—夏野右大臣
左大臣
 本名繁

春曙抄や、加藤盤齋の抄の卷首に引いたのは、此の天武天皇の直系のみの部分である。さて本朝皇胤紹運録に據ると、御原王は舍人親王の御子、貞代王（前掲系圖、代を世に作る）の弟になつてゐる。扶桑拾葉集の系圖は、此の點を改めてゐるけれども、兩王の順が逆になつてゐるのは、他に據る所のあつたものか。是れは暫く別として、此の系圖は、公卿補任などに據つて、從來の系圖を正した所もあるから、比較的正確なものととして、左に之を掲載する。

天武天皇—舍人親王一品太政大臣。諡崇道盡敬天皇。

貞代王—有雄賜清原姓—筑前介
通雄—海雄
 御原王正三位—小倉王正五下—夏野正三位。左大臣。初名繁野。始賜中務卿
清原姓。天長九年七月七日薨。
 ○今按公卿補任曰。舍人親王曾孫。

御原王孫。小倉王第五子。云々。
 諸系圖誤作天武帝曾孫。今據補任改之

房則從五位下—顯忠一本作春光
從五位下。下總守—元輔從五位上
肥後守
 清少納言。初仕皇后定子。後爲上東門院侍女。
 嘗著枕草子。老年落魄。卒於筑州民門。云々。

此の系圖は海雄の子、房則を養父夏野の下にかけたもので、顯忠の註に「一本作春光」とあるのは、春曙抄の系圖も同様である。此の所謂一本は、續類從の第一、第二、第五、第六等の諸本で、中古三十六人歌仙傳中の元輔傳も、亦同様である。又後に上東門院の侍女となつたといふ事は、暗推を録したものの、筑州の民門に卒したと云ふのも、一傳説を取つたに過ぎぬのであり、此の種の傳説ももとより多いのであるが、いづれも信するに足らぬ。尊卑分脈の系圖は略系であり、且甚だしい誤もあるけれども、元輔に一人の弟元眞、即ち清少からいへば、叔父のあつた事を傳へるのは此の系圖のみであるが、源順集の、

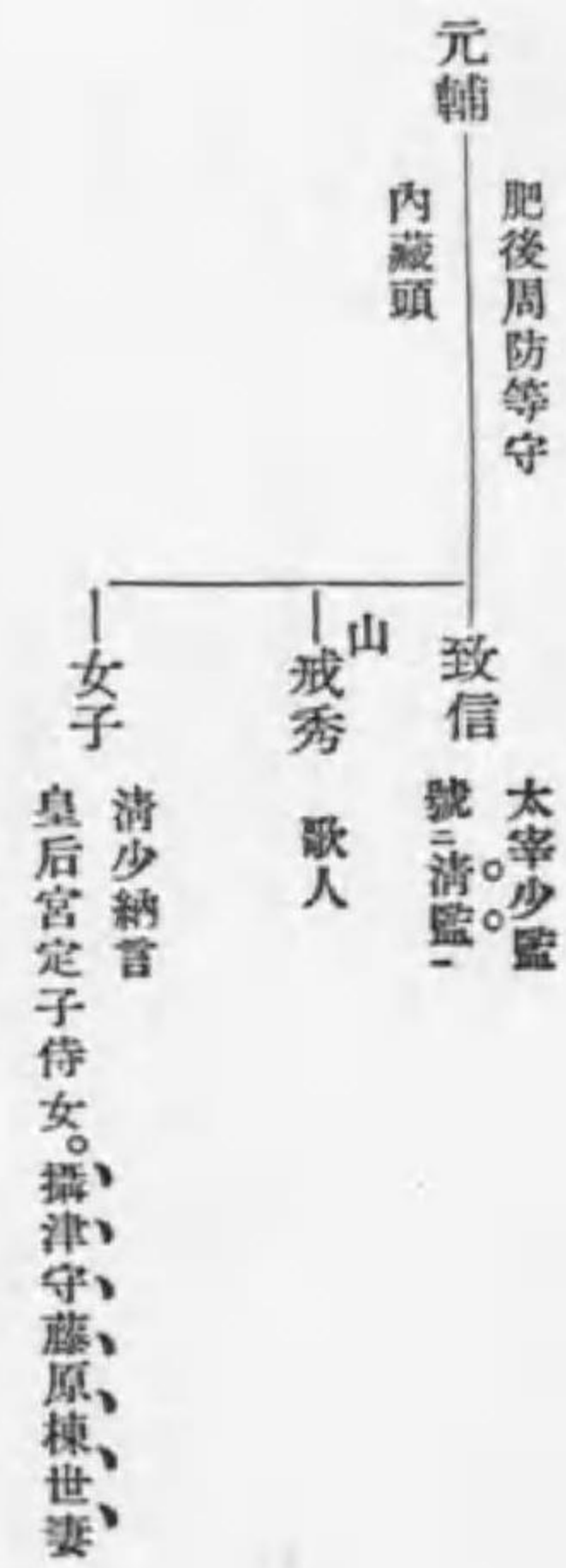
式部丞清原元輔が弟もとされ（元眞）字清用、身まかりて後、はふりするまで知らずして、おそく聞きにたる由、

兄の元輔にいひつかはす。

よひの間の空の煙となりにきとあまのほらからなどが告げ來ぬ

といふ歌の詞書に據れば、それは確かな事實である。

それから清少に兄弟のあつた事を傳へるのは、續類從の第五、第六、第七の三本であり、夫のあつた事を傳へるのは第五、第六の二本である。今は第六本のを掲げるが、第五本のも此の部分に於ては、致信の下の註がないだけのちがひである。



是れに云ふ所の致信は、古事談卷二、巨節の章中に、

頼光朝臣遣四天王等、令打清監之時、清少納言同宿ニテアリケルガ、依似法師、欲放之間、爲尼之由云云(撰説)
ントテ、忽出開。云々。

と見える人だらうと思はれるが、之を扶桑略記には清信に作つて、事實にも違ひがある。即ち同書卷二十八、三條天皇の長和六年三月八日の條に、

是日前太宰少監清原清信、白晝被殺前大和守藤原保昌郎侗也。

とあるので、國史大系本、同書の頭註に「清信恐當作致信」とあるのは、清原系圖を根據にしてであらう。又元輔集には、

なかきよが生れて侍りし七日夜

松蔭の通へる枝をとくらにて集立て守るべき鶴の雛かな

といふ歌があり、此の詞書から見ると、どうも元輔の子らしく考へられる。金子元臣氏の枕草子通解所載の系圖には、致信がなくて、此なかきよ(仲清)を擧げ、是れに清監と註してあるのは、専ら元輔集に據られたものではあるまいか。併し此の歌の詞書も、拾遺集雜賀には、唯「人の産して侍りける七夜 元輔」となつて居て、歌詞も一が枝の四の句「集立てらるべき」となつてゐる。全然他人の子のやうに聞える。拾遺集は花山院又は公任の撰といはれてゐるが、何れにしても元輔の晩年を知つて居られる方であるから、事實をまちがへられる筈はない。但し詞書を書きかへられるとしたら「妻の」とは公の集としては書きかねるから「人の」とされたものであるかも知れぬ。かういふ例は素より多いが、何れにしても今は定めかねる。

戒秀は勅撰作者部類に、清原元輔の子とし、拾遺別一、詞花春一、續後撰秋中一の作者たる事を傳へ、系圖の傍

に「山」と註したのは、叡山の僧たる事を示すものである。

通解本の系圖には、清少に一人の女兄弟のあつた事を記されてゐるが、是れは多分、尊卑分脈卷一、藤原系圖の倫寧の條に、

倫寧—理能 長保元、八、廿五卒 爲善 母肥後守清原元輔女

とある、爲善の母の元輔女を、清少以外の女子と見られた爲であらう。契沖の隨筆、河社の、元輔集の事をいつた中に、同集なる、

元輔がむすめ違くまかりしに
年ふればいたゞきまさる雪深み打拂へとも誰にいはまし(以下三首略す)

といふ詞書ある歌を擧げてゐるが、是れはいふまでもなく、清原元輔のむすめと見たからであらう。同集には、右大臣顯忠の子の元輔の爲に、詠んだ歌も見えるが、是れには宰相元輔の朝臣と書いてあつて、唯元輔とのみあるのは、作者自身の事であらう。元輔集は、早く紫式部日記に、

かたつ方には、白き色紙つくりたる御草子ども、古今、後撰、拾遺抄、云々。下には能宣、元輔やうのいにしへの歌よみども、家々の集書きたり。

と見え、自身が書き集めて置いたものであらう。自分の集に、自分の名を書き込んでおく事はをかしい様ではあるが、まぎれぬ爲には、すまじきものでもないし、又或は後人が書き加へたものかも知れぬ。斯様な見地から、更に

「年経れば云々」の歌を見返す時、どうしても、是れは他人の子には出来ぬ注文と思ふ。すると、此の「むすめ」は清少であらうか。否々、「遠くまかりしに」の詞書から推せば、さうではないらしい。併しながら元輔に二人の女子のあつた事は、いづれの系圖にも傳へぬ。私ももとは同集の元輔を皆同一人で、清原氏でないと考へてゐるが、第一詞書のかき方がちがふし、歌の内容から見ても區別がつくので、今は別人であらうといふ事に傾いてゐる。随つて同集の、

元輔がとみはたといふ子の袴着せ侍りしに
世の中にことなる事はあらずともみはたしなん命長くて

とあるのも、清原元輔の子で、系圖に徴すると、かく祝はれたのは、致信か戒秀かの何れかになる。

此の問題は茲にとゞめ、次に元輔の事に就いて、少しく述べて見る。元輔の傳は 三十六人歌仙傳や、大日本史の歌人傳中に見え、勅撰作者部類に據れば、拾遺集に始まつて、新續古今集に至るまで、九十九首の作者たる事が知られるのみで、委しい事はもとよりわからぬ。今は先づ歌仙傳のを擧げる。

從五位上行肥後守清原真人元輔 深養父孫。從五位下天曆五年正月、任河内權少掾。應和元年三月、任少監物。藏人下二年正月、任中監物。康和三年正月、任大藏少丞。四年十月、任民部少丞。 卿在衛 十二月任大丞。安和二年九月廿一日、叙從五位下。省十月任河内權守。天延二年正月、任周防守。八月兼鑄錢長官。天元三年三月十九日、叙從五位下。造藥師 寺廊 寛和二年正月、任肥後守。永祚二年六月卒。 年八十三

是れには天元三年に薬師寺の廊を造つた勞に依り、從五位下に叙せられた趣に書いてあるが、前に既に此の位になつてゐるのだから、從五位上の誤であり、系圖や大日本史の傳に、さうあるのが正しい。なほ是れには見えぬが、式部丞の官歴もある事は、前に引いた順集の詞書でわかる。

元來清原氏は王氏であり、其の後には夏野の如き、大臣に昇つた人もあるのだけれども、中頃は微にして顯はれなかつた。然るに元輔の祖父に深養父といふ歌人が出て、古今集中十七首の作者と爲り、延喜聖代の花に花を添へてゐる。同集戀二、題しらずの中なる、同人の歌に、

戀ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常なきものといひはなすとも

の一首が見えるが、其の婉曲に詰つた所に、諷諭の意が深く、どうでも相手の無情を反省せしめるといふ趣は、女の歌かと思はれる程で、時代を代表すべき戀の秀歌である。

随つて此の方はすきでもあり、修業も積んだことと思ふ。けれども藝のみで出世の出来る世の中ではなかつたから、同人の

時なりける人の、俄に時なくなりて嘆くを見て、みづから歌もなく、悦びもなき事を、思ひてよめる

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし

古今
雜下

の歌でもわかる様に、よその花を見ても、美まぬ程の淡々たる心境に住して、一生を終つたものであらう。

春光顯忠又はに就いては、何等手段が、よりもないから略するが、其の次に元眞は、清用といふ字を持つてゐただか

ら、どうしても學生出身であらう。凡そ入學をして字をつける事のは、源氏少女の卷の、夕霧の例でもよくわかる。なほ當時の學制は、式部省の被管に大學寮があり、寮頭監督の下に學生を教育し、寮試といつて、此處で、試験をして及第したのを、擬文章生といひ、更に省式と云つて、式部の大少輔が出題して詩賦を作らしめ、及第したものを文章生(進士)といつて、官給を授ける。右様の次第で、式部はもとゞり禮式や文官の考課、選叙等を掌る官省で、大學との關係も上に述べた如くであり、大少輔は勿論のこと、其の下の官員といへども、多くは學者なる。話は少し横にそれるが、日本紀略、一條天皇の永祚二年十月二十七日の條に、「左大臣以下諸卿參仗座。召式部大輔高階成忠以下、爲召問擬文章生詩事也」と見えるのは、即ち省試である。此の成忠は大學者で、式部大輔をも務めたのであるが、其の女の貴子(高内侍)が道隆の妻となり、中宮定子や伊周、隆家の母ともなつたので、中宮や伊周の才學は、こゝから發してゐる。

右様の次第であるから、丞として式部に官した元輔も、亦學生出身であり、其の弟と共に、同じ出身の源順とは、特に親交のあつたのであり、相率ゐて天曆の和歌所にも出仕した事なのであらう。第一此の和歌所の設置は、萬葉集の讀解といふ事にあるので、當時訓點のない萬葉集が、漢學に造詣の深い人でなければ、取り扱へぬといふ事も自明の理であらう。而して傳統を重んじた此の時代の常として、學問に身を委ねるといふ様な事は、突如として起りさうもないので、元輔兄弟の父も、祖父も、同じ道を取つたものではなからうか。さて又、後には清原氏が中原氏と相並んで明經の家となり、多く太政官の外記を奉職し、高倉院の御侍讀を務めた頼業の如き大學者が出

で、又枕草子塚本や、古本圖書寮本の奥に見える、清原枝賢と云ふ人も此の系統の中の人で、専ら學問の家となつたのは、周知の事であらう。

前にも引いた河社の、元輔集の事を云つた中に、同集の「三月三日ていし亭子の院にて、ふみなど作りて」とある詞書を引いて「元輔は和歌のみならず、文章にも心得られるにこそ」とあるのは、契沖は此のふみを文章と考へたのであらうが、是れは誤で、詩であつたにちがひない。

元輔は歌人としては云ふまでもなく當時の巨匠で、梨壺の五歌仙の一人に加はつて、後撰の撰集にもあづかつたので、順のみではなく、紀時文や大中臣能宣とも交誼が深かつた様であり、其の以外の歌人では、平兼盛、女流では中務との贈答が多い。家集又名門では、小野宮太政大臣家や、一條太政大臣、源大納言高明、小一條右大臣師尹とも、親しかつた趣に見えるが、是れはいづれも其の學問や和歌が、因縁となつたものであらう。清少納言が小一條左大將の家の説教聽聞に行つたのも、こんな譯で、知合の間柄であつた爲と思ふ。枕草子三十二段、小白河かやうの結縁八講の段、參照な譯で、元輔が歌人としての地位は頗る高く、隨つて清少が之を誇りとし、同時に家聲をおとすまいとの意地のあつた事は、中宮が、

元輔が後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

と詠みかけられたのに對し、

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよままし

と御返しし、「つゝむ事さぶらはすば、千歌なりともこれよりぞ出でまうで來まし」枕草子、八十六段と啓したのは、當坐のがれの御挨拶のみではなく、彼の本音を出したものだと思ふ。

ところが官途に於ては、祖父の深養父同様恵まれなかつた。天曆五年和歌所に出仕したのは、歿年から逆算して十四歳、それから六位の藏人として、殿上に立ち交つた頃が、比較的得意の時代で、叙爵はしても、宮中を下らねばならぬとなれば、それが一大悲哀であつた事は、枕草子中にも最も適切な語で寫してあるが、それは清少の父の場合にも考へられる事である。さて受領になつて國にでも下れば、其のまゝさびしく消えてしまふので、清少の夫とか義兄とかいはれる則光は、此の適例であるが、元輔も亦同じ運命の人であつた。

是れは元輔の門地から云へば、當然の事であるが、彼は祖父ほどには超脱してゐなかつたと見え、常に官位昇進の滞りがちなのを嘆き、除目といふ事に就いては、文學者には多く見る如く、頗る神経をいら立たせた。家集に、

藏人所に櫻の散るを見て、官給はる年の春、給はらで

櫻こそ雪と散りけれしぐれつゝ春とも知らで過しつるかな

年頃官も給はらぬに、子の目にしに人の出でまかりたる

谷深くしづむたとひに引かされて老いぬる松は人も手ふれず

加階申し侍りしにえせで、鶯の鳴くを聞きて

鶯の鳴く音ばかりぞ聞えける春の至らぬ人の宿には

の如き歌の多いのは、其の證である。然るに清少の草子 第三段中の「除目のほどなど」第廿一段には、除目の際の運動の醜態と、是れに失敗した人の悲哀とを、何等の同情もなく、滑稽化して書いてゐるのは、何たる皮肉な事であらう。けれどもそこには、境遇から鍛はれた清少の意氣地といふものを、認めぬ譯には行かぬ。 次の章参照

今昔物語卷二十八に歌讀元輔賀茂祭渡二條大路語といふ一笑話を傳へる。 宇治拾遺物語、卷十三にも出づ それは、元輔が内藏助であつた時、祭の使となつて一條大路をわたる間に、馬が躓いて逆に落ち、冠の落ちたのを見ると、髻の毛髪が少しもない。馬副が冠を取つて着せようとするのを、彼は着もしないで、「君達に聞こゆべき事あり」とて、物見車のもとに進み、馬の躓くのも、落馬するのも、それ〴〵理があり、例がないではないといひ、例を數へ終つて渡つたから、馬副は何故にかゝる事を仰せられたかと問へば、

尊此ク道理ヲ云開セテラバコソ、後々ニハ此君達ハ不レ咲ザラメ。不レ然ズバ、口賢キ君達ハ、永ク咲ハム者ゾ、ト云テソ渡ニケル。此ノ元輔ハ、馴者ノ物可レ咲ク云テ、人咲ハスルヲ役ト爲ル翁ニテナム有ケレバ、此モ面无ク云也ケリ、トナム語リ傳ヘタルトヤ。

と云ふのであるが、滑稽家とはいふものゝ、かうまで常識ばなれのしてゐる事は、やはり學生出身たる所以で、大進生昌とは又異なる一の型である、而して滑稽家といへば、樂天家の様にも聞えるが、決してさうのみではない。是れは貫之の土佐日記に見えると同様で、心中さびしさに堪へずして、強ひて作つて、自ら笑ひ、人をも笑はせたものであつたらうと思ふ。

四 清少納言の經歷

清少の傳記の徵すべきものとしては、中古歌仙三十六人傳があるが、それには唯肥後守清原元輔女、一條院皇后宮女房とあるのみであり、大日本史の列女傳中の傳も是れに枕草子、十訓抄、古事談等に據つて、内侍に奏し爲されんとした事、雪に簾を撥げた事、並に老後零落の趣を附加したのみで、極めて不備である。併し新拾遺集の釋教部に、

法華經序品

清少納言女

白妙の光にまがふ色みてやひもとく花をかれて知るらむ

の一首があるので、此女の父は行成卿にやと、契沖の百人一首改觀抄に云ひ、一度嫁したのであらうかとは、伴直方の枕草子考、其他にも注意されてゐるが、續類從中の系圖二本には、藤原棟世妻であつた事を傳へ、又櫻井秀博士 雜誌若竹所載、清少 の説の如く、元輔には一女しかなかつたとすれば、尊卑分脉藤原氏系圖、倫寧の條に、爲善の母を元輔女と傳へるのは、當然清少が其の父理能の妻だつた事を示すので、又一説とすべきである。是れは前にも少しく述べた事であるから、別問題として、兎に角かやうな資料のある以上、清少が正式に夫を持ち、家庭の人となつたと考へるのは、必ずしも失當ではない。けれども、二十歳前後にはたしかに家居してをつたと思はれるの

で、其の結婚生活は、極めて短いものである。而してそれが死別であるのか、或事情に依つて離縁したものかも、紫式部の場合の如く判然してゐない。それだけでも、相當暗い運命の婦人と云はねばならぬ。

ところで、何よりも多く、清少自身の傳記資料を提供してゐるものは、枕草子である。草子がすべて今の様な文章に書きあげられたのは、中宮へ奉仕時代中の事と思ふが、其の以前にも時々、相當くはしい日記や、感想を録してをつたので、それが草子中にも交つてゐる。白馬拜觀に行つた段^三如きが其の一例で、彼は一里人として宮中の一端を瞥見し、お宮仕を非常に幸福なものとして羨んでゐる。次に年代が確にわかつてゐるので、第一に問題になるのは、小白河の結縁八講の段^二三十である。是れは寛和二年六月の事で、此の時の清少の年齢に就いてはいろいろ説がある。まづ春曙抄の中宮に初出仕の段^十百六に「三十歳ばかりにや」と見えるのを、正暦三年の事と假定して逆算すると、二十四歳になるが、是れには森文學士や櫻井博士の如き賛成説もある。『若竹』所載、櫻井秀氏の「清光」第三卷第九號、森治藏これは此の段を読んで見ると、小白河殿の人はいふまでもなく、聽衆の公卿中にも顔見知りが多く、其の上義懐とは「五千人の中には」の應酬をして、サツサと出て行く臆面のなさには、疾くに處女性を失つた問題の女であつた事が知られる。だといつて、中宮や御兄の伊周との年齢の關係を思ふ時、是れではあまり離れ過ぎる。女の三十は、今日でも女房盛りである、むしろ姥櫻に屬する。況や當時に於てをやである。正暦三年は伊周はまだ十九歳である。三十に手の届いた女をサンザンにからかひ「人を捉へて立て侍らぬなり」とまでは、まさかいはなかつたらうと思ふ。だから此の間は一歳でも近づけて考へたい。さりとて坂本文學士の正暦四年と假

定しての二十四歳説^{其の前年とすれば}は若過ぎる。東亞の光、第三卷第七號坂本三郎それ故、私は其の中間説の金子説を支持するものである。即ち氏は中宮と清少との差を十歳もしくは十一歳と見積り、此の出仕を正暦二年と考へられたから、中宮十六、清少二十六七となるのであるが、其の翌年の出仕とすれば、各一歳を加へた事になる。今當時を二十一として、小白河殿に来て居つた人、又は將來最も交渉の多かつた人々の年齢を公卿補任に據つて調べて見ると、次の通りである。

正二位大納言爲光	四十五
參議從三位佐理	四十三
正三位右中將道隆	三十四
從二位權中納言義懐	三十
兵衛佐實方	二十六七?
公任	二十一
齊信	二十
行成	十五

公任以下は後年見える所に據つて逆算した。實方は不明であるが、榮花物語、月宴の天祿二年の條に、村上八宮永平親王が、十二歳で伯父の濟時の家におはしました頃、御心様の尋常でないのを濟時は嘆いて、甥の實方の侍從や子の長命君を御相手として、馬に乗りならはせ奉らうとした事が見えてゐるから、此の宮と同年輩と見てさし

つかへなからう。されば此の時を二十六七歳と推定しても、大差はあるまい。

清少は公任や齊信の才學に對しては、十分敬意を持ち、親しく交際もしてゐたが、とりわけ齊信の容貌風采には頗る嘆美の眼を向けると同時に、自己を「さだ過ぎふるしき人」と卑下してゐるが、年齢の上の實際はさう違つてゐるとは思はれぬ。行成は六七歳の年少ではあり、此の人の性格からも、頗る明け放しな交際をしてゐた趣は、草子でわかる。實方は小白河の段には、家の子として周旋もし、「兵衛佐返し思ひ設けよ」など、歌の方では相當の期待を持たれた事がわかり、「宮の五節」の段七十では、小兵衛に歌を詠みかけたのを、清少が代つて返歌した事が出てゐるのみで、さしたる交渉がないけれども、實方集には、

清少納言とて、元輔がむすめの宮にさぶらふと、大方になつかしくて語らひて、人には知らせず、絶えぬ中にてあるを、如何なる折にか、久しく音づれぬを、おほぞうにて物など争ふを、女さしよりにて、忘れ給へ(ふか)なよといへば、いらへはせてさて立ちかへり

忘れずよ又かはらずよかはらやの下たく烟下むせびつゝ
返し

賤のやの下たく煙つれなくて絶えざりけるも何によりそも

の贈答がある。是れは清少納言集や後拾遺、戀二等にも見えるが、詞書や歌詞にはいくらかのちがひがあり、又後拾遺には返歌をば省いてゐる。

斯様な關係があつたに拘らず、草子に書かぬのは、一には公儀向の題目を主とした爲であり、一には實ある方の却て憚られたが爲ではあるまいか。左衛尉則光は藏人として殿上に出てゐた爲に、絶えず交渉があり、いつも喜劇の材料を提供してゐた。是れが夫であるとか、義兄であるとか、いろ／＼説はあるが、もと／＼半は殿上人の戯談から始まつた事で、いづれもあまり深くは信じられない。

兎に角清少は元輔が六十近くになつてからの子である。人一倍可愛がつたにちがひない。而して其の最後の田舎下りが、傳記に據れば、此の寛和二年正月である。便少い娘の身の上を思ひ煩ひつゝも、都にのこした心持は、更科日記の著者の父と同様であつたらう。而して清少の中宮出仕を正暦六年とすれば、父の歿後二年に相當する。ししば召されて出た様ではあるが、召すにも出るにも、其の環境からいつても、才學からいつても、最も適任者であつたからであらう。附け加へて置くが、此の年代を定める唯一の材料は、其の段一六の文中に、伊周を大納言殿といつてゐる事である。其の伊周の大納言時代は、正暦三年八月から同五年八月、内大臣に轉ずるまでの間である。すると、此の段に「いと冷たき頃なれば」とある様な時季は、三年の冬か、四年の初春か、同年の冬か、又は五年の初春しかない事になる。されば中宮の御左右に疾うから必要あつて、求められたものとの想像を加へて、私は武藤氏の三年冬説を取るのである。武藤元信氏著、枕草紙通譯卷首金子氏は之を追記の文として、更に一年早めてをられるが、此のあたりは、決して追記ではあるまいと思ふ。此事はなほ後にいふ。

かくて正暦五年二月二十日の積善寺供養二三七段の時には、中宮とは申すまでもなく、其の御父の道隆とも、物馴

れて應對し、通隆からは「宰相とそこそこ」と、右大臣顯忠の孫女と一雙にいはれる程に重視されてゐるのは、奉仕後ちよつと時のたつてゐるのを思はしめるが、同時に中宮が御盛裝あそばしたのを、清少に「われをいかかで見ろ」と仰せられたのは、前にはまだかういふ機會のなかつた爲で、あまり年を経ぬ證據となる。こんな事を考へても三年説が最も穩當と思ふ。

清少の宮中奉仕期間を十年といふ事は「鳥は」^{三八}の段にいふ所に基づくので、正暦三年から長保二年、中宮が崩御されるまでは、足掛九年になる。春曙抄には、中宮の崩御後は、御妹の淑景舍に参つたものであらうかといつてゐるが、是れもさう考へ得る。中宮にお別れした清少は、一時は肝魂も抜けうせた事と思ふが、又考へて見れば、人一倍御氣の毒な淑景舍に御同情せぬ筈はない。すると、なほ二年は宮仕の年期が延びて、足掛十一年となる。いづれにしても大數をとつて「十年ばかり」といふにさしつかへはない。

さて此の清少が、何故召されるに至つたのであらうか。前に才學環境が、最適任であるからといつて置いたが、其の第一資格は勿論才學にあつた。而して彼の才學を論ずる前には、中宮の御才學に就いて考へる要がある。中宮の御父の道隆が諧謔家であつた事は、枕草子^{八十段、二百}に見え、又人物の點では、弟道長に對しては、大に遜色があつたけれども、^{大鏡、道隆}君の御前で何か書けよと命ぜられて「しほのみついづもの浦のいつも／＼君をば深く思ふはやわが」の末を「たのむはやわが」とかへて書いて、^{枕草子}後々の物語となつて傳はる位の機才はあつたのである。それよりも更に特筆すべきは、御母系が學者の家なる、高階氏だといふ事にある。御祖父の成忠の事は前に

も述べたが、御母の高内侍貴子は、公任撰の十五番歌合に、帥殿母上として、傳殿母上道細母、かげろふ日記の著者と一番にされた程で、和歌にも定評のあつた事と思ふが、それよりも更に注意すべきは其の漢才である。其の父成忠は才深う人にわづらはしとおぼえたる人で、女子あまたある中でも、大層愛したのが此の貴子で、男合せよと思つたけれども、人の心は知り難いから、唯宮仕をさせようと考へ、圓融院の御時に、公宮仕に出し立てたが、女なれども眞字などよく書いたから、内侍になされて、高内侍と稱してゐた。道隆はよろづにたはれた人ではあるが、心ざしあつて之を妻には選んだといひ、^{榮花物語、様々}又大鏡^{道隆}の其の第三女の敦道親王妃が、學生を集めて作文して遊ばれた事を述べた條に、「二位の新發意成忠の御流にて、此の御族は女も皆才のおはしましたるなり。母上は高内侍ぞかし。されど殿上せられざりしかば、行幸節會などには、南殿にぞ参られし。それはまことしき文者にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。少々ののこにはまさりて聞え侍りしか」と見えた程の人である。中宮の時に臨んで發せられた「たゞいとほかなく名もなし」や「いななかへじとおぼいたるものを」^{七十}の如き御機才は、御父ゆづりともいへようが、(中宮)「花の心開けたりや云々」。(清少)「夜に九度なん上る心地し侍る」^{二百三}(中宮)「少納言よ、香爐峯の雪は如何ならん」^{二百五}の如き御應酬は、此の母からお受けになつた御素養の一端で、尋常茶飯事といつてもよい程であつたと思ふ。それから又、古今の草子を御前に置いて、女房をお試しになつたのも、自分には御自信があまりになつたからで、^{二十}例にも御引きになつた宣陽殿の女御芳子の場合に於けるが如く、此の時代に於ける、理想的の家庭教育に薰染された御方であつたらう。此の御方が、姫君として冊かれた家の

内を離れて、宮中に御はひりになる。どうしても日夕左右に侍して、御補導する人がなくてはならぬ。先づ召されたのは、門地も高く、其の上に清少とも比肩すべき、才學のある宰相の君であり、ついで選に預つたのが清少であつたらう。述べて茲に至れば、改めて清少の才學を論ずる必要もなからう。家の風、父の子といふ事をくり返して考へてもらへばよい。

紫式部の父爲時は有名な學者であり、式部は幼時兄の式部丞が史記を読むのを、傍で聞き覚えたとの聴きであつたといひ、其の夫宣孝も學問好きで、家には古い物語や漢籍を藏してゐたのを、夫の歿後に式部が引き出しては見てみると、女房たちは「お前はかくおはすれば、御幸は少きなり。などか女がまんなぶみは讀む。昔は經よむをだに人は制しき」と、蔭口を聞いたと云ふ。紫式部日記 是れが召されて彰子中宮に仕へたのは、清少と全然同一事情である。其の式部は彰子中宮の爲に、樂府の講釋をしてお聞かせした事が、日記に見えるけれども、御年輩からも、又御日常からも、定子中宮には、そんな餘暇も又必要もおありにならなかつたやうである。伊周の詩を講じたのは主違はおつきあひの陪聽者かくて清少の奉仕十年、御恩寵も厚かつたが、忠勤も亦擢んでゐる。君臣水魚の交を、草であつた。(二六九段) 子の上に見るのである。表立つての御補導としても、消閑の御相手としても、遺憾なく其の職責を盡した。中宮は消息文までも、多くの場合は見せて御相談あそばしたので、「此の度の御返事(齋院への)を知らずなりにしこそくち惜しかりしか」七十といつてゐるのは其の爲と思ふ。五段

道隆の薨去は、中關白家の落目であると共に、中宮にもさびしき秋の音づれであつた。やがて伊周隆家は左遷せ

られ、中宮は尼となつて、小二條に退出されたのであるが、此の時早くも君臣間の危機は孕まれた。清少が道長方の人に關係があるといふので、種々の讒言が行はれ、女房達からもまるで仲間はずれにされた。そこで清少も氣をくさらかし、里居に日を送つた。彼に取つては、最も悲しい時であつたに相違ない。然るに聰明にして温良玉の如き中宮は、聊か疑點をさしはさまれぬのみか、うまくさそひをかけて、彼を呼び寄せられた。百二十 かくて其の後、主上中宮の御中らひが舊に復し、悲しい中にも主從間に春が蘇つた。三段

ところで、此の御堂關白家と清少との關係を知るべき資料は、とんとない。唯清少納言集に、

清水にこもりたりしに、大殿の上(倫子)のお(ま殿)し所からいひおこせ給へりし

思ひきや山のあなたに君をおきてひとり都の月を見んとは

の一首が見え、是れが續後拾、雜中には、詞書を「清少納言清水にこもりて侍りける頃、月いとあかき夜、申しつかはしけるに」として、道長の歌になつてゐる。勅撰ながらはるか後世のものではあり、家集の方に隨ふべきであらう。なほ又、清少が尊卑分脈に據つて、藤原倫寧の子理能の妻であつたとすれば、道長とは縁者になると、櫻井博士はいつてゐられるが、前に引いた 同氏論文 是れは前提がなほ研究を要すべき事であるので、何ともいへぬ。但し「關白殿の黒戸より」の段百十 に、道隆が清涼殿から退出すると、立ちあらはれると、そこに居た中宮大夫道長が、進み出でて蹲踞したのを見て、清少が關白の權勢の偉大なるを感嘆すると、中宮が「例の思ふ人」と、おひやかしになつたのは、其の間に於ける何等かの因縁を示すものには相違ない。

枕草子以後の清少の半生は、更に不明であるけれども、老後の零落といふ事には幾らかの材料がある。先づ公任卿集の、

清少納言が月の輪にかへり住む頃

ありつゝも雲間にすめる月のわを幾代ながめて行きかへるらん

の歌に所謂、月輪は、洛東山谷の一勝地、元輔集に、

桂なる所に參らんとすと、人にいひ侍りし、そこにはまからで、月のを(わ)なるべしといふ所にまかりかへりて

月の夜に改まるとも知らずして桂は又や君を待つらん

とある所で、此處には元輔の山莊があつたものであらう。而して赤染集に、

元輔が昔住みける家の傍に、清少納言住みし頃、雪のいみじく降りて、隔ての垣もなくたふれて、見わたされしに

あともなく雪ふる里のあれたるをいづれ昔の垣根とかみる新古今、雜上には、あともなく雪ふる里はあれにけりいづれ昔の垣根なるらんとなつて載つてゐる。

とあるのも、別な所ではあるまいから、元の家はどうかかつて、其の傍に小さな家を構へて隠栖してゐたので、續

千載、雜中に見える彼の歌なる、

老の後こもりゐて侍りけるを、人の尋ねてまうできたりければ

とふ人にありとばえこそいひいでれ我やば我とおどろかれつゝ

と合せ見て、其の零落の様が窺はれる。なほ古事談、第二に、

清少納言零落之後、若殿上人アマタ同車、渡ニ彼宅前之間、宅體破壊シタルヲミテ、少納言無下ニコソ成ニケレト、車中ニ云テ聞テ、本自棧敷ニ立タリケルガ、簾ヲ搔上ゲ、如ニ鬼形ニ之女法師、顔ヲ指出テ、云々、驃馬之骨ヲバ不レ買ザリシト。云々。

とあるのも、之を裏書するものであり、兼ねて稜々たる氣骨が未だ失せなかつた趣を示すので、誠におもしろい。

老後の出家といふ事は、古事談の此の條、並に前に引いた中二〇に見えるばかりでなく、家集の

人の許にはじめてつかはす

たよりある風もや吹くと松島に寄せて久しきあまの釣舟

のがるれど同じうき世の中なればいづくも何かすみよしの里

の歌に據つて、疑ふべき餘地がない。殊に初の歌は後撰、雜一なる素性法師の、

西院の後おほんぐしおろさせ給ひて行はせ給ひける時、彼の院の中島の松を削りて、書きつけ侍りける

音に聞く松が浦島けふぞ見るむべ心あるあまは住みけり

を本歌にしたので、海人に尼をいひかけたものである。

彼は斯の如く失意落魄の中に後世を念じつゝ、都で歿したものであらう。其の終焉の地に就いて、種々の傳説はあるが、一も信すべき根據がない。

其の友達として最も親しかつたのは、和泉式部であつたと見え、式部の集には左の如き贈答がある。

同日、(同日とあるが、前にはつづかぬ)清少納言に
駒すらすさめぬ程に老いぬれば何のあやめも知られやはする
返し

すさめぬにれたさも妬し菖蒲草ひきかへしても駒がへらなん

五月五日菖蒲のねを清少納言にやるとて

これぞこの人のひきける菖蒲草むべこそねやのつまとなりけれ

かへし

ねや毎のつまに引かまし程よりは細く短きあやめ草かな

又かへし

さはしもぞ君はみるらん菖蒲草ねみけん人にひきくらべつゝ

同じ人のもとよりのりおこせたりければ

稀にとも君が口より傳へずばときけるのりにいつかあふべき

式部とは、其の奔放な點で如何にも話があひさうだが、赤染とも交りがあつた爲に、前に示した如き同情の詠があり、是れには返歌もあつたらうと思ふが、傳はらぬ。

紫式部も無論よく知つてゐたればこそ、日記の中に悪評もしてゐるのであるが、交際といふほどの事はなかつたらしい。是れは其の性格の差違から、さう思はれるけれども、源氏花鳥餘情、権の巻の註に、「清少納言と紫式

部とは同時の人にて、挑み合ふ心もありしにや。十二月の月夜、清少納言は冷しきものといひしを、式部はいろなきものゝ身にしむといへり。心々のかはれるにや」とあるのは、寧ろ式部の爲の冤罪で、無論心々のかはりであり、其の折節の感じのちがひに外ならぬ。

五 清少納言の性格と其の文章

「清少の才氣は、確に天稟である。それが元輔が老後の子としては、愛撫せられ、教養もされたに違ひない。随つて其の青春期までは、極めて順良に育つたらしい。詞花集、戀下に、

心かはりたる男へ

忘らるゝ身はことわりと知りながら忍びあへぬは涙なりけり

といふ清少の歌が見えるが、是れは恐らく彼が初戀を啾く頃のものであらうと思はれ、櫻井博士も早く之を引證して、枕草子時代の彼は、かゝる詠歌に所懐を述べる様な、温藉な資質を没却して了つたけれども、それは止むを得ぬ結果で、若齡時代の納言は、むしろ紫式部型の人であつた事を確信すると、いつてゐられるが、『若竹』第十二卷の第九號所載、清少納言の性格と素行」私も全く同感で、此の反省的な自責的な口吻は弱い者、即ち女性といふ事を、最も如實にあらはしてゐる。古今集、戀上に、典侍直子の「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」といふ名歌

が見え、宗祇法師は、此の歌と、後撰、戀三の「なき名ぞと人にはいひてありぬべし心とはいひかゞ答へん」との二首をさへ、よく分別し心得たならば、世法にも佛法にも迷ふまい、といった兼載 雑談といふ事であるが、清少のも其のやさしさは、是れと相通するもので、全く女の歌の本である。

それから清少納言集には、又

語らふ人のあさてばかり必ず来んといひし日も見えす、久しくなりておぼつかなくなりければ、御心のつらさにならひにける、何とかはいひたる、返事に

よしさらばつらさは我にならひけり頼めて来ぬは誰か教へし

の一首が見え、詞花集、雜上にも載せて、詞書を「たのめたる夜見えざりける男の、後にまうで來たりけるに、出逢はざりければ、いひわづらひて、つらき事を知らせつるなど、いはせたりければよめる」となつてゐるが、此の方が通じよく、歌に對しても適切である。處で、此の歌は、季吟の抄には「詞花集、秀歌十首の一首なり」と評してゐるが、十首云々の事は別として、確に秀歌にちがひない。先づ對手の言をすなほに受けて、忽ち逆襲に轉じた所は、非凡な才のひらめきで、枕草子時代の其の人を思はしめるが、さりとて、さほどにせよこましい態度は見えぬ。やはり當時の一般女流の様に、戀と歌とを連環せしめ、之を美の對象として味ふ餘裕があり、それが此の流暢な一首に歌ひ出されたので、恰も蜻蛉日記の著者が、夫兼家の他に通ふ所あつて、音づれぬ夜が続いた或曉方に、門叩くのを「さなめりと思ふに、うくてあけさせねば、假の家とおぼしき所にもものしたり。つとめてなほもあ

らじと思ひて」

嘆きつゝ一人ぬる夜のおくるまはいかに久しきものとかは知る

と詠み送つたのは、自ら折れて出たので、其の點がちがふけれども、場合も心持も、歌の體製も、よく似てゐる。而して歌の質からいへば、清少のがはるかに上である。

清少は元輔の子である。而も順良な性質でもあつたらう。歌に勉強したに相違がなく、又歌人として成功すべき、十分の技術を具有してゐた。それが兎角歌を忌避する様になり、人も歌詠を以て目しない様になつたのは、其の性格の變化が、第一原因であると思ふ。然らば其性格の變化は、何に因したのであらうか。年頃にもなり、父の官途に就いて悲觀してゐる様子をも見ては、同情せざるを得なかつたらう。更科日記の著者の様な、消極的で現代にはあまり期待も持たぬ人ならば、其の同情の結果が、親への孝養となつてあらはれるのであるが、積極的に負けじ魂のあるものならば、それが社會への反抗心ともなるのが常で、清少は此の型の人であつた。それに戀愛生活の破綻、是れも度重なれば、如何に當時の様な社會状態とはいへ、當然ひねくれざるを得ぬ。其の間に年は移る、容貌のすぐれぬ事が、むやみと氣になる。そこには煩悶があり、それが修養ともなつて、一段高い境地に超越した彼を見た時は、即ち男性的のそれである。と同時に、歌人としての感情は、疾に抜けてゐた。戀が、りの贈答の如きはあまり月並に過ぎて、寧ろ鼻についてゐたのであらう。無才の一婦人が、歌での挨拶の出來ぬのを、君達が嘲笑した時に、「何かは人の片ほならんことよりは、げにと聞えて、なか／＼いとよしと覺ゆる」三十と、云つたのは、

それである。

清少納言といへば、香爐峰の雪と共に、直に人の念頭に浮ぶのは「夜をこめて」七十の歌であらう。けれども是れは才で作つて、當座をアツといはせる底のもので何等身に迫るものがない。當時の贈答は、勿論此の類が多いけれども彼の頭腦は冷静であり、理智的であつた。微細に觀察をし、直截に批判をする事を得意とした。もはや彼は、幻想の世界に情趣を追ふ類の人ではなくて、現實の生活に即して、人と喜憂するといふ風であつた。是れが歌人たり物語作者たらずして、文章家たり批評家として、感想録なる隨筆に手を染めた所以である。

蜻蛉日記の著者は、戀に殉じた人である。其の虐げられた感情は、惱ましい歌となつて擡頭した。和泉式部は、次から次へと新しい愛を求めて、轉々した人である。そこにはいつも若さがあり、其の歌には熱があつた。紫式部にはもとより定評があり、源氏は又その人にふさはしい所産である。かくして性格もちがひ、行き方も異にした清少の隨筆は、式部の物語や和泉の歌と鼎立して、永く國寶的價値を占め得たのである。

如上の性格は、彼の初宮仕、即ち二十六七歳までにはスツカリ出来上つてゐたのである。それが若くてお美しい中宮の溫情に包まれて、どんなに緩和されたものだらう。然るに一旦主家の不運に際會し、ひし／＼迫る道長方の強壓に對しては、中宮に御同情すればするほど、憤慨せずにはゐられなかつたらう。こゝには又、性格の逆轉を想像し得る。同時に又、何とかして中宮をおまぎらせ申さうとしては、大車輪であり、それが又彼の性格でなければ爲し得なかつた所と思ふ。草子を見ても、清少の一舉一動が、中宮の御興味の繋がる所であり、中宮の「笑はせ給

ふ」が、清少には何よりも嬉しかつたのだ。草子中、最も冷酷と思はれるのは、大進生昌鬪弄の一段であるが、之を單に彼の眞骨頂とのみ思ふのは當らぬ。殊に此の段の如き、中宮の御失意後の事に係り、而も御産の爲の御退出であつた。さなきだに沈み勝な中宮は、一層神經質になつて行かれたに相違ない。力めて平地に波瀾を起し、日常生活を喜劇化して、少しでも其の場の沈痛を破りたいのが、彼の此の頃であつたらう。それに丁度はまつた人物が生昌であつたに過ぎぬ。私は嘗て、拙著枕草子新解の此の段に於て、右の如き考を書いて置いたが、今もなほ同一の見解を有してゐる。

けれどもそんな裏までを考へて、彼に同情する人は少い。されば何處までも問題の女として、一般の女性からは苦々しく思はれた。紫式部日記の中に、「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、まな書きちらして侍る程も、よく見れば、まだいと堪へぬ事多かり。かく人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみ侍れば、云々」といつたのは、確に當時の代表的評言であり、

内わたりには、五節、臨時の祭など打續き、今めかしければ、それにつけても、昔忘れぬさべき君達など参りつゝ、女房達など物語しつゝ、五節の所々の有様などいひ語るにつけても、清少納言など出であひて、せう／＼の若き人などにもまさりて、をかしくほこりかなるけはひを、なほすてがたくおぼえて、二三人づつつれてぞ常に参る。榮花物語 鳥邊野

と書いた作者の頭に映じてゐる清少納言も、素より同一型の者である。

こゝに所謂「したり顔」、「賢しだち」、「ほこりか」などいふ語の持つ内容や、是れから受ける感じが、如何に當

時の人の嫌忌するものであつたかは、事新らしく述べる要もなからう。優婉を貴び、雅情を重んじ、霞の間よりほの見ゆる榊櫻や、たそがれ時の夕顔に、深いあこがれを感じる人達である。才學立てをし、暴露的であり、壓迫的であり、冬の月のやうな牙えきつた頭腦の持主である彼の女に、好感の持てよう筈がない。すさまじきものとして、撃墜されるのは、當然である。

随つて其の性癖まる出しの枕草子が、好まれよう筈がなく、寧ろ其の怪氣焰に中てられじと、遠ざかるのが實狀ではなかつたらうか。之を彼の優情の眼を盡した物語として珍重され、歌心を養ふ無二の伴侶として翻讀された源氏と比較すれば、實に雲泥の差がある。

ところが、此の見方は、鎌倉時代に入ると共に、大にかはつて來た。まづ今鏡、初春の卷の式部卿敦康親王の姫宮が、後朱雀天皇の女御として入内される事を書いた條に、「かの皇后宮子の女房、肥後守元輔と申すがむすめ、清少納言とて、殊になさけある人に侍りしかば、常に参り通ひなどして、彼の宮の事も承りなれ侍りき」とあるのが一つ、次には十訓抄、第一、可_レ定_二心操振舞_一事の中に、草子の中にも見えて、有名な香爐峰の雪の佳話を録した後の評言に、「かの清少納言は天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の内、清原元輔の女にて、其の家の風吹き傳へたりける上、心ざまわりなく優にて、折につけたるふるまひ、いみじき事多かりけり」とあるのが一つで、「殊になさけある人」といひ、「心ざまわりなく優にて」といつたのは、全く別の立場から見ても、彼の女の心操なり才藝なりに對して、呈した讚美の辭である。

それに又、順徳院の八雲御抄、第四の鳥の部には、「鳥のそらねは、函谷關にて鳥のまねをして、人に夜あけぬと思はせたるなり」。同、獸の部に、「清少納言抄に、ゆふがみ、これ馬の髪の白きなり」。同、魚の部に、「海月。うみの月。くらげのほね」などあるのは、枕草子に據つて書かれたものであり、更に第五の名所部には、草子中に見えてゐる多くの歌枕が引用されてゐる。是れは歌枕が當時の歌に最も必要な知識であるが爲に、草子も其の方の参考書とされた證據になると思ふ。

順徳院はまた禁祕御抄の中にも、草子を引用して居られる。即ち

梅壺。西白梅、東紅梅之由、在_二清少納言記_一。草木の條

大内儀、諸司皆各別也。郭内猶不_レ參。在_二清少納言記_一。御物忌の條

凡如_レ此事、上古不_レ見。自_二中古_一事也。事始大略一條院御時以後也。清少納言記在_二其子細_一。雪山の條

等の三所であるが、是れは要するに、草子を典故の史料として用ひられた爲の結果である。浅野侯爵家藏の枕草子繪卷は、南北朝時代の物といはれてゐるが、定家の明月記、天福元年三月二十日の條の月次繪の事を述べた中に、二月が齊信卿の梅壺に參る七十一圖であつたと傳へるのは、草子の鑑賞が廣く行はれる様になつた結果に外ならぬ。ましてや藤原季經が、草子の註十卷本朝書目録を著したといふ如き事は、まさに空谷の足音といふべきであらう。

而して之を源氏と並稱する様になつたのは、なほ足利時代に入つてからで、徒然草「折節のうつりかはるこそ」の段が初めてである

まいか。それも彼の段では、兼好が唯、内容的に兩書の踏襲に過ぎぬ事をことわつたのであるが、書の性質なり文體なりからいつても、彼は如實に草子を模してゐる。畢竟愛讀の結果が、こゝまで進んだのである。尤も兼好の此の態度については、早く徹書記物語の兼好を評した條に、「徒然草は枕草子の様なり」といひ、同人の清巖茶話には「枕草子は、何の作法もなく書きたるものなり。三卷あるなり。つれづれ草はまくらざうしをつぎて書きたるものなり」と断定してゐる。それから又、今川了俊の辨要抄の三代集の外にも、常に可見抄物事の條に、伊勢や源氏と並べて「三十六人家集等、伊勢物語、清少納言枕草子、源氏物語等なり。此等は歌心の必ず付くものなり」といつてゐるのも、注意すべき事である。

北村季吟の春曙抄になると、其の卷首の總説では「此の草子の文體やごとなきものにて、我が國の至寶といはれし源氏物語に雙び稱せられて、源氏枕草子と申しつゞけ侍るにや。吉田の兼好法師がつれづれ草にも、此の草紙を庶幾せる所々多し。其の筆のあや、詞の優美、心の幽玄、更にいはんも今めかしき義なるべし」と激賞し、其の跋文では更に進んで「清少納言枕草子者、中古之遺風、和語之俊烈也、并美於紫女源氏物語、尤當開觀之者也」とまでも稱してゐる。此の源氏を我が國の至寶といつたのは、一條兼良の源氏花鳥餘情の序言であつて、此の時代の初から既に、兩書を並稱してゐる事は、前に述べた通りであるから、敢て異とするに足らぬ。併し季吟の源氏より優るといつたのは、其の好む所に偏したといふ評は免れぬし、又概括的に、詞の優美、心の幽玄を擧げる事は、寧ろ源氏に適して草子には向かぬ。

要するに、草子は時代の經過と共に、古典味が加はり、其の長所にのみ目をつけて、作者の性格などは問題にならなくなつたので、此の邊の事は源氏とは大に違ふが、今日からいへば、寧ろ其の作者の個性が遺憾なくあらはれてゐるのが本書の特色でもあり、又其の價値の高い所以でもある。なほ少しくいふならば、其の觀察の細かい事は、婦人の文として領けるが、奇警な點は、全く男性的である。況や舌鋒の銳利と、叙筆の簡潔とに至つては、物語風の雅文とは、大なる逕庭がある。林羅山は徳川初代に於ける有名な漢學者で、國史國文にも亦通じてゐた。それ故に「紀氏の古今和歌序、土佐日記獨り婦人女兒の口と異日の談なり。紀氏につぐ作者は、それ兼好か」徒然草野槌の序との見地から、徒然草を愛讀するあまり、是れが註釋書を書いたのであるが、どうして其の源流たる枕草子には回頭しなかつたのであらう。是れは恐らく彼のいふ如く、單に文章のみの問題でなく、其の内容が一は教訓的の材料に富むけれども、一は全然趣味的のものであつたからであらう。

省筆や倒置法を任意に用ひ、時には晦澁に陥つてゐる所もあるが、是れには傳寫の際に於ける誤脱も交つてゐる事と思ふ。それから又、用語としては副詞を多く、而も巧に用ひてゐるのは、此の種の寫生文には最も適切であるが、殊に聲貌語の中には、「車やどりに入れて轅ほうとうちおろすを」二十や「又ひそかに忍びて來る所に、長鳥帽子して、さすがに人に見えじと惑ひいづるほどに、物につきさはりてそよるといはせたる」の、「ほうと」「そよると」の如き、他には見えぬ新造語もあつて、一層現況を活躍させてゐる。是等の點は我が國では確に獨創であり、在來の型を破つてゐる。こゝをおさへて、季吟が源氏にまさるといふのならば、一理はある。

草子中の文章は、金子氏の校註本の初に見えるが如く、叙事文、感想文の二種になり、感想文は又、(一) 事實に關するもの、(二) 何は、(三) 何々するものの、三つに分ける事が出来る。而して此の叙事文は、主として彼の殿中日記で、當時に於ける雲上の實寫であるから、文學としてのみならず、歴史上の參考としても最も價值のあるものである。而して李義山の雜纂に範を得たらうといはれるのは、此の(二)(三)の部分である。義山は有名な晚唐の詩人で、宣宗の大中年に四十六歳で歿した人であるから、恰も仁明天皇の嘉祥三年に相當する。其の著雜纂は、極めて分量の少いものではあるが、命題といひ、取材といひ、排列といひ、頗る相似た點がある。其の例を挙げると、次の如くである。

必 不 來

醉客逃_レ席 客作偷_レ物去 逐_三王侯_一家人 把_レ棒呼_レ狗 窮措大喚_三妓女_一

殺 風 景

花間喝_レ道 看_レ花淚下 苔上鋪_レ席 斫_レ却垂楊 花下曝_レ棍 游春重載 石筍繫_レ馬 月下把_レ火 妓筵說_レ俗事

果園種_レ菜 背_レ山起_レ樓 花架下養_三雞鴨_一 對_レ花啜_レ茶 煮_レ鶴燒_レ琴

枉 屈

好父母無_三好子_一 好兒無_三好婦_一 好女無_三好婿_一 有_三錢不_レ會_レ使 好衣不_レ會_レ著 好廳館不_レ灑掃 有_三正帛_一

不_レ裝著 好顔色不_レ解_三正配_一 好妾驅_三使重難事_一 惜_三錢有_レ病不_レ醫 男女長成不_レ教 家藏_レ書不_レ解_レ讀 明

月夜早睡 有_三好花不_レ吟_レ詩酌_レ酒 近_三好山水不_レ遊玩_一 有_三美味不_レ慳藏_レ臭腐 清要官自犯_三贓罪_一 有_三美質

懶惰廢_レ業 權在_レ手不_レ作_三好事_一 年少時好_レ問不_レ習_レ事

是れは義山の一新機軸であつたので、彼の地に於ても非常に有名であつたればこそ、宋の王君玉の續篇、同蘇子瞻の又續を始として、明の黄允交の三續、清の章光猷の新續、同顧鐵卿の廣雜纂の如き、之を模する者も出來たのである。さうして證據はないけれども、時代から推せば、此の書が我が國に渡つてゐたと考へる事が、強ち失當でもなく、其の類似から推せば、清少が之を模したとも、考へられる譯である。そこで此の説は古くから行はれてゐたと見え、石原正明の年々隨筆、卷一には、次のやうにいひ、其の價値の甲乙に就いても論じてゐるが、義山の爲にはちと氣の毒に思ふ。即ち

隨筆の中にいひ、今からやまにわたりてめでたきは枕草子、李義山が雜纂にもとづきたりといふ説あり。時代のほどを思ふに、さる事ならんも知りがたし。又偶合ならんもいかで知らん。いとよう似たりといふ人もあれど、そは紫磨金身のとへに、黄疽やみを引出るがごとし。其色こそ似たらめ、尊さときたなさと、いとよくこよなし。から人もかの雜纂をなほ清少と親交のあつたと思はれる、和泉式部の集の詞書には、

つれづれなりし折、よしなしごとにおぼえし事

世の中のあらまほしき事(歌五首あり略す)

人に定めさせまほしき事(歌四首、同上)

あやしき事(歌二首、同上)

苦しげなる事(歌二首、同上)

哀なる事(歌五首、同上)

の如きがあつて、金子氏の評釋にも注意されてゐるが、是れも偶合か。否々、其の間には何等かの關係のあつたものではあるまいか。

梁塵秘抄の中に、「此の頃都にはやるもの、」すぐれて早きもの、「心すごきもの、」すぐなるものは、「むさの好むもの」等の題を設けて、類を並べ數へたのは、佐々木博士の和歌史研究にもいはれた如く、當然枕草子の模倣であり、建武二年二條河原の落書は、「此の頃都にはやるもの」の歌ひ出しからが、彼の梁塵秘抄の今様にならつたものである。

執筆の動機については、春曙抄の清少が老後の零落をいつた次に、「此の草紙にも、其の昔をしたふ思ひをのべて、此の皇后宮の御威勢ありし程の事を所々にかきあらはし、我が身のかくほめそやされし事ども、數多か、れ侍いしにや」とあるのは、中宮にお別れしての後の追記と見たものであり、武藤氏が、

其の宮仕するに當り、儕輩と相容れざりければ、心に慊らすやありけん。中宮のゆくりなく不幸の境に陥らせ給ひしかば、悲境に堪へずやありけん。殊に里居のつれづれなる折には、いかなる事をや感ぜけん。心の動く所は、やがて筆に移り、筆

路を垣々たる平原に取らずして、あるは谿間に取り幹旋し、あるは巖角を掠めて曲折せり。かかる文體に、よく險語を用ふるは、只に女流のみならず、男子にもあるべし。文人は失意の時に、得意の文字を得る事多し。もし少納言順境にありて、一時の榮花を極めたらんには、かかる文藻を得べしやば。

とあるのは、長徳二年中宮御境遇の大變化後、なほ續いて清少が奉仕中、里居のつれづれなどに書いたものとの見解であり、藤岡博士は、いつ書いたかは詳ならぬが、其の擱筆は長保四年であらうと、いつてゐられる平安朝が、是れは淑景舎にも續いて奉仕したものと見て、其の宮中奉仕間の手記と見られたものであらう。全史

以上述べた所には、それ／＼支持説もあり、各相當の理由がある。しば／＼問題にするが、小白河の結縁八講の段三十の如き、「三位中將とは關白殿をぞ聞えし」とあるからには、道隆の關白時代に書いたものである事がわかり、「關白殿の黒戸より」の段百十に、道隆の權勢は、道長をも踰躍せしめた驚畏をつく／＼中宮に申し上げると、中宮は「例の思ふ人」といつてお笑ひになる、其の後を受けて、「まして此の後の御有様、見奉らせ給はましかば、ことわりと思しめされなまし」といつてゐるのは、道長の後の榮華を御覽にならぬ、中宮の御上を追懐したもので、其の崩御後の記述と見られる。

併し私の考は、やはり其の時々の日記や感想録で、無論宮中出仕以前の者もあると思ふ。物語ならばいさ知らず、日記として服装態度應待等にわたつての、斯の如き細かい寫生風な文章は、其の印象の生々しい中でなければ、とても書けるものでない。第一に書かうと思ふだけの興味が抜けてしまふ。小白河の段に、彼自身が「義懐の中納

言の御有様、常よりもまさりて清げにおはする様ぞ限りなきや。上達部の御名など書くべきにもあらぬを、誰なりけんとい少し程経れば」といつてゐるのは、即ちそこである。そののみでない。此の段の如きは、官位が實によく合ふ。是れは六月十日過の事であるが、翌月二十日には、大納言から右大臣に轉じた爲光、從三位右中將から正三位權大納言となり、同二十二日には更に從二位に進んだ道隆等を、藤大納言、三位中將といつてゐる。追記の文では中々かういく者でない。なほ又此の段は、八講聽聞の顛末を記するのが目的で、直に書いて置いた處が、其の二十日過には、義懷出家の突發的事實があつて、驚いたのである。「さて」以下がそれで、極めて簡單に、一首の引歌で其の感慨を追記したのであつて、此の後の事があつて前を書き、或は其の前後を見てから、一つの計畫を立てて書いた様な文ではないと思ふ。かういふ觀點から、彼の初宮仕を前には正暦三年と定めたので、金子氏の評釋に、正暦二年とし、此の時權中納言であつた伊周を大納言殿と書いてゐる百六の十段のは、記事當時の官を前に及ぼしたものだ、との説には賛成しかねる。

雪の山の段七十の如きは誰が見ても純日記である。此の外文段の長いものでは、積善寺供養二百三があり、淑景舎との御對面九十がある。なほ又、清涼殿のうしろ二十にしろ、かへる年の二月七十にしろ、かばかり生彩に充ちたものが、其の當座の執筆でなくてどうしよう。八十八段は、中納言隆家が參つて、扇を献上した時にちよつとして警句を吐いて、隆家を感じさせたといふ事が書いてある。其の段の終に「かやうの事こそかたはらいたきもの」の中に入れつべけれど、ひとことな落し、といへば如何はせん」といつてゐるのは「かたはらいたきもの」

の段を書いた後であり、且は清少の殿中日記は人も知り、且は中宮にも時々御目に懸けてゐたからでもあらうと思ふ。なほ本書の跋文に、執筆の時や、内容の事や、世に廣がつた由來について書いてゐる所もあるから、後にいふ事にする。

貫之が旅日記を書いたのは、消閑の外に憤る所があり、且は女兒を喪つた悲しみを紛らす爲といはれ、道綱の母のかげろふ日記を書いたのは、夫兼家に對する悶々の情の、せめてもの遣り所であつたらう。いづれも失意の人、薄命の人、そこには此の種の貴重な文學が生れた。清少も亦あやにくな境遇に立ち、悲痛な運命に終つた人である。一度はあこがれた宮仕、御懇望に依つて上つて見れば、意外な恩寵、ありがたさが身にしんで、どこまでも中宮中心に活動し、其の感激や己の才氣發露を、誇耀的に書き綴つて、何よりの自己満足に供したものである。中宮の御失意は、自分にとつても、此の上ない心の痛手である。是れに觸れる事は、實に堪へられなかつたのであらう。筆が此の方面に延びてをらぬのは、其の爲である。況や其の崩御後に於ては、なほ更の事で、此の隨筆が續いた筈もないと思ふ。とはいへ、元の日記は、清書もしたらう。「さば得よ」とて下賜された料紙には、紙すきの彼とて、殊に謹書もしたかのやうな氣がする。讀み返し見返しした事も無論あるだらう。加筆もしたらう、前に述べた事實が之を證明する。省略もし、所によつては書き改めもしたらう。是れが今日の枕草子と私は思ふ。

六 枕草子といふ題號

枕草子といふ題號が、本書の跋言から起つたといふのは、周知の事である。けれども、是れは後の人の附したもので、清少自身は別に命名もして置かなかつたから、もとは作者名で呼ばれたらうといふのが、有力な説である。順徳院の八雲御抄にも、前にも述べた如く、多く引用されたのであるが「清少納言」もしくは「清少納言抄」と見え、「清少納言 草子」、「清少納言草稱」草子の誤「清少納言 枕」とする所が各一個所あるけれども、此の草子や枕は、後人の加筆であらうと思はれる。唯同書第一、學書の私記中に、「清少納言枕草子」とあるのを見るけれども、此の私記の部分は、有賀有伯が校合に用ひたといふ、爲家自筆本には、全然ないといひ、刊本の此の項にも、「御本云、誰人記載可尋」と註してゐるので、此の御本は、有伯が用ひた幽齋本か、或は其他の古寫本か詳でないが、兎に角それにあつたのを、刊本には移したのであらう。あまり信を置かずともよからうと思ふ。それから同院の禁祕御抄には、三所引用してあつて、いづれも「清少納言」となり、明月記には唯「清少納言」四七頁とある。唯七卷本康頼寶物集第二に、「清少納言が枕草子」とあるけれども、自筆本と傳へられる圖書寮本にはないから、是れも證據にはならぬ。

併し跋文にあれだけ書いてあるのは、名はと問はれば、枕草子と答へむといふも同然で、作者の意のある處は明瞭である。だが、枕草子は汎稱で、或一種の作物の特稱としたい事は、無名抄などと同様である。元來枕草子の語は、榮花物語、わかばえの卷に「御前の方に、西の對にて見わたし給ふに、更にもいはず、衣のつま重なりて、うち出したるは、いろ／＼の錦を枕草子につくりて、打置きたらん様なり。重なりたる程、一尺餘ばかり見えた」とあるのが初見で、是れに就いて、伊勢貞丈の如きは「枕にせん料に、いろ／＼の錦をいくらも重ねて、草子

の如く重ねてとぢたるを、枕草子といふにや」安齋隨筆 卷二といつてゐるが、これは誤りで、衣服の重なりが、厚い綴本のやうだと、形容したのである。其の證據は後のものではあるが、藤原信實の歌に、

とぢおける枕さうしの上にこそ昔がたりの夢も見えけれ新撰六帖 第二

とあるのが、裏書すると思ふ。

然らば此の本は、如何なる性質のものかといへば、契沖の河社には、顯昭が「奥儀抄いでて後、誰か之をまくらさうしにせざる人ある」といつたのを引用し「枕は常にもてなすものなれば、枕にもするばかり、もてあそぶ物なり」と解し、加納諸平の枕詞考には、古今序の「それまくらことばは云々」につき、顯昭の古今序註下に引いた、教長卿註の「それまくら詞とは、常詞なり。枕造紙などは、常に手ならずものなり」との説に據り、榮花の文や信實の歌をも併せ考へて「常にわが傍におく今の世の手控へなどの如きをすべて枕冊子といふ也。清少納言の枕草紙に、枕にこそはし侍らめといへるも、常に手ならず冊子にせんといふ意にて、同じ趣なり」とあるが、隨ふべきであると思ふ。

恰も清少納言と同時代の人である、横川の恵心僧都、源信が、長保三年三月下旬に、宗門の要旨を書き綴つた短篇があつて、枕雙紙と稱してゐる。是れも自身の命名か否かは詳ならぬが、其の故由は、參首に、

竊以一期縦横不出一念三千世間即空假中。縦者五時、横者四教、一念三千者自受用也。此三箇條爲宗要柱。仍畫置座右、夜置枕上。學之觀之、爲出離鏡。

と見え、巻尾にも亦同じ趣の語が繰り返されてゐる。即ち座右に對する枕上で、左右とか身邊とかの意に外ならぬ。之を見ても、枕草子と熟した語は、先人の説にもある如く、普通一般に手控帳とか、備忘録とか、日記簿とかの意に用ひられた者と思ふ。されば之を固有名詞、即ち特稱とするには、源信とか清少納言とかいふ名を、上に添へねばならぬ。源信枕草子の刊本内題は、唯枕雙紙とのみあるが、私の藏本の外題ははげて、そのあとに書いてはつたものに、横川枕雙紙とあるのは、横川は源信の居た所だから、こんな名も古くからあつたものだらうと思ふ。右様の次第で、清少の枕草子は、清少納言枕草子といはれた筈である。けれども、是れは書名としては長過ぎる。それ故略していふとすれば、下の部分である。其のあらはれが、八雲御抄以下に見える。上の部分たる作者名をはずしても、それと知られる様になつたのは、他が此の時代語と共に埋れて、清少の作がひとり玩ばれる事となつた爲と思ふ。其のあらはれが徒然草などである。けれども、正確にはやはり清少納言枕草子といふべきで、本朝書籍目録や、源氏河海抄などには、さうなつてゐる。徳川時代此の方は、枕草子枕草紙と書くで通つてゐるのだが、それでも慶安刊本の外題には「清少納言」とあり、契沖の代匠記などには、所によつて「清少納言」ともいひ、又「枕草子」ともいつてゐる。さて又今は、誰しも「まくらのさうし」といつてゐる様だけれども、信實の歌や其の他のを合せみると、此の「の」の助詞は、もとは添へなかつたやうである。

今の草子の順序の亂れてゐる事は、いふまでもないが、脱文も亦ある事と思ふ。河海抄、權の卷の「ありつる老らくの心げさうも、よからぬ物のたとひと聞きしかど」の條の註に「清少納言枕草子、すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月夜と、云々」、同「すさまじきためしにいひ置きけん」の條の註に、「清少納言枕草子、十列冷物、十二月々夜、十二月扇、十二月寥水、老女假粧、女醉、胡瓜老、法師醉舞、無酒神樂勅使、社打門競馬、昆崙八仙畫舞」とあつて、此の二條は共に、草子の「すさまじきもの」の段を引證したので、初のは花鳥にも引いてゐるが、今本には見えぬ。然るを契沖の代匠記、卷一「古の姫にしてや」の註に、枕草子に「冷しきもの」をいへる條に「をうなのけさう」といつてゐるのは、どういふものであらうか。後のは雜纂風に譯して並べたのであるが、是れも殆ど今には見えぬもののみである。

七 諸本並に註釋書

枕草子は、春曙抄の卷首に、

此の草紙異本さまざまあり。或は二冊、或は三冊、或は五冊、一決しがたし。古今和歌集、後撰集、源氏物語は、定家卿の證本ありて、世に定まり侍るに、枕草紙には未だ此の卿の御本を見侍らず。

とある如く、古今や源氏のやうに、古くから研究が行はれず、隨つて權威のある定本がなかつた爲に、季吟は尾州から得た上下二冊の本が、紙質も筆跡も古く文意があざやかで、所々に朱點を加へて、且人々の傳、官考が記されてをり、奥には異本兩通書き加へられてゐるから、多本を合せて用捨した事が知られるといつて、之を證本に用

ひ、宮内卿清原枝賢の奥書ある、上下二冊の堺本を一の異本とし、此の類にも少々異本があつて、かはりめが見えるから、多本を見合せて、中のよい所を取つたといふ。春曙抄の本文は、かやうにして作られたので、是れが流布本とも定本ともなつて、明治時代までは來たのである。

ところで、季吟が尾州から得た二冊本といふのは、其の説明に據ると、安貞二年紀元一八八八、後堀河院の御代三月、耆及愚翁が書寫せしめ、舊記を勘へて、時代年月等を註し付けておいたのを、文明七年乙未二一三五、後土御門院の御代仲夏に、正二位行權大納言藤原朝臣教秀が筆寫し、新に朱を以て句點を施した由に見えるもので、畢竟教秀本が更に轉寫されて、季吟に傳はつたものと思はれる。それで、季吟は、此書に於ける勘物は愚翁で、朱點は教秀卿のさしたものと見える、といつてゐるが、恐らく其の通りであらう。かくて此の書に註のないのを惜んでゐた季吟は、湖月抄と同じ趣に、頭と傍とに重要語句の註をして、延寶二年七月に出版したのが、春曙抄十二卷である。後に至り、此の書に、壺井義知の枕草子裝束撮要抄一卷を附けて、十三卷として出してゐる。

時も時、是れより先だつ二個月、即ち此の年の五月に、加藤盤齋の枕草子抄十五卷が開版されたのである。之を古く萬歳抄と稱したのは、ばんさい抄の訛であらう。兎に角本数が少いので、聲價が高く、本文中には、春曙抄よりすぐれた點もある。さて盤齋の抄を著すに際しては、耆及愚翁、並に教秀の奥書ある傳本の外に、「右以官家本一二見合之也。寛正二年七月中旬」の奥書あるもの、並に永正、弘治の奥書ある古寫本や、新古の印本數種に據つて、校正吟味した趣が、卷首に見える。是れが春曙本とは多少ちがふ所以である。

枕草子の古い傳本としては、此の二家の擧げてゐる「耆及愚翁本」の一種しかなかつたと思ふが、之を季吟は上下二冊本と稱してゐるし、本朝書籍目錄にもさうあるが、清巖茶話には三卷とあるから、二卷本の外に三卷本もあつて、徳川時代へ傳はつたものと思ふ。此の本は今日は専ら古本と稱し、宮内省圖書寮所藏のものには、安貞の耆及愚翁の次に、「文安四年秀隆兵衛督太徳書之」の奥書があり、それから教秀のをさしはさんで、正三位清原枝賢の名が見える。是れは初の方が闕けてゐるが、三卷になつてゐる。是れと同類に屬するものは、内閣文庫を始として、久原文庫、松井簡治博士、京都の富岡家等にも藏してをられるが、いづれも三卷である。此の外に本居豊顯博士の舊藏で、今は本居清造氏の架藏に歸してゐる、慶長年枕草子と題する三卷の古寫本があるが、是れは後の部分が開けてゐる。藤村博士の枕草子昭和三年至文堂版は、教科書用として出されたものではあるが、本文は古本中の完本である、内閣文庫本を用ひ、同類の他本を以て校合されたものである。

印本としては木活字版が最初に出たが、是れにも十行、十二行、十三行等の數本があつて、いづれも五卷になつてゐる。武藤元信氏の枕草紙通釋明治四十四年を著されるに當つては、寛永版と思はれる十三行の活字本を底本として、古本其の他の十種十九本に依つて校合し、其のよい所を取つて、本文を整理されたのであるから、他の本に較べては大層文意の通じがよくなつてゐる。併し是れで果して本書の原文に復歸したか否かは、別の問題である。

普通の版本としては、季吟などの本の出るよりも二十五年前の慶安二年に、七卷本が出てゐる。是れに前の活字本を加へたものが、盤齋の所謂印本數種であつたと思ふ。

異本としては、先づ群書類從所收の異本枕草紙二卷がある。是れには「這本 以後光嚴院宸翰本ニ不_レ違ニ一字ニ書寫功了」といふ奥書があるので、宸翰本と稱する。次に元龜元年十一月清原宮内卿枝賢が、堺の人道巴から借りて寫したといふ、堺本二冊、前田侯爵家藏の四冊本等がある。是等は一系統を爲し、順序が古本と異なり、量も亦少いから多分原本から或部分を抄録し、順序を整へたものであらう。

註釋書としては、古く季經抄なるものがあつて、本朝書籍目錄に、

清少納言枕草子 二卷

同註

十卷季經
卿註

と見える。此の季經は、佐々木博士の歌學史にもいはれた如く、有名な六條家の歌人で、清輔の弟、顯昭の兄のそれであらう。此の抄の事は、季吟も聞き傳へてはるが、未だ見ないといつてをり、盤齋も同様であつたらうと思ふ。然るに伊勢貞丈は「季經抄は十卷傳はれども、頼元抄は十四卷といふ内、わづかに四卷残り傳はれり」と明言し、其の著の中に之を引いてゐる。其の中の一所は、清少の傳記に關するものであるが、是れと同じ所が伴直方の枕草子考にも引いてあるけれども、それは恐らく貞丈の抄からの孫引であらう。貞丈は又、此の季經抄は、普通の本よりは、章段もよほど多いといつてゐるが、貞丈前後に於て、誰一人此の季經抄を見たといふ者のないのは、如何なものであらう。それから此の頼元抄なるものも、他に所見がない。隨つて現存のものでは、季吟、盤齋二人のが最古の本となる。是れについて、天明元年十一月の自序ある、岡西惟仲の旁註十卷、附圖一卷がある。是れは兩

抄の後に出たものではあるが、註も略であり、誤も多くて、頗る見劣りがする。藤井高尙が枕草紙新釋十二卷、その養孫高雅が、清少納言枕草子參考十二卷を著したといふ事であるが、歌書刊行會本古今和歌集新釋、卷頭所載、井上通泰博士の「藤井高尙傳」今其の存否を詳にせぬ。

明治になつてからは、松平靜氏の詳解が先頭で、同時代の末には、武藤氏の通釋が出で、大正十三年には金子氏の評釋が出で、昭和になつてからは、續いて同氏の通解も出で、其の他にも數種の參考書、教科用書が出版されてゐる。以上は主として解釋に屬するものであるが、なほ本書なり作者なりに就いての研究も、年を追うて盛になり、有益なる論文も多く發表されてゐる。學海は廣い、渺々として際涯を知らぬ。けれども、之を渡るには、それ／＼津梁があり、渡り始めれば、興味も湧き、意外な收穫も多い。相も變らぬ事ながら、學問は努力であるといふ事を一言して、總説の筆を擱く。

本文解釋

三十一一段

- (一) 段の數へ方は、必ずしも一定してゐる譯ではないが、今は便宜上、本書の参考書として、最も廣く行はれてゐるであらうと思はれる、金子氏の評釋本のに随つた。
- (二) 本文は、流布本たる春曙抄本を本として、古本其の他の本を見合せて、其の好所を採つた。
- (三) 三十段は、時も所もわからず、三十一一段は、所はわかつてゐるが、時はわからず、殊に短文に過ぎぬけれども、共に同一材料を取り扱つたものであるから、必ず讀み合せて、當時の法華八講、若しくは是れに集まり行く聽衆の如何なる性質の者であつたかを知る、資料とすべきである。
- (四) 此の段を解くには、當時の佛教思想や、八講の作法等も、一通り知る必要があるから、別欄に書いて置く。
- (五) 此の段は、總說中に、しばしば引いて問題にしたから、其の項をも参照されたい。

小白河といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達

【参考】 總說中にも

一言した如く、平安時代、文化の進むと共に、風俗は柔媚となり、人心は頗る感傷的になつた。ちよつとした事にも不安を感じ、恐怖に襲はれた。此の時に於て、力を得たのは何といつても佛教である。何かといへば、直に誦經であり、加持祈禱である。僧の加持する様は、二百九十七段でも概略わかるが、紫式部日記の初の方を見ると、一層明瞭である。修驗道の方も、同様に繁昌した。驗者の驗のない事や、法師の墮落してゐた事は、五段や三十一一段の「すさまじきもの」の中にも可なり、深

本文解釋

部結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集まり行きて聞く。「おそからむ車は、寄るべきやうもなし」といへば、露と共に急ぎおきて、實にぞ隙なかりける轅の上に、又さし重ねて、三つばかりまでは、すこし物も聞ゆべし。六月十日あまりにて、暑きこと世に知らぬ程なり。池の蓮を見やるのみぞ、すこし涼しきこゝちする。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣指貫、あさぎの帷をぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、青鈍の指貫、白き袴も涼しげなり。佐理の宰相なども若やぎ立ちて、すべて尊き事のかぎりにもあらず、をかしき見物なり。廂の御籠高くまきあげて、長押の上に上達部、奥に向ひてながくと居給へり。其の下には、殿上人若き公達、狩装束、直衣なども、いとをかしくて、居も定まらず、こゝかしこに立ちさまよひ、遊びたるもいとをかし。實方の兵衛佐、ながあきらの侍従など、家の子

酷に冷評してあるが、それにも拘らず、信頼が決して減少した譯ではない。殊に人間の四苦たる、生老病死の中でも、最も人を戦慄せしめたものは、死である。是れには、王位も珍寶も妻子も随はぬのである。況や老少不定が世の常である。一人行く中有の旅こそ、最も心細い物であつた。茲に後世善所の思想は培はれ、欣求淨土の願望は涌いたのである。現世享樂の思想の最も旺盛な一面には、出家得脱の思想が流れてゐるのを、如何ともする事が出来なかつた。道長の子の顯信榮花物語、日づらのか同養子成信

に於て、「大臣ぞなほ、世を常なきものにおぼして、今少しおとなび（冷泉院が）おはしますを見奉りて、なほ世を背きなんと、深くおもほすべかめり」の巻といふ如き心境に立たれたのは、一つには藤壺に對する道ならぬ戀の報の、恐ろしさの手傳つたので、強ち此の時始まつたものではなく、北山

にて、今すこし出で入りなれたり。まだ童なる公達など、いとをかしようておはす。すこし日たけたる程に、三位の中將とは、關白殿をぞ聞えし。香のうすもの、二藍の直衣、おなじ指貫、こき蘇芳の御袴に、はりたる白きひとへの、いとあざやかなるを著給ひて、歩み入り給へる、さばかり輕び涼しげなる中に、暑かはしげなるべけれど、いみじうめでたしと見え給ふ。細塗骨など骨はかはれど、たゞ赤き紙を、同じなみに打使ひ持ち給へるは、撫子のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師も上らぬ程に、懸盤どもして、何にかはあらむ、物參るべし。

語釋

○小白河 白河は、賀茂川以東、栗田口以北、東山の麓に接する地。白河、北を流れて賀茂川に沿ぐ故に此の名がある。小白河は御堂關白記、寛仁三年三月二十九日の條に、行小白河、小白河等、興猶不盡、從是乘馬行雲林院とあるに據れば、白河に近接した所と思はれる。○小一條の大將 藤原濟時。小一條左大臣師尹の子。當時右近衛大將であつた。○上達部 公卿と同じ。位三位、官參議以上の總稱。○結縁八講 結縁とは、佛に縁を結ぶ意で、俗人が僧を請じて佛縁を結ぶ爲に行ふ八講。○露と共におきて 朝露の置くのと同時に、即ち早曉に起きいで、おきてには、

や、顯光右大臣の子の重家が、盛りの年で出家した。總説中の重要事項の表參のは、之を物語るものである。

源氏の君が、内大臣として秋好を入内せしめ、何一つ心のまゝにならぬ事のない、冷泉院の御代の初に於て、「大臣ぞなほ、世を常なきものにおぼして、今少しおとなび（冷泉院が）おはしますを見奉りて、なほ世を背きなんと、深くおもほすべかめり」の巻といふ如き心境に立たれたのは、一つには藤壺に對する道ならぬ戀の報の、恐ろしさの手傳つたので、強ち此の時始まつたものではなく、北山

「置き」と「起き」をいひかけた。○轅の上に云々 轅は長柄の義、今いふ車の桐樅に當る。之をおろし、牛をはづし、轅の先端を、榻といふ小机の如き形した臺の上のせておく。こゝは車を後向に立て、その轅の上に、車の館が重なるやうにして三列に並べた趣である。○世に知らぬ程に無き程、即ち無類。此の「世に」は、甚だしい意味の副詞に轉用されたので、古く萬葉十二の「あま少女かづきとるちふ忘貝代にも忘れじ妹が姿を」などより始めて其の例が多い。○物も聞ゆべし 説經の聲も、聞えるだらうといふ。○左右の大臣 左大臣藤原雅信、右大臣藤原兼家。當時その上になほ關白太政大臣として頼忠があつた。○二藍 ある（藍）と、くれなる（吳藍の義で即ち紅）との間色だからいふ。すべて服色には、染色、織色、製色の三種あつて、之を二藍といへば、染色は問題がないが、織色は經が紅で緯が紅。製色は表が濃い縹の赤みたるに、裏は縹。こゝは夏季だから、裏なしてあるから、製色でない事は勿論である。○青鈍 今のいはゆる藍鼠。濃い縹（藍）に墨を入れて染めたのであらうといふ。○白き袴 白の下袴で、指貫の下に着用したもの。白は長老人の用ひる色。下の道隆が蘇芳の袴を用ひたのと、對照すべきである。○佐理の宰相 宰相は參議の唐名。藤原佐理。天元元年十月十七日參議に任ぜられ、正暦二年正月二十日辭任。春曙抄本には、「やすちかの宰相」とあつたけれども、安親の參議に任じたのは、當時よりは約一年半後の永延元年であるから、今は古本に隨つた。當時四十三歳。○廂の御簾 中古寢殿の造り方は、七間四面が常法であるが、其の中五間四面が本屋で、之を母屋といひ、其の外側の一間通りが廂で、其の外に簾子がある。簾は母屋と廂と二重にかけるのであるが、母屋のは内みすといつて、格子の内へ、廂のは覆簾といつて、格子の外へ垂れた。○長押 下長押のこと。母屋と廂、又は廂と簾子と高低が

で聖に會はれた、十八歳の折から、「我が罪の程恐ろしう、あちなき事に心をしめて、生ける限り之を思ひ悩むべきなめり。まして後の世のいみじかるべきをおぼしつゞけて、かやうなる住ひもせまほしう覚え給ふものから、晝のおもかげ心にかゝりて戀しければこと云々」

あるから、其の低くなつてゐる所に横に渡してある板の部分。二百三十七段、積善供養の時には、中宮は「一尺上二尺ばかりの高さの、長押の上におはします」とあるが、是れは寺で、特に上段の間が、高く作られてゐたのであらう。○殿上人 四位五位の勅許によつて、清涼殿の殿上の間に仕仕するもの。公卿の次の階級。○公達 攝關大臣又は大將家などの子息。○狩装束 狩衣姿をいふ。狩衣は元狩獵に着したもので、最も略装である。下には指貫袴を用ひる。○直衣 公卿の平服で、下には指貫をはく。之を朝服に用ひるには勅許を要する。○實方の兵衛佐 實方は濟時の兄、侍從定時の男。○ながあきら 前田本に「ちやうめい」とあり、榮花、月宴に「宰相(濟時)の御甥の實方の侍從も、この宰相を親にし奉り給ふ。此の姫君の御兄にて、男君を長命君(相任)といひて、おはす(國史大系本)。

寛和二：出、十六

若の反省的境遇に立たれたのがきつかけで、法華三昧行ふ堂の懺法の聲も、しみみく、腸にしみわたつたのである。是れも罪、彼れも罪、夜座靜に胸に手をおいて考へれば、誰一人犯せる罪のない者はないであらう。而して

て此の罪障を滅し、人世を救ふものは、佛より外にはない。現未來をかけて頼みとすべきは、唯佛のみであつた。當然佛教は盛になつた。諸經の中でも最貴の法門たる、法華經が尊貴された。隨つて其の講説も流行を極めた。八講、三十講、五十講の如きがそれで、大鏡には「此の年頃聞けば、百日千日の講行はぬ家はなし。老いたるも若きも、後の世のつとめをのみおぼしめすめるに八といひ、小野宮右大臣實資の女のかぐや姫も、千日の講を行つたと書いてある。

本文解説

通釋

に。○いみじう咲きたる「いみじう」は、甚しい意。下には「美しく」などの語を入れて聞くべき所。○懸盤 足のついた一種の食膳。上代のは、臺の上に折敷を載せた如き形の物であつたが、後のは造りつけにした。貞丈雜記七、懸盤の事の條に、「三光院内府記云、平生朝夕諸家可_レ用_二此盤_一事に候。雖然各依_二無沙汰_一不用候」とあるから、もと公家では、日常の食膳に用ひたものと見える。○小白河殿といふ所は、小白河の大將濟時殿の御邸なのだ。そこで公卿達が集まつて結縁入講を行はれたが、非常に結構な御催しなので、世の中の人が大勢聽聞に出掛けた。遅く行くやうな車は、寄りつきやうもない」といふから、露の置くのと同時、即ち拂曉に急ぎ起きて行つて見れば、實に隙間もない程に集まつてゐた車の轆の上に、又車をさし重ねて立ててゐるので、三側目位までは少し物も聞えようが、それから後は何も聞えまい。六月十日過て、暑い事は無類である。池の蓮を見やるだけが、少し涼しい感じがする。左右の大臣等をお除き申しては、來られぬ公卿方もない。其の装束は二藍色の直衣、指貫の下に、淺黄の帷のすきとほつて見えるのもあり、少し年を取られた方は、藍鼠色の指貫に、白の下袴を用ひてゐられるのも涼しさうである。參議の佐理なども、年に似合はず若がへつた風で、立ち交つてゐるといふ様な事で、全體が尊い事の至極といふだけでもなく、面白い見物である。廂の間の御簾を高くまきあげて、長押の上方に、公卿方が奥の方に向つて長々と居流れて着席されてゐる。其の長押の下には、殿上人や、若い公達の、狩装束や直衣姿なども、大層具合よくつめて居られるが、それらの人々がおちついてすわつても居ず、あちこちうろつき遊んでゐるのも大層面白い。實方の兵衛佐や、ながあきら侍從などは、此の小白河家の子弟だから、他の人よりは、今少し出たりはひつたりして、物なれて見えた。まだ童の公達なども、

大鏡、けれども、百
頼忠傳、けれども、百
日千日は特別の場合
であり、半は誇張で
ある。日数の關係か
らも、最も多く行は
れたのは、いふまで
もなく八講である。

八講はもと支那に
始まつたもので、我
が國では勅撰が大和
國石淵寺で、延暦年
中に、其の弟子の母
の爲に行うたのが初
めだといふ。此の事
に就いては、發心集
第五、私聚百因緣集
第九、大安寺榮好事
の段、元亨釋書卷二、
勅撰傳等に見える。
其の作法は、法華經
八卷を、一日に二卷
づゝ、朝夕二座に分
け、別々の講師が受
け持つて、四日で終
了するのであるが、

大層かはい、風でるられる。すこし時刻の移つた頃、當時三位の中將とは、今の關白道隆公を申し
たのだが、其の方が、香染の薄絹の帷の上に、二藍の直衣、同じ色の指貫袴を着用し、下には濃い
蘇芳色の下袴と、張つて光澤を出した白い單の大層さつぱりとしたのを着て、歩み入られたが、あ
んなに皆が身輕で涼しさうにしてゐる中に、暑さうてはあるけれども、大層立派にお見えになつた。
細塗骨やら何やかやと、骨はかはつてゐるけれども、赤い地紙の扇子を、唯同じやうに使つてゐら
れるのは、撫子の非常に綺麗に咲いたのに大層よく似てゐる。まだ講師も高座に上らない間に、願
盤なんかで、何であるだらうか、物はわからぬが、めしあがるやうだ。

義懐の中納言の御有様、常よりもまさりて清げにおはする様ぞ、か
ぎりなきや。上達部の御名など、書くべきにもあらぬを、誰なりけ
むと、すこし程経れば。色あひはななくと、いみじく匂ひあざやか
に、いづれともなき中の帷子を、これはまことに、たゞ直衣一つを着
たるやうにて、常に車の方を見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。
をかしと見ぬ人無かりけむを。後に來たる車の隙もなかりけれ
ば、池にひき寄せて立てたるを見給ひて、實方の君に、貴人の消息

第三日目の朝座が、
五卷の日といつて、
提婆といふ悪人や、
八歳の龍女が成佛す
るといふ、經文の意
を講ずるので、最も
重んぜられ、特別の
儀式もあつた。今其
の所役を挙げると、
次の如くである。

一、講師 本尊に
向つて左方に壇
を設ける。講説
すべき經文の品
題は五卷の日なら
ば、妙法蓮華經、
提婆達多品第十
二といふ如きを
讀み上げる。

一、講師 本尊に
向つて右に、讀
師と相對して壇
を設ける。八講
の主役であつ
て、佛名讚嘆、
教化等が終つ

本文

解釋

つきなく、しくいひつべからむもの一人と召せば、いかなる人にか
あらむ、選りて率ておはしたるに、いかゞいひやるべきと、近く
居給へるばかりいひ合せて、やり給はむことは聞えず。

いみじくよそひして、車のもとに歩み寄るを、かつは笑ひ給ふ。あ
との方によりていふめり。久しく立てれば、歌など詠むにや
あらむ、兵衛佐かへし思ひまうけよなど笑ひて、いつしか返事聞か
むと、おとな上達部まで、皆そなたさまに見やり給へり。げに顯證
の人々まで見やりしも、をかしうありしを、返事聞きたるにや、すこ
し歩み來る程に、扇をさし出で、呼びかへせば、歌などの文字をい
ひ過ちてばかりこそは、呼び返さめ。久しかりつる程に、あるべき
事かは。直すべきにもあらずと覺えたる。近く參りつくも心許
なく、いかにと誰も問ひ給へども、いはす。權中納言見給へば、
そこによりてけしきばみ申す。三位の中將、疾くいへ。あま

て、讀師が讀み上げた經文の卷釋(品釋に對する)即ち大意を講説し、更に問者の質問に答辯する。

一、問者 疑問を提出し、講師と問答する。

一、精義師 講師の答説の正偽を判断する。

一、散花師 先づ出讀といつて、道場を清淨にし、淨土の相にするといふ意味の聲明讀を爲す。又花宮を捧げ、聲明を唱へつゝ、青黄赤白黒(紫をも)の五色の紙で作つた蓮花を散らしつつ行道する。清

り有心すぎで、しそこなふなとのたまふに、僕これもただ同じことになむ侍るといふは聞ゆ。藤大納言は、人よりもけにのぞきて、いかゞいひつるとのたまふめれば、三位の中將いと直き木をなむ、おし折りたんめる」と聞え給ふに、打笑ひ給へば、皆何となくさと笑ふ聲、聞えやすらむ。

中納言、さて呼び返されつるさきには、いかゞいひつる。これや直しつることと問ひ給へば、僕久しう立ちて、侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、さは參りなむとて、かへり侍るを呼びてとぞ申す。義備誰が車ならむ。見知りたりやなどのたまふ程に、講師のぼりぬれば、皆居しづまりて、そなたをのみ見る程に、此の車は、かい消つやうに失せぬ。下簾など、たゞ今日始めたりと見えて、濃き單重に二藍の織物蘇芳のうすものゝ上着などにて、しりに摺りたる裳、やがて廣げながらうちかけなどしたるは、何人ならむ。何かは。

人のかたほならむことよりは、げにと聞えて、なかゞいとよしとぞ覺ゆる。

語釋

少が歌を書いたといふのは、此の花片である。三十以上の外なほ大衆といふものがあつて、講行道の時の列に加はる。

一、唄師 着座、低音に別經を唱へる。

一、堂達 同、磬を打つて、始終の相圖をする。

なほ又、五卷の日には、童子二人、一人は薪木、一人は片方に水桶、片方に盛花を棒で荷ひ、散花師と共に、法華經をわが得しことは薪木こり菜つみ水くみつかへてぞ得し(拾遺集、卷二十に「大僧正行基よみ給ひける」

○義懷 一條攝政伊尹の男。花山院の伯父に當り、又其の最愛の女御恆子の姉を妻としてゐた關係上、院の爲に最も親近された。○すこし程経れば 少し時がたつと、といふので、下に「忘れるから記して置く」といふ意の句が略してある。○はな／＼と 花々と。美麗なこと。○匂ひ衣の色つや。○いづれともなき中の云々 いづれの服装も美麗で優劣のない中でも、此の人は下に帷子を着て、其の上に直衣をひつかけてゐるのが、直衣一枚だけを着たやうに見えて、目立たぬ氣の利いた輕装だといふ。○消息 案内、文通などをすべといふ。こゝは其の文句を、口で先方に通ずるもの。即ち口上。○つき／＼し 相應しきこと。うまく適當に。○近く居給へるばかり 側近く居られるだけの人。○いみじくよそひして 非常に用意をし装ひとゝのへて。其の使の氣取つた様。○かつは 「かつ」は片て一の動作のある上に、他の動作の重なる場合にも用ひる副詞だが、こゝは、俗言のチヨット位の意。○兵衛佐 實方。○いつしか いつとも分らぬ時の、早く來らむを待つ意の語。○おとな上達部 長老の公卿。○顯證の人々 あらはな事。其の場に顔をさらしてゐる、普通の參詣人。車の内、垂簾の蔭などに居た者以外。本書の二百九十七段に、「三十餘ばかりの僧の、云々。をまともうちひさぎて、讀む陀羅尼もいと尊し。顯證の女房あまた居て、集ひまもりたり」とも見えてゐる。○扇をさし出で、其の女車から扇をさし出して、呼びもどすのである。○歌などの云云 歌などの文句をいひ過つたといふ、其の一點の事由により、呼び返すのであらう。○あるべき

といふ詞書のそふ歌の歌を、聲明にしつゝ行道する儀があり、之を法華讚嘆と稱する。此の日にば又、捧物といつて、參聽の人々から、高貴な物品を供へる如き事もあつた。無量義經を法華の序説として開經といひ、普賢經を其の總括として結經といひ、此の二經を合せて、五日に講ずる事があるが、之をも八講と稱した。

事かは 呼び返すなんのといふ事の、あるはずでない。○心許なく 不安なこと、氣づかひな事にもいふが、こゝは待遠く感ずる意。○權中納言 義懷。○けしきばみ 「けしき」は氣色、ばみはその様子をあらはす接尾辭。様態ぶり、氣取つた風をすること。○三位の中將 道隆。○有心 宇津保、國讓下の「かの仁壽殿のみこ達を見よや、うしんにこそ」や、榮花、根合の「おとなびてうしんにもし給ふ」の「うしん」は、考の深いこと、思慮ある事の意であるが、こゝのは、心に巧み設けて趣向する意。鎌倉時代の初に、構想の深い和歌を有心體と稱したのも、此の方の意味である。○しそこなふ 仕損ずる。興をさますをいふ。○これも唯同じこと 其のまゝにいつてしまつても、興がさめるのだから、かうやつていはずに置くも、同じ事だといふ。○藤大納言 古本の註に「爲光。七月二十日右大將。四十五」とある。其の人であらう。爲光は九條右大臣師輔の男。花山院の女御恆子の父。○人よりも格別に「け」は殊の字の義。○いと直き木を云々 旁註に、曲折のない直き木を折つたやうで、興のない意と解いてある。甚俊判の中宮亮顯輔家歌合、紅葉、二番の判詞に「右歌義實雖無曲折言泉已凡流也」とあるのは、此の意になる。評釋には、後撰集に「いたく事好む由を時の人いふと聞きて」と詞書があつて、高津内親王の「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなき」といふ歌があるが、それが典據で、事好みの隱語になり、女車に物いひかけた、その動作をいつたのだとあるけれども、少しく穿鑿に過ぎはせぬだらうか。○下簾など云々 下簾は、車の前後簾の内側にかけるもので、絹製である。二幅で長さは凡そ九尺五寸、簾の下へ長く出して垂れる。此の下簾なども、今日ではじめて用ひたと見える、新しいもの。○濃き單重 車中の女の服裝を叙するのである。單に「濃き」とあるのは、主

であらう。而して公卿は廂の端の長押通りに、長々と着席し、殿上人は其の下の簀子に居流れた。他からの貴婦人達は車で來て、其のまゝ南庭に車を立てた。清少も其の一人として、忽ち觀察眼を光らせた。「六月十餘日に、暑き事世に知らぬ程なり。池の蓮を見やるのみぞ、少し涼しきこゝちする」といつたのは、短い叙景ではあるが、時節と景色とを浮き立たせ、かかれては後に來た女車への伏線ともなつてゐる。すべて尊き事の限りにもあらず。をかしき見物なり」とは、一面

として紫色。さて其の色の單を二枚ひねり重ねてゐた。單重は五月五日からきるので、源氏の空蟬も、濃きあやの單重をきてゐた事が、其の卷にみえる。さてその上に二藍の織物、蘇芳色の薄絹の上衣を着て、白地に、様々の模様を摺りつけた裳をつけてゐる。裳は、婦人が禮装の時に腰に着けるもので、長く後方に引く。なほ又、織物とは織模様のある布帛をいひ、又裳には多く摺模様といつて、布帛を繪のほつてある型木にあて、繪具ですつたのを用ひる。○しりに云々打かけ車の轆の後方につき出てる所を、鴨尾といふ、そこに裳の裾を出して打かける。○何かは 下に「わるからむ」を略したもの。「此の仕打が、何でわるからう。わるくない」との清女の評言。○かたは まほ(眞秀)に對する語。物事の片なりで、完全にとゝのはぬのをいふ。こゝはつまらぬ歌など詠んで返すことをさす。○げにと聞えて 尤もなこと。成程と首肯される。○なか／＼ 却つて。

通釋

義懷の中納言の御裝束が、いつもよりもまさつて、綺麗でおありの御様子が無類である。公卿方の御名など、書く筈でもないけれども、少し時がたつと、誰であつたらうかと、ついうろおぼえになるから、失禮をも顧みず書いておくのだ。參會の方々の衣の色合は立派で、大層色澤がはつきりとしてゐて、いづれをまさりいづれを劣つてゐるとも、定めかねる中にも、此の義懷は、帷子を下に着て、其の上に直衣を着てゐられるのだが、ホンノ直衣一枚ひつかけたやうに見える輕装で、常に車の方を見よこしながら、物などをいつておよこしになる。それをおもしろいと見ない人は、無かつたらうよ。後から來た女車が一臺、庭上には立てる隙間もなかつたから、池畔にひき寄せて立てたのを御覽になつて、實方の君に、義懷が「人の口上をうまくいひ得る者を、一人よこし

信仰の冒瀆の様にも聞えるが、是れが當時の實情であつた。此の段にしても後を讀んで見れば、佳人才子が互の上の品定めやら、おもしろをかしい應答などが、大部分を占めてゐる。畢竟此の文も、此の日のニカスの爲に書かれたので、若し八講のみなら、いつもの事として、書くべき要もなかつたのである。素より佛の教を信ぜぬ人は一人もなかつたらうし、其の信仰心を滿たす爲の參詣である事は、いふまでもない。けれども、何といつても、血の若い連中はかりである。頁參照如何にも名僧知識

て下さい」といつて召されると、どういふ人かは分らぬけれども、實方が選り出してつれてお出になつたので、義懐は「どういつてやらうか」と、側近く居られる方ばかりでいひ合つて、さていつておやりになつた文句は聞えない。使者が、非常に様態ぶつて、車の側に歩み寄るのを、義懐等は軽く笑つて見てゐられる。その男は、車の後の方に寄つていふ様子だ。久しく立つてゐるから、義懐は、歌など詠むのだらうか。兵衛佐上、返歌を考へて用意して置け」などと笑つて、早く返事が聞きたいと、長老の公卿方までが、皆そちらの方を見やつてゐられる。此の席に集まつて、顔をさらしてゐた一般の參詣人までが、見やつてゐたのも面白い事であつたが、やがて返事を聞いたものか、少し歩いて来る中に、車から扇を出して呼びかへすから、歌などの詞をいひそなたといふ、事由より外には、呼びかへすわけがなからう。あゝも長かつたのに、又呼びかへすなんてある筈の事でない。歌の詞を直すといふ筈のものではあるまいと、清少自身は思つてゐた。使者の近く參り着く間もお待遠で、どうだ」と皆が聞はれるけれども、いはない。義懐が見られると、其の方に近寄つて、様態ぶつてゐる。道隆が「早くいへ。あまり趣向し過して、やりそなたなふなよ」と仰せられると、使者は「申した所がへんもない事で、かうやつてゐると同じ事でございませう」といふのは、清女の車の方まで聞える。藤大納言爲光殿は、人よりも格別にのぞきこんで、どういつたか」と仰せられる様子に見える。と、三位中將は「大層眞直な木を折つたやうなもので、興味も何もない」といはれるので、大納言が笑はれると、一同もわけもなくドツと笑はれる聲が、あの車まで聞えはせぬだらうか。義懐が「それで、呼びかへされる前には、どういつてあつたのか。これが直した詞か」とお尋ねになると、使者は「久しく立つて待ちますけれども、どうともかうと

の様に書かれてゐる清範すらも、僅々二十五歳に過ぎなかつた。戀と無常を等分に、歌の題目とも美の對象ともして、味ふ流の人の多かつた事を、思はねばならぬ。それのみでない、單に消閑の爲の參詣者もあつた事は、三十段に見える。之を不純といへば、不純に違ひないが、かやうな連中に取つては、又是程勝手のよい、おもしろい機會のなかつたらう事は、此の一二段を見ただけでも、優に想像し得るではないか。

慶長古寫本の旁註に、「小野右傳聞、右大將於白川殿令書寫結緣經、以ニハ

も御挨拶がありませぬから、では参りましようといつて、かへりますのを呼んだので」と申します。義懐は重ねて、「誰の車だらうか。見知つてゐるか」など仰せられる中に、講師が高座に上つたから、皆靜に着席して、講師の方ばかり見てゐる間に、此の車は、かき消すやうに、どこにか去つてなくなつた。下簾などは、唯もう今日をはじめつけかへたやうに見え、又其の服装は、濃紫の單重に、二藍の織物、蘇芳の薄絹の上衣などで、車の後方には、摺模様のある裳を、ソツクリ廣げながら、打かけなどしてゐたのは、卑しからぬ人とは見えるが、さて誰であらうか。處で、皆は笑はれたが、さて此の人の仕打が何でゐるからう。人がよくやる、つまらぬ歌での應答などをするよりは、理のあることと聞えて、却つて大層よいと自分は思ふ。

朝座の講師清範高座の上も光滿ちたるこゝちして、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しさすまじき事の、今日過すまじきをうちおきて、唯すこし聞きてかへりなむとしつるを、しきなみに集ひたる車の奥になむ居たれば、出づべき方もなし。朝の講はてなば、いかで出でなむとて、前なる車どもに消息すれば、近く立たむ嬉しさにや、はやばやと引き出で、あけて出すを見給ふ、いとかし

口僧一限三四日一行
講演二寛和二年六月
十八日と見えるの
は、古い勅物に據る
ものと思ふから、参
考の爲に記して置
く。

がましきまで人ごとといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、聞きも入
れず、いらへもせず、狹がり出づれば、權中納言の「やゝまかりぬるも
よし」とて、打笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑き
にまだひ出で、人して、（音）五千人の中には、入らせ給はぬやうも
あらしと聞えかけて、歸り出でにき。

其の初より、やがて果つる日まで、立てる車のありけるが、人寄り來
とも見えす、すべて唯あさましう、繪などのやうにて過しける、あり
がたくめでたく心にく、いかなる人ならむ、いかで知らむと問ひ
けるを聞き給ひて、藤大納言、何かめでたからむ。いと憎し。ゆゑ
しき者にこそあなれと、のたまひけるこそをかしけれ。

さて其の二十日あまりに、中納言の法師になり給ひにしこそあは
れなりしか。櫻などの散りぬるも、なほ世の常なりや。「おくを待
つ間の」とだにいふべくもあらぬ、御有様にこそ見え給ひしか。

語釋

○朝座の講師清範 朝夕二座に分けて、ちがつた講師が受け持つ。清範は播磨の人。法相
宗の僧。無雙の説法上手で、當時文殊の化現と稱せられた。大鏡に、また清範律師、犬の爲に法事
しける人の講師にしやうぜられていくを、清昭律師、同じ程の説法者なれば如何すると聞くに、頭
つゝみて誰ともなくて聴聞しければ、「唯今や過去聖靈は蓮臺の上にてほとほえ給ふらむ」とのたま
ひけるを、さればこそ他人はかく思ひよりなましや。なほかやうの魂あることは、すぐれたる御房
ぞかしたこそ、譽め給ひけれ。今昔物語卷十三、女子死受ニ蛇身ニ聞説ニ法華經ニ得脱語の中に、「清
範嚴久など云ふ止事なき智者どもを請じて、云々。五卷の日、其の講師として龍女が成佛の由を説
きけるに、實に聞く人涙を流して、哀と聞きけるに、云々」など見える人であるが、日本紀略に據
ると、長保元年閏三月二十二日に、三十八で歿したとあるから、此の時はまだ僅に、二十五歳の青
年僧侶に過ぎなかつた。○光満ちたる 威儀、道德の殊勝なる様を喻へいふ。○わびし なやまし
く、難儀なこと。○しきなり 重並。重ね並べた様に、間隙なく。○いかで どうにかして、とい
ふ疑問の意の副詞から、ドウゾといふ希望ともなる。こゝのは是れ。○消息すれば、その趣を通ず
る。案内する。○いとかがしきまで云々 大層やかましい程までに、人が悪口をする。説法の
中途で退出するのを、咎めてである。○やゝ 呼びかけの詞。○まかりぬるもよし 退出するの
も宜しい。○五千人の中には云々 法華經、方便品の中に見える語。釋迦如來が弟子の舍利弗から三
請せられて、いよゝ法華經を説かうとした時の事で、經の文は次の如くである。會中有比丘比丘
尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起、禮佛而退、所以者何、此輩罪根深重、及增上慢、未得謂得、未
證謂證、有如是失、是以不住、世尊默然、而不制止、爾時佛告舍利弗、我今此衆、無復校葉、純有

眞實、舍利弗、如是増上慢人、退亦佳矣。汝今善聽、當爲汝說。前の「や、云々」が、此の條の語であるから、清少も同一武器で應酬した。○あさましう 意外なるに驚きあきれる意の語。○繪などのやうにて 美しい物の静止してゐたのを喩へていふ。○心にく、奥ゆかしい。慕はしい。○ゆゆし 忌々しと書く。いやらしい。○二十日あまりに云々 寛和二年六月二十三日、花山天皇ひそかに宮中をのがれ出て、花山寺に赴いて、出家されるといふ事變が起つた。義懐は、帝の外舅として痛惜最も甚しく、御後を追うて同じく出家したので、時に歳三十。事は日本紀略、大鏡、榮花物語等に委しく見えてゐる。○櫻などの散つた惜しさに喩へるなどは、あまりに尋常で、實は何ともかともいひやうのない、哀れさである。櫻などの散りぬるに喩へむも、なほ世の常なりや」といふべき所で、無理ないひ方。○おくを待つ間の 此の一句は、春曙抄本には「おいをまつまの」とあるのだが、武藤氏の通釋には、古本に據つて改め、且出所として、源宗千（古今集の作者）の「白露のおくを待つ間の朝顔は見ぞなか／＼あるべかりける」（新勅撰、戀三）を引かれたのに隨ふべきである。一首の意は、ほんの暫く戀人の顔を見るのは、却つて見んでおいた方がましだといふのを、花の朝顔に懸けてあらはしてゐる。こゝには之を、義懐はまだ壯年で、かくまでもろく短い盛りとも見えなかつたのを、と痛惜した。此のダニはちとむつかしい用法ではあるが、此の歌の上句を、最もはかない物の對象と限定して、さうまでは（或はそれだけには）いふべくもあらぬ御様子であつたが、今になつて考へると、それ以上だとの意に落ちつく。此の歌を取つて詠んだ、定家の「朝露のおくをまつまの程をだに見はてぬ夢を何に喩へむ」（拾遺愚草上、後朝戀）の歌を見合せて悟るがよい。

通釋

朝座の講師清範があらはれたが、何がさて高座の上も光輝燦爛たるばかりの尊い感じて、非常な結構さであつた。所が自分は、暑さの難儀な上に、しきして置いてはいけない用事があつて、今日中に果さねばならぬのであるが、それをすて置いて唯少し聞いて歸らうと思つて来たのに、自分の車は、隙間なく集まつてゐる人の車の奥にはひつて居ただから、出るべき道もない。朝の講がすんだら、どうぞ出よう、出たいと思つて、前の車などに其の案内を通じたれば、近く車を立てられるのが嬉しい爲か、早々と引き出して道をあけて、自分の車を出してくれるのを、人々が見られた。さて説法半ばの退出は、不都合だといふので、大層やかましい程までに、人が悪口をいふので、老公卿までが、自分を笑ひにくむのを、聞きも入れず、返答もせず、こみあつた中を狭がつて出ると、義懐の君が、やや退出するのよといつて笑はれたのは、結構な御様子であつた。しかしそれも耳にも止まらず、何分暑いので、まごつき出ても、やがて人を以てあなたも、五千人の増上慢の中におはひりにならぬといふ事もありますまい」と、人を以ていひかけさせ歸つて来た。八講の初日から、そのまゝ續いて終る日まで、聴聞に来てゐる車があつたが、人が其の側に寄りつくらしくも見えない。すべて唯あきれるばかりで、繪かなんかのやうで過したから、珍らしい結構な奥ゆかしい事に思つて、どういふ人であらうか、どうぞ知りたいと思つて、尋ねたのを聞かれた藤大納言が、何が結構だらう。大層にくい。いやらしい者である」といはれたのは、面白かつた。それから其の月の二十日過に、義懐中納言が出家をされたのは、哀な事であつた。櫻などが散つたのに喩へて惜む位では、まだ／＼いひ足りない。白露のおくを待つ間の」といふ歌に見える如き、それほどまでに、前途の短い御榮えとは、見えぬ御様子であつたのに、さてさて残念な事であつた。

枕草子

〔後篇〕

鳥野幸次

枕草子 後篇 目次

本文解釋

百六十段	八三
二百六十九段	一〇四
六十九段	一一〇
百十六段	一一五
七十一段	一二一
百二十四段	一三九
百十四段	一五四
百十八段	一六〇
九十一段	一六六
七十五段の一節	一六七
二十五段	一七五

百九十五段	一八〇
百九段	一八四
百三十二段	一八八
百三十九段	一九五
六十三段	二〇四
五十七段	二一四
三百段	二二四
三百一段	二二六

—〔目次終〕—

枕草子 後篇

鳥野 幸次

本文解釋

百六十段

- (一) 作者が召されて中宮御所に始めて宮仕をした當時の記録で、年代のおほよそに知られるものとしては、前に解釋した三十二段に次ぐ。
- (二) 併し之を正暦三年冬の事とすれば、參照前の寛和二年との間には六年の隔たりがあり、此の間の作者の經歷こそ、吾人の最も知らんと欲する所ではあるが、殆ど手がかりがない。尤も草子中には白馬見物段三の如き、宮仕以前の記述もあるが、それは極めて僅少と思はれ、此の奉仕當座からばじまつて滿二ヶ年間、即ち伊周の大納言時代の事が、最も多く書かれてゐる。
- (三) 當時中宮は御入内後足掛三年で、御十七、伊周は十九、作者は二十七、八である。中宮

本文解釋

の御慧敏な事は行文中に見え、而も作者に對する御信任の厚い事は、かれて名聲を聞いて敬慕してゐられたからの事と思ふ。

(四) 此の時參つた御殿は、當時の中宮御在所なる登花殿であつた。其の事は春曙抄本には見えぬが、古本には「るさりかへるやおそきと、あけちらしたるに、雪降りにけり。登花殿の御前は、立部近くてせばし。雪いとをかし」八八頁とあり、前日本も同様であるのでわかる。

【参考】 曾ては「ばつかに見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。如何ばかりなる人、九重をかく立ち馴らすらむ」(三段)と、思ひやりつゝ羨んだ作者である。此の心持からいへば、正に希望の達成である。殊に此の年までには様々な境遇に逢つて、サンザン苦勞も

宮に始めて参りたる頃、物の恥かしき事數知らず、涙も落ちぬべければ、夜夜参りて、三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得さし出づまじうわりなし。「これはとあり、かれはかかきなど宣はするに、高坏に参りたるおほとなぶらなれば、髪筋なども、なかなか晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見なです。いと冷たき頃なれば、さし出ださせ給へる御手の僅に見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里びごこちには、いかがは、かかる人こそ世におはしましければ、驚かるるまでぞまもり参らする。

して來たに相違ない。かくて此の中宮奉仕は、勿論ないが、作者の最後の安住所として與へられたもの。それだけに責任も感じ、心配も多かつたと思ふ。随つて相當驛馬になつてゐた筈の彼の女といへども、恐懼せざるを得なかつた。否、是れがむしろ日本人として、天朝に對し奉る感情の自然である。發端の「物耻かしき事數知らず」に始まつて、「耻かし」(「つつまし」も同じ)の語を、幾度となく繰り返してゐる。「耻かし」は、蓋し此の段の字眼として一篇を貫いてゐる。恰も紫女が怪奇幻妖な夕顔

曉には疾くなど急がる。葛城の神も、暫しなど仰せらるるを、いかですぢかひても御覽せられむとて、臥したれば、御格子もまゐらす。女官参りて、「これ放たせ給へ」といふを、女房聞きて放つを待てなど仰せらるれば、笑ひて返りぬ。物など問はせ給ひ、宣はするに、久しうなりぬれば、下りまほしうなりぬらむ。さは、はやとて、よさりは疾くと仰せらるる。

語釋

○物の耻かしき事數知らず 「數知らず」は、數量に關する語から轉じて甚しい意に用ひるもの。婦人が座側に立てて人目を遮るに用ひ、三尺のを普通とする。一九〇段の「人の家につきまゝしきもの」の中に、「三尺の几帳」と特筆したのは是れが爲で、母屋や庇の間の簾にそへて立てるのには、四尺のを用ひる。三九七段に「身屋に四尺の几帳を立て、云々」とあるのは其例。○高坏に参りたるおほとなぶら 高坏は食器を載せる具で、今腰高といふものゝ類。之をさかさまにして其の上に油皿を置き、燈臺に代用した。低くて近くが明るいからである。二六六段の積善寺供養の處にも、「南の院の北面にさしのぞきたれば、高坏どもに火をともして、二人三人四人さるべきどち、屏風ひき隔つるもあり」と見えてゐる。「おほとなぶら」は、「おほとのおぶら」(大殿油)の約言。春註本には「おほとのおぶら」とあるけれども、今は古本に従つた。○顯證 しばしば使はれ

の巻を書くのに、「あやし」の語を疊用したやうに。而して其の耻ぢ方の如何にも處女のその如くなるのも、幾分の誇張を思はしめぬではないが、考へ直すと、やはり正直正銘の所らしい。是れに對した伊周は、如何にも早熟といふ感があり、才智學問も相當あつたのだが、それと同時に、門地に誇つて世にこはし者のない坊ちやん育の其の人を夢覺せしめる。

ところで、作者も「さぶらひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなき業にこそありけれ」と自白してゐる如く、目ならずしてはにかみが抜

け、地金にかへり、脱兎のその如き活躍振りを示す事になつた。

當時中宮に奉仕した女房の数は、幾人位であつたらうか。彰子が女御として入内されるに際して、選ばれたのが、女房四十人、童六人、下仕六人であり、いづれも「いみじくえりと」のへさせ給へるに、やむことなきをば更にもいはず、四位五位の女といへど、殊にまじらひあしく、なりいでたち清げならぬをば、あへて仕まつらせ給ふべきにもあらず」(茶花、かゝやく藤壺)といふ趣であつた。又後のものであるが、建禮門院右

ひけるに、目に見えぬ者はら／＼と参りわたしたりければ」などの「参り」は、それである。同じ語を相反した兩意に用ひる事は他にもあつて、注意せねば紛れるのであるが、是れが此の時代、語の用法の自由で、而も面白い所である。○よさは疾くと仰せらる「よさ」の「さ」は、「夕されば」、「夕さり來れば」などのサレ、サリて、なる意の語であるが、後には單に夜の意に用ひたので、今の口語にも残つてゐる。「仰せらる」は春註本には「仰せらる」とあるけれども、今は古本に従つた。

通釋

中宮御所に始めて出仕した頃は、耻かしい事が無類で、涙も落ちさうだから、夜々上つて、三尺の御几帳の後に伺候してゐると、宮様は繪などを取り出してお見せ下さるのにさへ、手もようざし出し兼ねるほどで、何とも仕様がな。宮様が「これはどうだ、あれはかうだ」と説明して下さるのだが、高坏の上に點された燈火だから、手元が明るくて、髪の毛なども、却つて晝より

りははつきりと見えて耻かしいけれども、こらへて見などした。ひどく冷たい時季だから、宮様のおさし出し遊ばす御手の少しばかり見えるのが、大層色澤がよくて、薄紅梅色なのは、此の上なくお美しいと、まだこんな高貴なお方に接した事のない下衆な感じには、まアどうでしょう、こんなお方が世にいらされたのだなアと、驚かれる程で、お見つけ申し上げた。

曉には早くさがらうと、氣がせく。すると宮様は「晝は顔を見せぬ葛城の神同様のお前も、まア暫らく」など、おとめになるのを、どうしてはすからでも御目にかける様な面貌であらうぞと思つて、うつ伏して居たから、御格子もまだあげてない。ところへ主殿司の女官が参つて、「之をおあげ遊ばせ」といふのを、お側の女房が聞いてあげにかゝると、宮様は「待て」などとおとめになる

から、女房は笑つてひき下つた。自分に物などをお尋ねになり、又お話をして下さるので、長くなつたものだから、宮様は「下りたうなつたであらう。それでは早く」とお許しが出来、同時に「夜さらは早く上れよ」と仰せられた。

るさり歸るやおそきと、あげ散らしたるに、雪いとをかし。今日は晝つ方參れ。雪に曇りてあらはにもあるまじなど、たびたび召せば、この局あるじも、さのみや籠り居給ふらむとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思し召すやうこそあらめ。思ふにたがふは憎きものぞと、唯急がしに出し立つれば、我にもあらぬこちすれば、參るもいとぞ苦しき。

火燒屋のうへに降り積みたるも、珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに、向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるままに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人

京大夫集に據れば、もと門院に奉仕した女房は六十餘人であつたといひ、源氏、葵に、女房三十人ばかりおしこりて云々とあるのは、左大臣家の姫君で、源氏の君の正室であつた資上に仕へた女房の數であるから、かたがた通はして四十人以上五六十人の間と見てよいであらう。而も草子中に名の出てゐるのは、宰相の君式部のおもと、中納言の君、辨内侍、源少納言、新中納言、小兵衛、小左近、左京、右京、右衛門、兵部の十餘人で、此の中最も異彩のあるのは宰相の君ばかり、此の人の事はなほ後段にも云ふ。式部のお

人、唐衣着垂れたるほど、慣れ安らかなるを見るも羨ましく、御文取り次ぎ、立ち居振舞ふさまなど、つつまじげならず、物いひる笑ふ。いつの世にか、さやうに交らひならむと、思ふさへぞつつまじき。おうよりて、三四人つどひて、繪など見るもあり。

語釋

○局あるじ 六段に「家あるじ、局あるじと定め申すべき事の侍るなり」とある條の「局あるじ」は、清少自身で、忽ちかゝる位置につくべき彼の女も、出仕勿々は他の先輩の局に同居し、其の差圖をも受けたので、即ち部屋の頭である。○籠り居給ふらむとする 此の「と」を省いてラムズルといふのは一種の音便で、軍記などには殊に多いが、已に本書中にも見え、又二四三段「わろきもの」の中には、「何事をいひても、『其の事させむとす』、『いはむとす』といふを、と文字を失ひて、唯『いはむする』、『里へ出てむする』などいへば、やがていとわろし」と説明してゐる。○あへなきまで「敢無し」、「敢へず」は、畢竟は一意で、張合のないこと、堪へぬこと。評釋にはどこまでも此の語の本意を追うて、果報に堪へぬほどと説いてあるが、こゝはそれを轉義し不相應なとか、過分なとかいふ意に用ひたものと思ふ。○火燒屋 貞丈雜記卷十四、家作部に「火燒屋といふは、内裏にも、東宮、后宮、齋宮院、齋宮にもあり、御所の庭の明りの爲に、衛士と云ふ官人が火をたく小さき屋なり。夜ばかりたくなり。屋に床なくて、地にて焼くなり。江次第、卷一、元日宴會篇に、撤去東西火炬屋、(註云)東置日華門北掖、西置紫宸殿西掖、主殿寮役、之と

もとは局を同じうした事もあつて、親しかつたやうであり、中納言の君の如き、門地は高いが殆ど問題ならず、他は推して知るべしである。かくて此の宰相の君と相伍して、後宮隨一の出頭人となつた。是れは懸値なしの彼の女の天稟と學問とに由る事で、當然といはばいへ、一方中宮が知己の御恩に對し、感激の情に堪へなかつたであらう。

なつけになる、まるで子供の機嫌でもとる様に。それからいふからかひ半分の事をいつて、とまどひさせられる。恰も二人の年齢が逆にでもなつてゐる様な観がある。葛城の神も暫し、「道もなしと思ひけるに」此の方伊周に對して「から別」の如き、引歌に由る中宮得意の御會話に對しても、清少としてはその御挨拶も出来ぬ、恰も中宮の一人舞臺である。況んや「思ふべしや否や、第一ならすばい」が「と書いた紙片をいたゞいて「九品蓮臺の間に、下品といふ」と書いて参らせると、宮むげに思ひく

見えたり。榮花物語にも、御前のひたきやとり出て見えたり。屋といへども、大なる家にはあらずして、小さき屋にて、持ち來り置き、或は外へ取り出し置く物なり。今世武家に假番所とか云ひて、小さき屋形をになひ歩いて、置く類なるべし」と見え、大鏡、師尹傳に、「火燒屋、陣屋など取りやられける程にこそ、得堪へず忍音なく人々侍りけれ」とあるのは、小一條院が東宮を退かれた時の事である。○沈の御火桶の梨繪したる。沈は熱帶地に産する香木で、當時の船載にかゝるもの。質が重くて水に沈むから此の名があるといふ。梨繪は他に見えぬが、梨子地に蒔繪をしたものであらう。但し古本中の一本には、「まきゑ」とあつて、是れに従へば問題がない。○上臈。禁秘御抄の女房の項に「上臈。不謂是非、二三位典侍號。上臈。着赤青色候御陪膳也。云々。小上臈。不謂善惡、公卿女號。小上臈。着織物并表着也。侍臣女依儀、公達女勿論、諸大夫公卿孫女、或爲小上臈、或爲中臈也、可依父官、云々。中臈。内侍外不着織物類也、是昔號命婦侍臣女已下也、諸大夫良家子、醫陰陽道等、猶號中臈、八幡別當女、同凡一切者、多中臈品也。下臈。諸侍、賀茂日吉社司等女也、云々」と仰せられ、禁中の女房に此の四品のあつた事が知られるが、此はそれとは關係なく、清少よりも上の女房をおほよそにいつたもの。二十段に「さいふいふも、上臈二つ三つ書きて、これにとあるに」の上臈も、亦同様である。○御まかなひし給ひけるまゝに「まかなひ」は取りとへのへる事で、源氏、柏木に、「御視などとりまかなひて、責め聞ゆれば」とある例。食膳の事のみには限らぬ。徒然草、二二三段に、御前の火爐に火をおく時は、火箸して扱む事なし。土器より直にうつすべし。さればころび落ちぬやうに心得て、炭をつむべきなり」とあるのは、即ちお前近くの炭櫃の扱ひ方と思はれる。○長炭櫃。炭櫃の長方形のもの。炭

んじにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそあらめ。清人に隨ひてこそ宮それがわろきぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はれ。段七お互に一上一下、五分の間隙もない應酬の妙味を發揮した彼も、出仕早々の「われを思ふや」との御奇間に對しては愈下キリとしたであらう。隨つてすなほに平凡に「いかにかは」とお答へする外はなかつた。是れではやはり、何の手答もなく、少しの發展性もなかつたのである。然るを計らず、臺盤所での噓といふ相の手が、平地に波瀾を起し、巧に中宮から

櫃とともに室内を暖め、又は多人數寄つて暖を取る爲の爐。○唐衣着垂れたるほど。唐衣は袖長ともに短いので、之を着た様は自然肩から脱けおちさうに見えるのであるが、こゝはそれを特にゆつたりと着寬いでゐる様に取りなした。二十段の「御簾の中に、女房櫻の唐衣どもくつろかに脱ぎ垂れつ」とあるのもそれである。○ゑ笑ふ。ゑみ笑ふこと。畢竟重語であるが、狭衣物語、二にも、「乳母の心ゆきて、物いひゑ笑ひなどするを聞くに、云々」といふ例が見える。○つゝまし。ツ、ム（「慎しむ」の古言）を形容詞としたもの。意も同じであるが、此は轉じて「耻かしい」の意に用ひた。○おうよりて。奥寄りて。後方にひき下つて。

通釋 御前から退出するや否や、格子をあげ散らして見ると、外には雪が大層おもしろく降つてゐた。局に戻つてみると、宮様から「今日は晝間來い。雪で空が曇つてゐて、あらはでもあるまい」と、幾度もお召しがあるから、自分の宿してゐた局の主も、「貴女にそんなに引込んでばかり居ようとなさるので、大層過分な程まで、御前に召されるのは、宮様も御考のある事でしょう。先方の意志に反するのは憎らしいもので、と忠告をして、唯急がせて出すので、氣が氣でないから、お上に出るのも大層苦痛である。上る廊下すぢでふと見れば、火燒屋の上に雪の降り積つてゐるのも、珍らしい面白い景色である。御前の近傍は、お定まりの爐の火を澤山におこして、そこには特に御遠慮して、人もあつてゐない。宮様は沈製で梨子地に蒔繪模様のある、御火桶に向つていらせられる。自分等よりは身分の高い女房が、お側の御用をとりまかなつた其のまま、近く伺候して居られる。次の間にある長炭櫃に、隙間もない程、多勢あつたつてゐた女房達の、唐衣をゆつたりと着垂れてゐる様子が、物馴れて安らかなのを見るのも羨ましいし、其の中には、

捉らへられ、翌朝へかけて、ギウギウいふ程の目に逢はされた。中宮様の頭のよさ、お人のわるさ。是れが畢竟意氣投合の因を爲したので、やがては第一の人に一に思はれる事となつた。斯様な關係は、とても彰子と紫女とのお間には勿論、其の他のお方の間にも見る事が出来ぬ。

噓は古來不吉の兆とした。古今集の俳諧に、「出で行かむ人をとめむ由なきに隣の方に鼻もひぬかな」とあるのは是れで、顯昭の袖中抄、卷二十に、「鼻ひるは何事にもよからぬ事なり。年始にも鼻ひつれば、いはひ事を

御文の取りつきをしたり、いろ／＼の御用に立つたり居たりして行動する様なども、耻かしさうではなく、平氣で物をいつたり笑つたりしてゐる。それを見るにつけ、自分はいつの時に、あんなにつきあひが出来る様になるであらうかと、思ふのまでが耻かしい。後方に引きさがつて、三四人集まつて、繪など見てゐるのもある。

暫しありて、前高う追ふ聲すれば、殿女房參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取り遣りなどするに、奥おに引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳の綻ほころびより、わづかに見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えてをかし。柱のもとに居給ひて、昨日大納言けふ物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさになど宣ふ。「道みちもなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御いらへあなる。うち笑ひ給ひて、あはれともや御覽するるとて、など宣ふ御有様、これよりは何事かまさらむ。物語にいみじう口に任せていひたる事ども、たがはざめりと覺ゆ。宮は白き御衣どもに、

いひていはふなり。されば人の物へいかんする初に、隣の人に鼻ひむを聞きても、くすしからむ人は立ちかへるべきなり」と云ひ、又四分律に「時世尊、諸比丘呪願言長壽、時有居士、噓及禮拜比丘、佛令比丘呪願言長壽、今案、今俗、正月元日若早且噓、即稱曰千秋萬歲、急々如律令、是緣也、何只在元日哉、尋常壽之」と云ふのをも引いたが、草子の二四段「にくきもの」の中に「鼻ひてじゆもんする人、大方家の男しうならでは、高く鼻ひたる者いにくし」とあるじゆもんは、即ち前掲のものであ

紅の唐綾かぢあやふたつ、白き唐綾と奉りたる、御髪みかみの懸からせ給へるなど、繪に描きたるをこそ、かかる事は見るに、現うつにはまだ知らぬを、夢のこゝちぞする。女房と物いひ、たはぶれなどし給ふを、いらへいささか恥かしとも思ひたらず、聞えかへし、虚言うそなど宣ひかくるを、あらがひ論わづらひじなど聞ゆるは、目もあやにあさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御果物みんぐたものまわりなどして、御前にも參らせ給ふ。

語釋

○前高う追ふ聲 貴人通行の際、前驅の隨身が雜人を拂ふ爲にオウオウとかける聲。路頭で行ふ事は勿論、宮城内でも行つた事は、此の段や六十三段でわかり、其のかけ聲が公卿のは長く殿上人のは短いから、大前、小前と名づけた事は、六十四段に見え、中にも近衛の大將の前追ふのは、餘程豪勢なものであつたと見えて、「きら／＼しきもの」四五の最初に數へてゐる。序に云ふが、天子の出御や、御陪膳ごばいぜん。又は祭祀に於ける降神昇神の場合にかける警蹕は、目に見えぬ鬼魅の類を拂ふので、其の意義は全く同一である。○ゆかしきなめり 「ゆかし」の語原を和訓栞には、「心の往かんとする意なるべし」と稱してゐるのは、一理ある説で、慕はしくて心の引きつけられて行く意の語。こゝは「見たい」と譯してよい。こゝは物見たさの證の如く、耻かしさに奥に引つ込みながら、又すきのぞきをする、其の筋の立たぬ矛盾を自ら怪む情そのまゝ、「なめり」といふ

つたらうか。拾芥抄、上、諸頭部の嘘時頰には、休息萬命、急々如律令とあつて、上半がちがふが、いづれにしても、逆にめでたい事をいつてまじなふので、急々如律令は、もと漢土に於ける官符の末文に用ひた語で、後には巫者の呪語となつた。即ち塵添遺抄、卷八に、或記の説として、嘘へば一切の悪鬼邪神は、皆邪道を行するなり。是れを教へ誡めて、急々如律令、可歸正道云也、律令とは法度也といつてゐる。なほ一六一段「したり顔なるもの」の初めに、正月一日のつとめて、最初に鼻ひたる人」を擧げたのは、

推量形でいつた。○御几帳の綻 几帳の帷は四幅又は五幅で、一幅毎に紐を垂れる。綻は一幅と一幅との縫ひ合せ目のすきを云ふ。○道もなし 拾遺集、冬、題しらず、平兼盛の「山里は雪降り積みて道もなし今日來む人を哀とは見む」の歌の句。○哀ともや 前の歌の詞で御挨拶になつた。○白き御衣 御衣は唐衣、上着、打衣等のいづれをも云ふが、こゝは單衣の上に着られた打衣で、紅の袷(重ね)、白の上着となるのであらう。○唐綾 支那から渡つた綾。今の綸子の類といふ。○目もあやに 和訓栞に「あやしき」の「あや」だと説いてゐる。目もくらむ(眩惑)ほどのこと。○あいなく 源氏、桐壺に「上達部うへ人なども、あいなく目をそばめつ」とあり、之を河海抄に、「無愛也」と説いてゐるが、玉の小櫛には、「何といふわきまへもなしに、うちつけにものする事なり。己が身にかゝらぬ人までも、何といふ事なしに、目をそばむるなり」と詳釋し、廣道の評釋には、「何トナムムザト」と、口譯してゐる。

通釋

暫くたつと、前を大聲に拂ふ聲がする。と、女房は、「關白殿(道隆)がお出てになつたのだ」といつて、散亂してゐた物等を取りかたつけなどするので、自分は奥に引つ込んだが、でも見たいのだらう、御几帳の帷の合せ目から少しばかり見やつた。お客のそれは、道隆公ではなく、大納言殿(伊周)が來られたのである。御直衣や指貫袴の紫の色が、雪に反映してうつくしい。柱の側に御着席になつて、「昨日今日は謹愼日でございますけれども、雪がひどく降りましたから、氣が、りて御見舞に参つたのです」と仰せられる。宮様は「積雪で道もないと思つたのに、どうして來られましたか」とお答へになる。大納言殿はお笑ひになつて、「感心だと思つていたゞけるかと思つて参りました」と仰せられる御様子は、是れ以上お立派な何事もないであらう。物語に、作者が

前に「男しうならでば」といつたのと同じ思想で、其の不謹慎を咎めたものと思ふ。なほ嘘の迷信につき思ひ出されるのは、徒然草の四十七段に見えた、或奇特な尼の一話である。即ち掲げて参考とする。

ある人、清水に参りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめく」といひもて行きければ、尼御前、何事をかいは宣ふぞ」といひけれど、答もせへず、なほいひやまざりけるを、たび／＼問はれて、打腹立ちて「やや、鼻ひた

ひどく口に任せていつて居る事なども、是れとソツクリで違ひのないやうに感じた。宮様は白の御打衣などの上に、紅の唐綾の袷を二枚と、白の唐綾の上着をお召しになつて、それにお髪を垂れ懸つていらせられるお美しさなどは、繪にかいたものでこそ、斯様なのは見るのだが、現實ではまだ初めてであるから、まるで夢幻界に居る様な感じがする。大納言殿が女房と物を云ひ、戲言などを仰せられるのに、女房は少しも耻かしいと思はず、平氣で應答をして居る。中には反問もし、戲言などを言ひかけられるのを、それは違ひますといひ争ひ、抗辯などを申すのは、目も眩惑し、驚き呆れる程で、ムヤミと上氣して顔が赤らみます。大納言殿御自身、御果物を召しあがり、宮様にもおすゝめになる。

御几帳のうしろなるは、誰そと問ひ給ふなるべし。「さぞ」と申すにこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらむと思ふに、いと近う居給ひて、物など宣ふ。まだ参らざりし時、聞き置き給ひける事など宣ふ。まことにやさありしなど宣ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥かしかりつるを、いとあさまじう、さし向ひ聞えたるこゝち現とも覺えず。行幸など見るに、車の方に、いささか見お

る時かくまじなば
れば、死ぬるなり
と申せば、養君の
比叡の山にちこに
ておはします、
只今もや鼻ひ給は
むと思へば、かく
申すぞかしとい
ひけり。ありがた
き志なりけむか
し。
序に述べるが、萬
葉十一には、うちな
げき鼻をぞひつる劍
太刀身にそふ妹が思
ひけらし」と、眉
根かき鼻ひ紐とけ待
てりやもいつかも見
むと思へるわきみ
の二首の見えるの
は、人から思はれる
と、噓が出るといふ
俚諺に據つたもの
で、又一つの異なつ
た迷信に屬する。

こせ給ふは、下簾したすだれひき繕つくろひ、透影すゑかげもやと扇をさし隠す。猶いとわが
心ながらもおほけなく、いかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじ
きに、何事をか聞えむ。かしこき陰かげと捧げたる扇をさへ取り給へ
るに、振りかくべき髪かみのあやしきさへ思ふに、すべてまことに、さる
氣色もこそは見ゆらめ。疾く立ち給はなむなど思へど、扇を手ま
さぐりにして、繪えは誰が描きたるぞなど宣ひて、とみにも起ち給は
ねば、袖を押しあててうつつ伏し居たるも、唐衣たういに白い物うつりて、斑まだら
にならむかし。久しう居給ひたりつるを、論ろんなう苦しと思ふらむ
と、心得させ給へるにや、これ見給へ。これは誰が書きたるぞと聞
えさせ給ふを、嬉しと思ふに、賜たまははりて見侍らむと申し給へば、なほ
ここへと宣はすれば、人ひとを捉とらへて立て侍らぬなりと宣ふ。いと今
めかしう、身のほど年には合はず、かたはら痛し。人の草假字そうがな書き
たる草子、取り出でて御覽す。誰たれがにかあらむ。かれに見せさせ

給へ。それぞ世にある人の手は、見知りて侍らむと、怪しき事ども
を、唯いらへさせむと宣ふ。

語釋

○誰ぞ「たれぞ」といふ事であるが、萬葉十一の「誰彼と我をな問ひそなが月の露にぬれ
つゝ君待つ我を」からはじまつて、「たそがれ(誰彼)時」(黄昏)の夕ゆふなど、同様、此の場合の
ソは清音。○下簾 前講、七四頁に見える。○おほけなく 大氣の義、「なく」は助語。大膽、或
は忝かたじけなしの義。一説には負氣無の義で、力に堪へぬ重荷より出た語であらう。
譯する。○振りかくべき髪かみの云々 石原正明の年々隨筆卷四に、「額髪といふは、今髪といふわたり
の髪を、貌の方へ眉尻の程まで解きかけて、末を肩へゆりこしたるものなり。かくするは、貌なかば
髪の中に隠れて、片側よりは見えざる様にとの心しらひにこそ。其の末をそぎて短くして、ともす
れば顔へはら／＼とこぼれかゝる様にしたるは、扇などもなくてわりなき時、ふりかけて面隠しせ
ん料にやあらん」と云ひ、此の條、並に大和物語に、「同じみかど、月のおもしろき夜、みそかに御
息所達の御曹司どもを見ありかせ給ひけり。御供に公忠さぶらひけり。それに或御曹司より、濃き
桂ひとかさね着たる女のいと清げなる、出て来ていみじう泣きけり。公忠を近く召して見せ給ひけ
れば、髪をふりおほひていみじう泣く」とあるのを引例してゐるが、二九七段の物の怪の加持をす
る條に、「凡帳の内にとこそ思ひつれ。あさましうも出てにけるかな。如何なる事ありつらんと、
耻はづかしがりて、髪をふりかけてすべり入りぬれば、云々」と、よりましたに立つた童女の言動を寫し
たのを参照すべきである。ところで、此の時代美人の第一要件たるべき髪が、清少のはわるか

職の神即ち式神は
大鏡、花山院の巻に、
安倍晴明が使役し
て、遠隔の地の事を
視察報告せしめた話
が見えてゐるが、そ
れは無形の物であつ
た。然るに宇治拾遺
卷十一、晴明を試み
る僧の段には、老僧
が式神を二童子の形
にして供につれ、晴
明の邸に赴き、業を
ならはんと申し出た
が、晴明は己をため
しに來たものと知り、
法術を以て、此
の式神なる二童子を
とりかくしたので、
僧は式神を使ふ事は
易いが、人の使ふの
を隠すのは更に叶ふ
べき事でない、心
服して弟子になつた
話がある。即ち護法、
天童鬼神などと同じ

く、童形としたものである。又同書、卷一、晴明封蔵人少將の段には、此の少將に相婿があつたが、其の舅が少將をば殊の外大切に思ひ落して居たので、其の婿が嫉妬のあまり、陰陽師に頼んで少將を祈り殺さうとした。即ち此の陰陽師の使ふ式神が、鳥になつて飛んで来て、偶參朝の少將に尿をしかけた。それを晴明が見て、是れば式神に打たれたので、今夜が危険であり、誠に氣の毒だと思つて、少將に其の旨を告げ、共に同車して少將の邸に赴き、終夜祈り明した爲に、法力の弱い

つた事は、七一段にも頗る自屈的な筆法で書いてゐる。序にいふが女の髪ふりかけるのに對して、男官がなえた姿で清涼殿から退出する場合、遣戸のあいた局の前を通る時には、冠の纒を前に引きこして、顔にふさいで行つたといふ。是れはあまり念が入りすぎて、滑稽を感ぜしめる。(二二〇段参照) ○論なう いふまでもなく。春註本には「心なう」とあるが、古本に従つた。○今めかし當世めいた花やかな事をいふのが本で、こゝは若々しいなどの意に用ひた。

通釋

大納言殿は、「御几帳のうしろに居るのは、誰ですか」とお尋ねになつたのでしようし、女房は、「清少納言其の人だ」といつたのでしよう。立つておいてになるから、外の方へ行かれるのであらうかと、思つてゐると、私の大層近くにおすわりになつて、物などを仰せられる。それは自分がまだあがらなかつた時分に、お聞き込みになつてゐた事などを仰せられ、「本當にさういふ事があつたのか」などと、我が身に關する噂の虚實をお尋ねになるので、御几帳を間にして離れてお見あげするのでさへ、耻かしかつたのを、大層意外にもさし向ひ申したのは、恰も夢心地で、とても現實とは思はれない。是れまで行幸などを拜觀する場合に、お供の公卿方が、私の車の方を少しでも御覽になる時は、下簾をひき直し、それでもまだ透影が見えはせぬかと、扇をさしかざして隠す様にするものを、こんなハメになつたのは、やはり大層我が心ながらも勿體ない事で、どうしてお宮仕にあがつた事かと、冷汗がにじみ出てひどく困るので、何とも申し上げる言葉が出ない。大事な陰だとのみにしてさし上げてゐた、扇までをお取りになつた爲に、顔を埋め隠す爲に、振りかけるべき髪の毛のわりのまを氣にするので、全體本當にさういふ様子もあらはれて見えるであらう。早く立つて頂きたいと思ふけれど、大納言殿は取りあげられた扇をいぢくつて、「此

此の陰陽師が、却つて此の式神の爲に打たれて死んだ話が出てゐる。即ち式神は陰陽師の使ふまゝに、斯の如き災害をも他に與へるものとされてゐた。しかし式神が陰陽師を離れて、人の吉凶禍福を掌る類の事は、物に見えぬが、こゝのは其の思想であらうか。それともやはり陰陽師を介し、此の式神に依つて鼻ひた本人を明らかにし得ようとの意か。兎に角武藤氏の通釋に、「少納言は噓ひた人を憎むあまり、かゝる事を取り出でしなり」といはれた如き心持は看取されるが、陰陽師に頼んでまでの意とは思はれ

本文解釋

一所だにあるに、又前うち追はせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、散樂言などうちし給ふを、譽め笑ひ興じ、我もなにがしがとある事、かかる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、なほいと變化の物、天人などの下り來たるにやと覺えしを、さぶらひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなき業にこそありけれ。かく見

ぬ。

る人人も、家の内いで初めけむ程は、さこそは覺えけめど、かくしもて行くに、おのづから面馴れぬべし。

物など仰せられて「われをば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに「いかにかは」と啓するに合はせて、臺盤所の方に、鼻を高くひたれば「あな心う。虚言するなりけり。よしよし」とて入らせ給ひぬ。いかでか虚言にはあらむ。よろしうだに思ひ聞えさすべき事かは。

鼻こそは虚言しけれと覺ゆ。さても誰か、かく憎き業しつらむと大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おし拉ぎ返してあるを、まして憎しと思へど、まだうひうひしければ、ともかくも啓し直さで、明けぬれば下りたるすなはち、淺緑なる薄様に、艶なる文をもて來たり。見れば、

いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば

となむ、御氣色は「とあるに、めでたくもくち惜しくも思ひ亂るるに、なほ夜べの人ぞ尋ね聞かまほしき。

薄きこそそれにもよらめはな故にうき身の程を知るぞわびしき

なほこればかりは啓し直させ給へ。職の神も、おのづから。いと畏しとて、參らせて後も、うたて折しも、などてさはたありけむと、いと歎かし。

語釋

○猿樂言 サルガクといふ名詞を、サルガヒ、サルガフと活用させても用ひたので、こゝは其のサルガヒ言の音便。此の猿樂言の本家は道隆で、こゝも前に「殿參らせ給ふなり」と待ち設けた道隆の様な氣もするが、其の扱ひの手輕なのはやはり關白其人ではない様だ。春註には、山井大納言道頼か、中納言隆家かであらうといつてゐるが、異腹の兄で溫和な道頼に、こんな性行のない事は勿論で、評釋にもいはれた如く、同母の御弟隆家と見るより外はない。○さこそは覺えけめど 此處で句を切る。下に「今はかくも馴れたり」の意の略された形。こゝまでは人の事、以下の「かくしもて行くに云々」は自身の事で、此の兩句の間には、「さればわれも」の句を入れて見るべきである。尤も古本には、「さこそは覺えけめなど、觀じもて行くに、おのづから面馴れぬべし」

とあつて、文に無理がない。○臺盤所 中宮御殿の御臺所。食器をのせる臺盤が置いてあるからの名。清涼殿西廂のそれと同じく、女房の候所でもあつたらう。○鼻を高くひたれば ヒルは放の字を訓む。クサメ(嚏)をすること。之を不吉とする風俗は、古くからあつたので、委しく参考の中に書いた。○よろしう 可なりな事。一通りよい事。二八七段に、やむごとなき事の裏として、いとやむごとなき人の局ばかりこそ、前拂ひあれ。よろしき人は、制しわづらひぬかし」とも書いてある。○おし拉ぎ返して 嚏が出さうになると、出さぬ様にこらへておしもどす。「あくびをかみつぶす」といふに似た書き方。○たゞすの神 賀茂の札に祀られておはします神で、「いつはりたゞす」といひ懸けた。○御氣色は 下に、あるが略してある。此の御歌は、中宮の御自作と思はれるが、それを御直筆ではなく、女房が書いたので、宮様の思召しは此の御歌の通りとの意。○はな故に 鼻に花をいひ懸けた。かくて「薄き」は花の縁語で、宮様を深く思ひ奉つてゐるものをの意に詠んだ。○職の神もおのづから 式神とも書く。陰陽師の使役する神。(参考の欄に詳説す)「おのづから」て句。自然照覽してゐられるであらうの意。

通釋

お一方でさへ當惑してゐるのに、又前を追はせて、同じ直衣姿の人がおいてになつて、此の方は大納言殿よりも今少しはでやかで、滑稽話などをされるのを、女房が聞いて、譽めたり笑ひ興じたりし、女房自身も亦、誰がどうした事がある、かうした事があるなどと、殿上人の身の上話などをするのを聞くと、驚きのあまり、やはり大した變化の物か、天人などが天下つて来たのかとまで感じたが、奉公し馴れて日數が経過すると、大してさうでもない事であつたのです。随つてかうして驚きの目で見えてゐる女房達も、自分の家の内を出はじめた時は、自分の様に耻かしいとは思つ

たのだらうけれども、今日此の通りだから、自分もかうしてだん／＼日がたつて行くにつれて、自然顔が馴れるであらう。

宮様が物などを仰せられて、やがて「お前は自分を思つてくれるか」とお尋ねになつた。御返辭に、「どうして思ひ奉らぬ事のありましようぞ」と申し上げると同時に、臺盤所の方で、大きな聲で、嚏をした者があつたから、宮様は、「あアいやだ。お前はうそをいふのだネ。よしよし」といつて、奥の御寢所におはひりになつた。どうしてうそでありましようぞ。普通にさへ思ひ申し上げる様な事ではない。即ち非常に深くお思ひ申してゐるものを、嚏すべき場合でもないのに嚏をした鼻こそ、うそをついたのだと思つた。それにしても、誰がこんな憎い事をしたのだらうかと、全體氣にくはぬと思ふにつけ、私が平生嚏のしたくなる時も、出ぬ様におしつぶしてゐるものを、ましてや斯様な大切な場合に嚏をするとは、憎いと思ふけれども、まだ新参者であるから、何とも彼とも御辯解もしないで、夜が明けたから、自分の局に下りるとすぐ、薄緑の薄様に書かれた優美な文を持つて来た。あけて見ると、宮様の仰書で、「空で見てゐて正して下さる賀茂の札の神がなかつたならば、どうしてお前のいふ事の虚か實かがわからうぞ。チャンと神様が見てゐて下さるので、お前が虚をいつたといふ事もわかるのだとの、中宮様の思召しである」とあるので、御歌は結構だが、かういはれる自分としては、まことに残念で、頭が混乱するにつけても、やはり昨晩の嚏をした人が、誰であるか尋ね聞きたい。御返事には、「私が宮様をお思ひするのが薄いのならばこそ、嚏の爲にかういはれても致し方もないでしょうが、是れほど深く思ひ申してゐるものを、嚏ゆゑに斯様に申されるので、薄運な我が身の程が知られるのがつらうございます。やはりどうあつても、是

れだけは申し上げて、宮様の御曲解なさらぬ様にして下さい。職の神も自然見て居て下さるでしよう。大層恐れ多い事です」と書いて、女房にあててさし上げて後も、いやな、あの時にさしあつて、どうしてまたあんな事があつたのだらうかと、大層歎かはしかつた。

二百六十九段

(一) 伊周が主上の爲に詩の御講義、中宮も御同席で、清少其の他の女房は陪聽の格である。場所はやはり中宮の御在所登花殿であらう。時節はといへば、主上が柱によりかゝつて居眠りをあそばしたところなどを見ると、よほど暖氣で、且夜も短い頃の春すぎであらう。年は前段の翌年、即ち正暦四年か五年である。

(二) さうすると、四年春の出来事と思はれる(主上から 古歌を書けと命ぜられたり、中宮から古今の歌の語記力を試されたりして、ドキマギした態度から推して、初参後あまり時がたゞぬといふ趣に見えるから) 二〇段の「清涼殿の丑寅の隅の」の段よりは後になるのである。此の二〇段は、主上中宮がお揃ひで、男子としては伊周一人、他には多勢の女房達を加はつて、世にも長閑な美しいめでたい一場面を爲してゐるので、草子中代表のものではあるが、巻の初にあつて、あまりに有名だから今は略する。

伊周大納言

大納言殿参り給ひて、文の事など奏し給ふに、例の夜いたう更けぬ

は、詩歌管絃といふ中にも、最も詩に長けてゐた。それで主上の爲に師となつて、文集か何かの連夜の御講義、紫式部が彰子の爲に樂府の御進講をしたのとおもしろい對照を爲すのであるが、彼のつつましやかさに比して、是れば又夜を徹してまでといふ、そこには若さと熱とが見える。さて臺盤所の方で噓をしたのも、犬に追はれて雞の飛び出したのも、共に場面の變化である。人はアツケにとられる處へ、待つてゐましたとばかり朗詠が出る。全くお誂へ向である。誰しも感嘆せざるを得ぬ。清女に戯れつゝも、

れば、御前なる人人、一人二人づつ失せて、御屏風几帳のうしろなどに、皆隠れ臥しぬれば、唯一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。明け侍りぬなりと獨ごつに、大納言殿、今更にな大殿籠りおはしましそとて、寝べきものにも思したらぬを、うたて、何しにさ申しつらむと思へども、又人のあらばこそは紛れもせめ。上の御前の柱に寄り懸かりて、少しねぶらせ給へるを、大納言見奉り給へ。今は明けぬるに、かく大殿籠るべきことかはと申させ給へば、げになど、宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬ程に、長女が童の鶏を捕へもてきて、あす里へもていかむといひて、隠し置きたりけるが、いかがしけむ、犬の見つけて追ひければ、廊のさきに逃げ入りて恐ろしう鳴きののしるに、皆人起きなどしぬなり。上もうち驚かせおはしまして、いかにありつるぞと尋ねさせ給ふに、大納言殿の聲明王の眠を驚かすといふ詩を、高ううち出

明月に對して再び朗詠が繰り返される。此の頃の伊周の得意と、特に此の方面に油ののりきつて居た趣が察せられる。春の鳥、秋の蟲が、美聲を發して歌ふのは、異性を誘引する爲だと云ふ。朗詠が必ずしもそんな爲ではなかつたらうが、それには自然興味を感じ、心を引かれるのが人情である。讀經し歌うたひなどもしなかつた爲に、「氣すさまじ」と一蹴されて、女房にひどく不人氣であつた行成卿(四五段)その反對には、かういふ方面に長けた人の、好評が思ひやられる。つむじ曲りの清女といへども、や

だし給へる、めでたうをかしきに、ひとりねふたかりつる目も、大きになりぬ。「いみじき折の事かな」と、上も宮も興せさせ給ふ。なほかかる事こそめでたけれ。又の日は、夜の御殿に入らせ給ひぬ。夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、大納言下るるか。われ送らむと宣へば、裳、唐衣は、屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長う踏みしだきて、袖をひかへて、大納言倒るなといひてゐておはするまゝに、「遊子なほ残の月に行けば」と誦じ給へる、又いみじうめでたし。大納言「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでか。尙いとをかしきものをば。

語釋 ○文の事など云々 文は詩賦の類をいふ。恐らく白氏文集などの御講義を申し上げたのであらう。諸本皆「奏し」とあるのに、評釋に「誦じ」とあるのは、何に據られたものか。○丑四つと云々 丑(夜の二時に當る)から寅(明方の四時)までを一時とし、其の間を四分し、一刻より四刻にいたる、即ち今の三十分づに當るので、「丑四つ」は、三時半頃。禁秘御抄、時奏の事の條

はり此の選に漏れぬ。折角局を嘗づれる人の爲には、容易に戸を開かぬ彼も、「あまたの聲にて詩を誦し歌などうたふには敵かれど、先づあけて迎へると自白してをり(六十三段)又齊信の詩の誦し方のうまいのに傾倒し、それを知つた源中將が、清女の歡心を買はん爲に、其の詩を習つて歌つたが、一旦留守を使つても、中將が之を誦すると、「まことにあり」といつて、出て逢つたと云ふ(一四四段)ではないか。尤も伊周と齊信とは、かやうな才藝の外に、容貌態度がすぐれて立派であつた爲に、特に好感

に、丑刻以後が明日の分だとなり、夜の短い頃と思はれるので、三時半では夜明に近かつたのであらう。上代時を計るには、水時計を用ひたもので、之を漏刻といひ、銅の壺に水を入れ、中に四十八の刻み目のついた箭を立て置く、即ち漏箭である。かくて其の水が壺の底の穴から漏れ行き、中の水がへるに伴ひ、次々箭の刻み目があらはれ、是れて時刻を知るので、貞丈雜記、卷十六、雜事の部に委しい。さて此の漏刻は、陰陽寮の關する所で、寮に漏刻博士二人、守辰丁を率ゐるて漏刻の節を伺ふ事を掌り、守辰丁二十人、漏刻の節を伺ひ、時を以て鐘鼓を撃つ事を掌つた。大寶令の職員令に據る草子の一四二段に、中宮が太政官の朝所に行啓中、此の鐘樓が近いので、「鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがつて女房達が見に行き、高い所(大内裏考證、二十三、陰陽寮の條に、之を伺天臺と云ふ)に上つた話が出てゐる。それから時の奏といつて亥の一刻から子の四刻までは左近衛、丑の一刻から寅の四刻までは右近衛の官人が、夜行(夜の巡視)して奏聞する由が侍中群要に見える。二五〇段に「時奏する、いみじうをかし。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、こほ〜とこほめき查すり來て、鼓打などして、『なん家の某、丑三つ、子四つ』などあてはかなる聲にいひて、時の杵さす音などいみじうをかし。『子九つ、丑八つ』などこそ、里人がたる人はいへ。すべて何も何も、四つのみぞ杵はさしける」と書いてあり、此の時の奏を聞いて内暨といふ殿上章が、清涼殿の小庭に御膳棚と並んでゐる、時の箭を立てたのである。○長女 二十段には「女房の從者ども、其の里より來る者ども、長女、御副人、たびしかはらといふまで」と並べて書き、和訓栞には、「下女ながら、老いてをさ〜しきが、下を統領するよりの名かと云つてゐる。こゝは即ち局住ひの女房の從者で、童は又それが使ふ者であつた。○上もうち驚かせ 主上も目をお覺しになつ

を持つたといふ如き理由もある。此の事はなほ後段に説く。

伊周の朗詠、それは齊信とばかりがつて、別段聲などがよいといふのでは無い、折が殊更に趣向して作出した様であつたからと云ふ。蓋し此の邊の呼吸は、いはば才子の活券で、常々最も留意した所、有明のいみじう霧り渡つた折からの参朝に、なにがし一聲の秋（六四段）と合唱し、雪の曉更にかへるとて、雪何の山にみてり（一五七段）と歌ひ、寒夜の月に、涼々として米鋪けり（二六〇段）を、返すく打

た。○聲明王の眠を驚かす 本朝文粹、卷三、對册中に見える。漏冠の題で春澄善繼が発問したのに對へた、都良香の文中の句（上略）故役金徒於守漏、鐘銖之間靡差、課銅史以候時、贏一本縮之理不失、懸泉飛射、以沒一本刻爲期、幽水澄清、以盈器取準、夏至冬至、緩急之度斯存、春分秋分、中正之法已立、雞人曉唱、聲驚明王之眠、覺鐘夜鳴、響徹暗天之聽、（下略）とあるので、「雞人云々」の對聯は、和漢朗詠集、雜、禁中の部にも見えてゐる。此の雞人は周禮春官に「雞人共雞牲、辨其物、大掌祭祀夜鳴、且以叫百官」とあつて、曉起して人を呼び覺す職掌の者の稱。以て覺鐘と對せしめた。是れは周禮、冬官に、「考工記云、覺氏作鐘」とある故事から、唯鐘をいふのである。而して此の句は、平家物語、卷六、紅葉の事、並に太平記、卷四、備後三郎高德事の段の先帝穩鼓遷幸條に見え、「昔の玉樓金殿に引き替へて、うき節しげき竹様、涙隙なき松の堵、一夜を隔つる程も、堪へ忍ぶべき御心地ならず。雞人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり、御枕の上に近ければ、夜の御殿に入らせ給ひても、露まどろませ給はず」といふので、數年前の豫備試験に出た事があるが、殆どわかつてゐる人はなかつた。附けて云ふが、元來此の對問の語には、文選、卷二十八、陸倕の新漏冠銘併序の中に典故が多く、雞人の語も、「坐朝晏罷、每且晨興、屬傳漏之音、聽雞人之響」と用ひてあり、晚唐詩鈔には、李義山が馬嵬坡で賦した、「空聞虎狼鳴宵柝、無復雞人報曉籌」の句もある。○いみじき折の事かな 非常な此の場合の、画しるい事よと、主上も中宮も興せられた。雞の飛び出したといふ事件と、此の場をすかさぬ氣の利いた朗詠とを兼ねていはれた。此の一句は詞だが、どなたのともさだめかねる。實は衆口一致ともいふべき所で。○又の日は云々 翌日は徹夜まではなさらず、よいほどに切りあげて

誦する事を忘れなかつた。中にも伊周、齊信の如きは、其の最も堂奥に達したものであつた。此の二人は素より詩友で、「山雨鐘鳴荒巷暮、野風花落遠村春」は、齊信と共に暮山眺望の詩であつて、荒巷暮の三字を長國が深く感じたといひ（江談抄、第四）又此の齊信さへも常に帥殿（伊周）公任を庶幾し帥殿は文章を以て許された人だと常にいつてをかつたといふ。（江談抄、第五）

御やすみになつた。○遊子なほ云々 唐の賈島の曉賦に、「佳人盡飾於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行。於殘月、函谷雞鳴」と見え、和漢朗詠集、雜、曉の部にも載せてある。此にいふ遊子は、諸侯の國に遊ぶ士の旅人で、齊の公子、孟嘗君を指す。其の函谷關の故事は、史記、孟嘗君傳に見えて有名であり、草子の一一七段には、作者が引いて行成と應酬し、さては「夜をこめてとりのそら音ははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ」の歌にまで發展してゐる。○めて感ふ 感心して大騒ぎをする。此の「感ふ」は、上の語を強めるのに用ひるので、殆ど本義は失つたもの。ヒドクなど譯してよい。○いかてか 下に「めてざらむ」が略してある。○いとをかきしものをば 此の「をば」の「ば」は、「や」と同じ意の感動詞。「をや」と使つた例もある（中古時代の一語法）。

通釋 大納言殿（伊周）がお出でになつて、主上に詩の御講義などをしてあげになるので、いつもの通り夜が大層更けたから、御前で陪聽してゐた女房達が、一人二人づつぬけて行つて、御屏風や几帳の後などに皆隠れて寝てしまつたから、唯私一人になつて、ねぶたいのをこらへてお側に居ると、「丑四つ」と右近衛の官人が奏聞するのである。それで私は、「夜が明けてしましますワ」と獨言をいふと、大納言殿が、「今更にお休みなさるな」と仰せられて、寝るべきものとも思つておいでにならぬので、とんだ事をした（うたて）。どうしてあんな事を申したのだらう、と思ふけれども、外に人が居らばこそ、ごまかしもつかうが、私一人だから、どうにもならなかつた。主上が御前の柱に寄りかゝつて、少しお眠りになつたのを、大納言殿は「あれを御覽なさい、今は夜明だのに、あんなにおやすみになるべきでもない」といはれるから、「本當に」などと、宮様もお笑ひになるのも御存じない。其の際に、長女が使つてゐる童女が、どこからか雞を捕へて持つて来て、明

日自宅へ持つて行かう」といつて、局のどこかに隠して置いたのを、どうしたものか犬が見つけて追つかけたから、廊のさきに逃げ込んで、恐ろしく鳴き騒いだので、人が皆起きなどしたので、主上もお目ざめになりました、「どうしたのか」とお尋ねあそばしたので、大納言殿が、「聲明王の眠を驚かす」と、朗詠の句を高う歌ひあげられたのは、結構とおもしろいので、眠たかつた眼もひとりとてに大きくなつた。主上も中宮も、非常な此の場合の上出来よ」といつて、面白がられた。

翌日の夜は、早くすんで御寢所におはひりになつた。私が夜中頃に、廊下へ出て人を呼んだら、大納言殿が出て来て、「局へおりののか。自分が送つてやらう」といはれるから、裳や唐衣は屏風へ懸けおいて行くと、月がひどく明るくて、大納言殿の直衣が、大層白く見えたが、指貫を長くふみにじつて、私の袖をひかへて、「倒れるなよ」といつて、つれて行つて下さる中に、「遊子なほ残の月に行けば」といふ、朗詠をされたのは、又ひどく結構でした。ところで、大納言殿は、私が「こんな事をひどくほめる」といつて、お笑ひになるけれども、どうしてほめずにゐられましよう。やはり大層おもしろいものをまア。

六十九段

- (一) 前段同様、折柄相應しい伊周の朗詠に、すねて隠れてゐた作者も、我を忘れて釣り出されて、皆から笑はれたといふ。作者にも存外あどけない所がある。
- (二) 時は正暦四年の冬。(作者が出仕後、伊周の大納言時代の冬は、三年と四年とだが、三年

は出仕早々、こんな我が儘がまだ出来ぬと思ふから)所は清涼殿の上の御局。

御佛名のあした、地獄繪の御屏風取りわたして、宮に御覽せさせ奉り給ふ。いみじくゆゆしき事かぎりなし。これ見よかしと仰せらるれど、更に見侍らじとて、ゆゆしさに上屋に隠れ伏しぬ。雨いたく降りてつれづれなりとて、殿上人、上の御局に召して、御遊あり。道方の少納言琵琶いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の少將笙の笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶弾きやみたるほどに、大納言殿の、「琵琶の聲はやめて、物語せむとすること遅し」といふことを誦じ給ひしに、隠れ伏したりしも起き出でて、罪は恐ろしけれど、なほ物のめでたきは、えやむまじとて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、折のこと更に作り出でたるやうなりしなり。

語釋

○御佛名 毎年十二月十九日から二十一日まで、三夜にわたつて、宮中で行はれた佛事。

本文解釋

【参考】徒然草十九段に「御佛名、荷前の使立つなどぞ、哀にやむことなき」といつた御佛名に際しては専ら清涼殿の身舎を用ひ、其の施設は大したもので、政事要略、卷二十八に藏入式を引いていふ如く、藏入所の役する所であつた。一三七段「えせものの中得る折のこと」の中に、「御讀經、御佛名などの御装束の所の衆(藏入所の下官)と云つたのは是れが爲であり、此の御儀に於て、何よりも人目を引くのは地獄繪の御屏風であるから、花、さまじの悦びの巻に、十二

月十九日になりぬれば、御佛名とて、地獄繪の御屏風など、とて出でしつらふも、目とまり哀なるにとも云つた。中宮の御座も設けてあり、出御にもなつたものと思ふが、わざとそばに行つて、屏風繪を御覽になる事は出来ぬ。それ故、すんだ後で、御側へ取り寄せて、とくと御目にかけてられた。是れは主上の御心づかひで、かねてそんな御話もあつたからの事であらう。さて此の儀は、宮中だけでなく、皇后、院、宮などの御方でも、日なちがへて行はれたので、二六〇段に、「十二月二十四日、宮の御佛名の初夜の

第一夜に於ける、初夜の導師は、亥の二刻から子の二刻に至り、後夜の導師は、子の三刻から丑の四刻に至る。第二夜に於ける初夜の導師は、亥の二刻から子の二刻半に至り、後夜の導師は、子の三刻から丑の二刻半に至る（第三夜も同じ）由が、雲圖抄裏書（雲圖抄、同裏書、二巻、公事部に収む）に見え、公事根源に、寶龜五年十二月からはじまるとあるけれども、據がない。類聚三代格に據れば、貞觀十三年九月八日に、一萬三千の畫佛像七十二鋪を、五畿七道に安置せしめるやうにとの、官符が出てゐるので、此の時圖せられて、太政官に一鋪、圖書寮に一鋪、藏せられたものが、宮中の御佛名に掛けられた。又此の官符の文中に、元興寺の靜安が承和中に、内裏で行つたのが始で、漸く天下に普及したとある。即ち承和五年の事、續日本後紀にも明らかである。それから同十三年十月二十七日の官符には、諸國廳に於て、須らく毎年十二月十五日から十七日まで、佛名大乘を禮懺すべき事を宣せられ、（續後紀同じ）仁壽三年十一月十三日の官符に據つて、十九日から二十一日までに改まつてゐる。しかるに三代實錄、陽成天皇の元慶元年十二月二十一日の條に、「於内裏始修佛名懺悔之事」とあるのは、暫く中絶してゐたのを、はじめたものか。此の法會の意義や、導師の讀む經文に就いては、庫添藤實抄、卷十四に、「禁中よりはじめて邊山にいたりて佛名懺悔とて、歳暮に必ず過現未の三千佛の御名を稱して、罪障を懺悔するなり。譬へば年中所造罪障を懺悔して、三世の諸佛の智光に照し、歳霜と共に令消滅意也。（中略）。抑も過現未の三千佛とは、過去莊嚴劫の千佛、現在賢劫の千佛、毘婆尸佛を首と爲し、樓至佛を終と爲し、未來星宿劫の千佛也。千とは華滿數耳、有無量無數の如來云々。されば御佛名の導師、初後に唱へて、南無歸命頂禮萬三千佛と。云々。其の故は、仁明天皇の御宇、承和十三年には、佛名を禁中に始め

御導師聞きて出づる人は、夜中は過ぎぬらむかし」といつたのは、中宮御所での事であり、更科日記に、「十二月二十五日、宮の御佛名に召あれば、其の夜ばかりと思ひて参りぬ」とあるのは、後朱雀天皇の皇女、祐子内親王の御里邸たる頼通の邸での御佛名であつた。

られてより以降、畿外に至るまで佛名を修する、皆十六卷の佛名經を用ふ。此の中載する所の佛菩薩賢聖等の名、一萬三千餘也。然るを玄聖内供、上奏して、十六卷の佛名を略して、延喜十八年に、三千佛名經令改修より以來、之を以て常式とす。然れども導師は作法を改めず、初後に於て、必ずなほ萬三千佛名となふるを、故實と爲すと云ふ」と見えてゐる。○地獄繪の御屏風 公事根源に、「仁壽殿の御本尊（觀音像）をうつして、御帳の中にかけて、南の額の間に、又南北に机を立てて、佛像塔形を置く。佛前に香花などを供ふ。廂に地獄變の御屏風を立つ」と見え、雲圖抄に據れば御屏風は七帖で、七ヶ間に立てると云ひ、圖に據れば殿上の側から、西の廂をめぐつて、二間の方までかゝつてゐる。○ゆゆし 忌々しの義。萬葉などに、「ゆゆしかしこし」と並べ用ひたのは、恐れ憚る意で、「かしこし」とかはらぬが、此の頃は、厭はしい、いま／＼しい意、又は甚しい意にも用ひた。○上屋 大内裏圖考證卷十一の中、御湯殿上の古圖、御湯殿に作り、侍中群要及び左經記、御湯殿邊に作り、枕草紙うへやに作るといつて、皆同所としてゐる。しからば清涼殿の西北隅の一室。○上の御局 清涼殿の北、二間と夜御殿の隣に、弘徽殿上御局、萩戸、藤壺上御局の三ヶ間があり、萩戸は常御所であり、二つの上の御局は、同じく皇后、女御、更衣等の候所である。而して二十段に見えた上の御局は、荒海障子の近く見える所だから、東廂に近い弘徽殿の上の御局であるが、こゝは清少の隠れたといふ御湯殿の上に近い方であるから、藤壺の上の御局。○御遊 専ら管絃の御遊をいふ。○道方の少納言 左大臣源重信の六男。正二位權中納言に至る。○政源時仲の子。笛、和琴、箏、郢曲、鞠等に長じた趣が、源氏系圖に見える。七十二段の清少の退出した里邸を、人には秘してゐたといふ條に、「經房濟政の君などばかりぞ、知り給へる」と見

ふこのみのなれるなるらむの一首を載せ、慈鎮の拾玉集、一にある「夜もすがら三世の佛の名を聞けば現もさむる心地こそすれ」は、さすがに上人の實感だけにある。

え、いつも對にいはれて、非常な清少心醉家であつたが、清少からは二枚目あつかひを受けてゐた。○行成笛 岡本保孝の枕草子存疑に、「是れのみは『君』ともかゝず、『殿』も書かぬは、いかが」といつてゐるが、恐らく「君」が脱ちたのであらう。○經房の少將 源左大臣高明の男。永延三年三月、左近衛少將に任じ、長徳二年七月、左近衛權中將に進んだ人。春註本には、中將とあるけれども、當時は少將だからといつて、通釋本に改めたのに従ふ。○琵琶の聲はやめて云々 白氏文集卷十二、琵琶行の句。「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、移船相近邀相見、添酒迴燈重開宴、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面(下略)」とあるので、此の終の句は、作者が八十段に引いたもの。○罪は恐ろしけれど 佛の罰が恐ろしいといふ。清水漬臣の説に、地獄繪は、人に道心を起させる爲のものであるのに、それを見ないで、面白い事にさし出るから、とある通りである。二三五段には、「憎き者のあしき目見るも、罪は得らむと思ひながら、うれし(うれしきもの)ともいつてゐる作者、心には勿論、形の上にも常に矛盾をくり返して、出来るだけ表面をとりつくろひ、蟲も殺さぬ顔をしてゐる人の多い中に、此の正直さには、感心させられる。

通釋 御佛名の終つた翌朝(二十二日)、主上のお計らひとして、地獄繪の御屏風を持つて來させて、宮様に御目にかげられました。非常にいやらしい事は、無類である。宮様が私に、「これを御覽よネ」と仰せられるけれど、「決して見ますまい」と申して、いやさ上屋へぬけて、隠れてつつ伏してゐる。すると、雨がひどく降つて、退屈だと仰せられて、殿上人を上御局に召して、管絃

の御遊がありました。道方の少納言の琵琶は、大層結構でした。濟政の君は箏の琴(十三絃)行成は笛、經房の少將は、笙の笛などを、大層おもしろく一遍どほり合奏して、琵琶を弾きをさめた際に、大納言殿が、琵琶の聲はやめて、物語せむとすること遅し」といふ詩を、誦せられたので、隠れ伏してゐた私も、ノコノコ起き出して來て、「佛の罰は恐ろしいけれども、やはり物の結構な場合は、よう無關係でひつ込んでゐられまい」といつて、皆さんから笑はれました。お聲などがすぐれてゐるのではないけれども、機會がわざと作り出したやうに、うまく行つたのでした。

百十六段

- (一) 長徳元年四月十一日、道隆薨去、中宮は忌服に由つて里邸に退出され、参考の七々忌も終つて、一旦宮中にお歸りになるか、又は此の職の御曹司に參られたものであらう。而して月毎の十日の御佛事は、御定例として、こゝであつたのであらう。
- (二) 齊信の朗詠、中宮も清少もシツとしてゐられぬ程の感激ぶりを前半とし、後半は齊信の要求を巧にいひそらす所、堅白同異の辯とでもいばうか。作者は確に辯論の雄である。
- (三) 職の御曹司や齊信の事は、次段に詳説する。

故殿の御爲に、月毎の十日、御經佛供養させ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人いと多かり。清範講師

【参考】 正暦五年二月二日の道隆の積善

寺供養(二三七段) 聖長徳元年正月の淑景舎の東宮参から二月十日はじめて中宮御殿での御對顔(九〇段)等、いつも中關白一家の人が集まり、道隆の談話が連發して、其の得意の頂點にある趣が窺はれ、花やかでもあり、面白くもあつた。それから僅に二か月、道隆が四十三歳での薨去は、全く夢であつた。けれども道隆は大酒家で、頗る不攝生であつた。其の若死には寧ろ自業自得ともいへよう。愈臨終の其の際に西方にかき向けて、人々が念佛申さば給へと申しすゝめた時に、濟時、朝光

にて、説く事ともいと悲しければ、殊に物の哀深かるまじき若き人も、皆泣くめり。はてて、酒飲み詩誦（詩人）などするに、頭中將齊信（たのぶ）の君「月秋と期して、身いづくにか」といふことを、うち出だし給へりしかば、いみじうめでたし。いかでさは思ひ出で給ひけむ。おはします所に分け参るほどに、立ち出でさせ給ひて、めでたしな。いみじう今日の料にいひたる事にこそあれと宣はすれば、それを啓しにとて、物も見さして参り侍りつるなり。なほいとめでたくこそ思ひ侍れ」と聞えさすれば、ましてさ覺ゆらむと仰せらる。わざと呼びも出で、おのづから逢ふ所にては、なにかまるを、まほに近くは語らひ給はぬ。さすがに憎しなど思ひたる様にはあらずと知りたるを、いと怪しくなむ。さばかり年頃になりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なき折もあらば、何事をか思ひ出でにせむと宣へば、さななり。難かるべき事にもあらぬを、さ

酒飲みなどもや、極樂にはあらむすらむといつたといふ。大説、是れでは恰も酒と景氣よく心中をしたも同然、道隆自身は本望であつたかも知れぬが、迷惑なのは後の遺族であつた。關白職は内大臣伊周の門前を素通りして、道兼から道長へと渡つた。八段、二位新發意成忠、伊周の五段、が祈りたゆまず、さりとともくと勤めたのも此の時であり、「中宮世の中を哀におぼしなげきて、里にのみおぼします」（花見、見）はてとあるのも、此の間の事に屬する。即ち此の四月から九月までの五

もあらむ後には、え譽め奉らざらむが口惜しきなり。上の御前などに、やくと集まりて譽め聞ゆるに、いかでか。唯思せかし。かたはら痛く、心の鬼出で来て、いひにくく侍りなむものをといへば、笑ひて（濟時）など。さる人しも、よそ目より外（ほか）に譽むる類多かりと宣ふ。それが憎からずばこそあらめ。男も女も、けちかき人を思ひ方引（かたひ）き譽め、人のいささか悪しき事をいへば、腹立ちなどするがわびしう覺ゆるなりといへば、頼もしげ（濟時）なの事やと宣ふもをかし。

語釋

○御經佛供養 新寫の御經と新造（繪圖にて）の御佛とを供養せられたものであらう。圓融院の四十九日の御願文に、「奉造白檀阿彌陀佛像一軀、觀世音菩薩、得大勢至菩薩像各一體、奉寫金字妙法蓮華經一部八卷、無量義經、觀音賢經、阿彌陀經、般若心經各一卷」とあり、前後殆ど同例である。是れが最も功德になるのだから、追善としては、臣下に於ても同様の事があり、謙徳公が父母の報恩の爲、胎藏金剛兩部曼荼羅各一鋪を圖繪し、妙法蓮華經二部各八卷、無量義經、觀音賢經、般若心經各二卷を書寫し奉つた事が、其の願文に見える。（以上未細文）○清範 當時三十四歳。二十五歳の時ですら、高座の上も光り満ちたる心地と、書かれた程の人だから、當日の名説經が想像せられる。（七九頁）○月秋と期して云々 和漢朗詠集、懷舊の部に見え、菅三品（時文）の作、「金谷

か月間は、悲哀の雲の立ち重なつて、不安な空気が此の御一門を蔽ひ、中宮は此の間に在つて様々な御物思ひを遊ばしたのである。

職の御曹子の建築様式は、「木立などはるかに物ふり、屋の様も高うけ遠けれど、すゝろにをかしく覺ゆ。身屋は鬼ありとて、皆隔て出して、南の廂に御几帳立て、又廂に女房はさぶらふ(六四段)とあるので察せられ、時代も餘程古くなつてゐたやうである。それで薬土(板を心にして、土を以てゆり固めて作つた塀)などもくづれ、所々露出して

ゐたから、などで官得はじめたる六位の笏に、職の御曹子の辰巳の隅の築土の板をせしぞ(一一五段)と疑はれる様な、一種の縁起をかつく連中の爲に、益荒される様な事も生じたのである。
さうして中宮のこへ御退出中には、主上も常にお出でになる、女官の寝てゐる所へ、お二人でお出でになつて、建春門から出入する者たちをのぞき見をなさる、さうとは知らず、殿上人達が寄つて来て、女房と立話をす(四五段)其のお手輕さには、今更ながら驚かざるを得ぬ。それはまだしも、此の御縁先きまで乞食

本文解釋

醉^シ花地、花毎^シ春匂^シ而主^シ不^シ歸、南樓^シ月^シ之人、月與^シ秋期^シ而身何去^シといふ、爲^シ謙德公^シ修^シ報恩善^シ文^シの中の句で、其の前後の文は、「弟子某^シ歸^シ命^シ稽^シ首^シ、前白^シ佛言^シ、恩有^シ四種^シ、父之慈母之悲爲^シ先^シ、報是一心^シ、雖^シ歷劫^シ難^シ致^シ生何忘^シ、(中略)嗟乎人命不定、吾生難^シ知、彼金谷云々、況寵深者思又深、榮甚者畏又甚、(下略)」とある。金谷云々は、石崇の故事。晋書、卷三十三に傳あり、字は季倫、頗る豪華を極めた人で、金谷は其の別館、清流に臨み、美人を侍せしめた。石季倫金谷詩集叙に、「余以^シ元康七年^シ、從^シ太僕^シ出爲^シ征虜將軍^シ、有^シ別廬^シ、在^シ河南界金谷澗中^シ、有^シ清泉茂樹衆果竹柏藥草^シ、備具^シと見える。又南樓云々は、同書、卷七十三、庾亮傳に、「庾亮字元規、明穆皇后之兄也、(中略)亮在^シ武昌^シ、諸佐吏股肱之從、乘^シ秋夜^シ往共登^シ南樓^シ、俄而不覺亮至、諸人將^シ起避^シ之、亮徐曰、諸君少住、老子於^シ此處^シ、興復不^シ淺、便據^シ胡床^シ、與^シ浩等^シ談詠竟坐、其坦率行、已多^シ此類^シ也」とある故事。○分け參る 奥の方にいらせられる中宮の御所に進むこと。其の間には物もあり人も居るからいふので、「路もなきをわりなく分け入りて啓すれば(八十段)、「こち來と仰せらるれば、道あけて近く召し入れたるこそうれしけれ(二三五段)とあるなども其の例。○ましてき覺ゆらむ 齊信には心を傾けてゐる作者だから、かうお冷やかしになつた。此の下の「仰せらるる」は、春註本には「仰せらるる」とあるけれども、今は古本に従つた。○まほに近くは云々 マホは眞秀の義、物事の完全にととのうたのをいふ。カタホ(片秀)七五頁下の對。眞實うち解けて夫婦の語らひをせぬのをいふ。○得意 別戀なこと。中宮が右近内侍に乞食尼の事を話させられた時に、内侍は戯れて、「御得意なり。更にも語らひ取らし(七五段)といつてゐる例。○さる人しも 此のシモは、單にシの助語にモの歎辭がついたといふのみでなく、

上の體言を強く提示する意があるので、「それしも葉がへせぬために云々(二七段)の用例と等しく、カギツテなど譯してよい。又古今、春上に、「青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける」のシモを、詞の玉の緒三に、「カヘリテといふ意をかく含めり」といはれたのも、上下の對照さういふ意にまで進んで解けるのである。○やくと 役目のやうに。專一に。紫式部集の「四方の海に鹽やくあまの心からやくとはかかるなげきをやつむ」や、後拾遺、戀四、相模の「やくとのみ枕の下にしはたれて煙絶えせぬとこの浦かな」は、此の「役」に「燒く」をいひ懸けたもの。○心の鬼 列子の「疑心生^シ暗鬼^シ」から出たものか。謙德公集に、「わが爲にうとき心のつくからにかつは心の鬼は見えけり」と見え、俗に云ふ氣がとがめること。○けちかき人を 此の下、春註本には、「かたひき思ふ」とあるのを、古本に従つて改めた。○方引き 榮花、歌合に、「うれしきはもろ矢のみかは梓弓君もかたひく心ありけり」と見え、此のヒキは、後に音便でヒイキと延べていふ語と同じだと、演臣は説いた。演臣の説は、香琳抄本の書き入れに據る。
通釋 宮様は御父君、故關白道隆公の御追福の爲に、毎月十日御經や御佛の供養をあそばした
が、偶九月十日にはそれを職の御曹司であそばした。公卿や殿上人が大層多く參列しました。清範が講師で其の説經などが大層悲しいから、格別物の哀を深く感ずる筈のない若い人も、皆泣いたやうです。それが終つて、御饗應の席になり、酒を飲んで詩を朗吟したりする際に、頭中將の齊信殿が、月秋と期して身いづくにか(月は秋と約束でもして、置いたやうに、其の季になると清く照るが、それを眺めた人は、一度去つて又歸つて來ぬの意)といふ句を朗詠されたから、非常に結構でした。どうしてさううまくは思ひ出されたのでしょうか。それで宮様のいらつしやるお側に進んで

尼がはひり込んで来て、物ねだりをする。御庭に雪の山が出来た。それを尼が来て、人の知らぬまに踏み散らして行く(七五段)外界との交渉が全く自由になつてゐる。左衛門の陣は、何の爲にあつたのかと疑はれる。

それでも、此の築土の側には木守屋があつた(同段)即ち庭番である。清少から雪山の番を頼まれて、「童などぞ登り侍らむ」といつて、迷惑がつたのも無理はない。ところで、小右記(小野宮右大臣實資の日記)寛仁二年閏四月十日の條には、道長の土御門殿にも木守のあつた事が記され、今昔物

語、二十七には、主の女が、木幡の我が居た所に、木守と雑色一人を置いた事があるから、やはり大きな御殿や屋敷には、住ませてあつたものと見える。

参ります中に、宮様御自身が立つてお出でになつて、「結構だネ。ひどくあてはまりがよい。あの句は丁度今日の爲にいつて置いたも同然だ」とおつしやるから、私も「それを申し上げに出ようと思つて、物も見さして参りましたのです。やはり大層結構に思ひました」と申し上げる。すると、宮様は、「齊信の事だもの、お前はましてさう思ふだらう」と仰せられました。

齊信殿がわざ／＼私を呼び出して、又は自然逢つた所でも、「どうして私を心から打解けて近く寄せつけぬのですか。けれども、私をば憎いと思つてゐる様子でない事はわかつてゐるの、大層變です。こんなに多年にわたつての親しい中で、夫婦の語らひがなくてやむといふ事はない。私が藏人頭をやめて、殿上などに朝暮居らぬ時期ともなつたなら、何事を後の氣慰めにしようぞ」といはれるから、「其の通りでございます。それが何も難問題であらう筈でもないのですけれども、いよ／＼さうもなつた後には、貴所をようお譽め出来ぬのが残念なのです。主上の御前などで、役目のやうに、大勢集つた席でお譽め申すのに、そんな中になつてからは、どうしてそれが出来ましようぞ。唯考へて御覽あそばせ、具合わるくて氣が咎めて、いひにくくなりましようものを」といふと、お笑ひにつて、「どうしてですか。さういふ人は又格別、單に外部的な交際をしてゐる者よりも、度を越えて譽める手合が多いです」といはれる。それで私は、「それがいやらしくないならば、さうもしましようが、とてもいやしく出来る事ではありません。男でも女でも、關係の近い人を大事にし、ひいきをし譽め、外の人が少しでも悪口をするものなら、腹立てたりなどするのが、困ると思ふのです」といふと、「頼もしげのない事だナア」とおつしやるのをかしい。

七十一段

(一) 齊信禮讃の一段。「まことに繪にかき、物語にめでたき事にいひたる、これにこそは、見ゆれ」など、はじめて中宮に御目にかゝつた時と、殆ど同様の筆法を用ひてゐる。

(二) 此の前段が、齊信の清少に關する一種の悪評宣傳を信じて絶交状態であつたのを、宮中の御物忌に籠つてゐる際、是れではやはり物足らぬといふので、人々といひ合せ、例の『蘭省の花の時錦帳の下』と書きて、末は「いかに」の試問的消息を贈つた。それに對して、清少が「草のいほりを誰かたづねむ」といふ名答をしたので、齊信はじめあまたつめて居た殿上人達をアツといはせ、こゝに齊信の悪感情をも忽ち一掃されたのみか、前に倍して親交の度が加はつたやうである。之を古本の傍註にいふ如く、長徳元年二月の事とし、本段のかへる年(その翌年)が是れと關聯するものならば、長徳二年の事になる。

(三) 所は梅壺と職御曹司。齊信に對する脇役二人、初のが作者で、後のが宰相の君。而して初には、繪にある様な若公達に對し、作者の年齢容姿等、すべて其の對照宜しきを得ぬ事を強調し、後の宰相の君は蔭のものとし、人の物語に由つて寫し出し、作者は第三者として、さも憧憬を感じた如く、忠實に之を筆にしてゐる。草子全篇を作者が自惚れの記録だなど、いふのが、當を得ぬのは、此の段などでよくわかる。

【参考】十訓抄、上、第一の一條院の御代の事の條に、「すべて帝の賢王にておはしける故にや、才臣智僧より始めて、道徳のたぐひに至るまで、皆その名を得たりける。中にも四納言と聞えしは、齊信、公任、行成、俊賢なり。漢の四皓の世に仕へたらむも、此の人々にはいかさまらむとぞ見えける。(中略)かゝりければ、帝も『われ人を得たる事は、延喜天曆にも越えたり』とぞ、御自讃ありける」と見え、此の四人が並稱せられ、而も後世如何に之を偉大視したかを知る事が

かへる年の二月二十五日に、宮職の御曹司に出でさせ給ひし御供にまゐらで、梅壺に残り居たりし又の日、頭中將の消息とて、昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがれば、たがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたく敲かせで待て」と宣へりしかど、局に一人はなどであるぞ。ここに寢よとて、御匣殿召したれば、参りぬ。久しく寢起きて下りたれば、夜べいみじう人の敲かせ給ひし、辛うじて起きて侍りしかば、『うへに語らば、かくなむ』と宣ひしかども、『よも聞かせ給はじ』とて、臥し侍りにきと語る。心許な事やとて聞くほどに、主殿司きて、『頭の殿の聞えさせ給ふなり。唯今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある』といへば、見るべき事ありて、上になむのぼり侍る。そこにてといひて、局は引きもやあけ給はむと、心ときめきして煩はしければ、梅壺の東面の半部あげて、ここにといへば、めでたくてぞ歩

出来よう。此の中、俊賢が最も年長で、この年長徳二年には三十八、それから公任三十一、齊信三十、行成二十五(公卿補任に據る)の順である。而して其の藏人頭に補したのは、公任が最も早く、永延二年二月廿三日、左近衛權中將を以て之を兼ね、正暦三年八月二十八日、参議に轉じてをり、他の三人の事は、一二四頁に述べた。而して此の俊賢が五位の藏人であつた時、中關白が誰を頭に補したから、朝家の爲に忠節あるべきかを俊賢に問はれたら、俊賢に過ぐる者はないと答へ、由つて五位の頭

み出で給へる。櫻の直衣のいみじくはなばなと、裏の色つやなど、えもいはずきよらなるに、蒲萄染のいと濃き指貫に、藤の折枝ことごとしく織り亂りて、紅の色、打目など、耀くばかりぞ見ゆる。次第にしろき薄色など、あまた重なりたる、せばき縁に、片つ方は下ながら、すこし簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪に描き、物語のめでたき事にいひたる、これにこそはとぞ見えたる。

語釋

○職の御曹司 古く職院に作り、后宮職東院とも稱した。職は中宮職の略、(中宮はもと太皇太后、皇太后、皇后、即ち三后の總稱であつたが、後皇后の御別稱となつた。職は御役所のこと)曹司は局、即ち部屋をいふのであるが、こゝは御役所そのものゝこと。左近衛府の西に隣り、宮城東面外郭北方の陽明門からの通路を隔て、外記廳に面し、宮城中重の建春門(左衛門の陣)に近い。方四十丈で、四面に築垣をめぐらし、南と西とに門があり、西面には立部があつた。行成が辨内侍と立話をしてゐる所へ、作者の横槍を入れた(四五段)のは此所である。内裏火災等の際、主上の行幸された事もあり、又大臣の宿所に充てられた事もあるが、皇后の御懷胎、その他の事故で、御退出になつた例が多く、定子中宮がしばしばお出でになつた事は、草子中に見えてゐる。大内裏職考説、卷二、十三、その條参照。○梅壺禁中五舎の一、凝花舎の一名。庭に梅樹があるからの稱。この梅の事

と爲つた。今度は齊信自身補すべきものと思つて参内し、明義門下で俊賢に會した。そこで頭に補せらるべきは誰人かと尋れたら、俊賢だと答へた。仍つて齊信は赤面して退いたが、其の後、齊信頭に補し、所行共に高く、隨身を小庭に召して用を命ずるのに、毎事其の風采が大將の如くであつた。其の鳳凰池上月の句を誦して禁庭を徘徊する様は、恰も神仙中の人で、誰しも雌伏せぬ者は無かつたと云ふ(古事談第二)以て齊信の如何なる偉才であつたかがわかる。

なほ又此の頭辨、

は下に見える。飛香舎(藤壺)襲芳舎(雷壺)の中間に位し、渡殿で接してゐる。弘徽殿、登花殿などの西方。登花殿と共に、中宮の御在所であつた様に見える。○頭中將 齊信。藤大納言爲光の二男、公信の侍従の兄。齊信が從四位下右近衛中將を以て、藏人頭に補したのは、正暦五年八月二十八日、頭辨源俊賢(正暦三年八月二十八日、右中辨を以て頭に補した)と殿上に相並び、長徳元年八月二十九日、俊賢が参議に昇進した後の缺に、權左中辨行成が補せられ、齊信が長徳二年四月十四日、参議に任ぜられるまで相並び、其の後、長保三年八月二十五日に、行成も亦参議に陞つた。其の間を草子中に、頭中將又は頭辨の官名で呼んでゐる(群書類從、補任部所收、職事補任に據る)なほいつて置くが、藏人所は嵯峨天皇の時はじめて置かれたもので、校書殿内に在り、別當一人、左大臣の補職であり、頭二人、一人は文官たる太政官の大中辨の中から任じ(頭辨)一人は多く武官たる近衛の中將から任じた。(頭中將)機密の文書を掌り、進奏傳宣から御起居等にも候し、清凉殿上の一切の事を掌理したから之を殿上の眞首とも稱した。位は四位が相當であるが、五位で務めた例もある。下に五位の藏人三人、六位の藏人四人あり雜色、所業、瀧口、出納、小舎人等が其の下に屬する。○鞍馬 京都の北三里、寺は延暦十五年、藤原伊勢人の創建する所で、毘沙門天王を本尊とす。作者も参詣した事があると見え、「近くて遠きもの」の中に、「鞍馬のつら折といふ道」(一四九段)と書いてをり、源氏物語、若紫に見える北山も此の地。○方のふたがれば陰陽道で定める所、天一神(なかがみ)、大白神(ひとひめぐり)、金神、大將軍神等が、天地四方を運行するので其の在る方角を塞がりと稱し、其の方に向つて出行する様をいませめた。(運行の事は、干支に由り、曆を見合せて知る)それでも是非行かねばならぬ時は、一旦他所へ赴き、

頭中將が如何に榮職で、女房達からも目を付けられたものなるかは、君達は(二一四段)の最初に擧げてあるのもわかり、参議に進み、公卿の列に加はるの本人には出世なれども、日夕宮廷で接する機会が少くなる爲、清少が齊信の此の榮轉を惜み、あんな詩をうまく歌ふ人を、暫しならでもさぶらへかし」と、主上におれだりしたといふ様な事もある。(一四四段)。

方角をちがへて置いて、更に目的地に赴く。二五五段に「方違などして、夜深くかへる。寒きことわりなく、願なども皆落ちぬべきを、辛うじて來着きて、云々」といつてをり、御堂關白記、寛仁九年十月二十五日の條に、「早朝行字治云々」同二十六日の條に、「申時許乗舟還來、依方忌留賀茂邊」とあるのは、こゝとよく似た事實である。今夜鞍馬からかへるのに、自宅の方は塞がりだから、他所へ行つて宿し、明曉歸るであらうといふ。○御匣殿 貞觀殿のこと。其の長官(別當)をも云ひ、高貴の姫君を是れに補する。貞觀殿は皇后宮の正廳のある所で、内藏寮の外、御服の裁縫などの事をも掌る。クシゲは櫛笥とも書き、クシバコの義で、かゝる後宮の用具をも納めるよりの稱と云ふ。ところで此の御匣殿は、春注に、道隆の四女で、中宮や淑景舎の御同母の妹とし、これに據る説が多いけれども、此の方を御匣殿と稱する事は、榮花、かじやく藤壺長保二年に、「皇后宮子にはあさましきまで物のみぞ覺え給ひければ、御おとうとの四の御方をぞ、今宮の御うしろ見よくつかうまつらせ給ふべきさまに、打泣きてそのたまはせける。御匣殿もゆゑしき事をと聞えて、打泣きつゝぞ過させ給ひける」とあり、同、初花寛弘の春に、十七八ばかりで卒せられてゐるのだから、此の長保二年が十三四歳、それよりも四年前の長徳二年には、まだ九歳か十歳である。是れではあまり幼齡すぎる。殊に一代要記一條院の後宮の條に、女御從二位藤原子(藤原公一女、母前長徳四年二月十一日、爲御匣殿別當、入内、年十五、同五年三月四日、從五位上、長保二年八月二十日、爲女御、下略)と見え、日本紀略に據れば、入内後二年の長保二年八月二十日に、女御となられたので、其の間は御匣殿として奉仕されたのである。此の方を挿んで、道隆の四女が其の前後に御匣殿たる事もかしい。されば尊子の前には、積善寺の供養の日に、「御簾の中に宮、淑景舎、三四の君、殿の上、その御弟六所、立ち並みおはします」

に「とつけて返して、殿上で大喝采を博したといふ話の出るだけ、後賢についても此の時、なほ内侍に申しなさむ」と評定したといふ事が、實成の後日譚として傳へられたに止まり、極めて交渉が少い。是れに反して、齊信については非常に多く、此の段の外七〇段、七二段、七九段、一〇九段、一六五段、一四三段、一四四段、等がそれであり、行成に就ても亦、四五段、六九段、一一四段、一一七段、一一八段に、其の交渉なり應對なりが最もおもしろく記述されてゐる。いはば草子の興味の中心は、中宮との御關

(二三七段)とある、三の君が御匣殿ではなかつたらうか。それから續いて、尊子、四の君が此の職に就かれた様に、今は考へて置きたい。○うへ 敬稱。(一)主上、(二)主人、(三)妻室の意に用ひ、こゝは主人。○主殿司 もと殿司と書いた、後宮十二司中の一で、尙殿一人、典殿二人、女婦六人(後十二人)等の職員があり、興織、膏油、燈油、火燭、薪炭などの事を掌り、男官の主殿寮と職掌は、略同じい。但し殿上に候して、侍臣の使とか用をもたしたのは、女官の方で、禁秘御抄、主殿司の條に、「今不取侍臣脱着、裏無候殿上沓脱」と書かせられたのは、もとはかゝる事までをしたが爲である。○見るべき事 處理せねばならぬ事。○半部 部は板の横戸で、多く軒に構へて風雨又は日光を遮る。源氏、夕顔に「かみははしとみ、四五けんばかりあげわたして」とあり、花鳥餘情の注に、「下は格子端板 家の内部の見え などを打ちて、上に部を釣りて、外へあぐる様にしたるを云ふ」と見え、又「車にも半部とてあり、上の部ばかりをあげれば、半のしとみとは名附けたるなり」とあるけれども、此のハはなほ端の意、家のはしにあるからで、以て立部など、區別したものであらう。さて上半は外方に向けて上げ、鉤ととめるが、下半ははづして傍に立ておく。○櫻の直衣 櫻は襲の名で、表白、裏蒲萄。一説赤花。多から春まで用ひた。直衣は平服で、之を宮中に用ひる事は勅許に依る。○蒲萄染の云々 野葡萄の實の色で、黒みを帯びた紫。藤の折枝は其の紋がらである。二十段に見えた伊周の服装は、櫻の直衣、紫の濃き指貫である。以て若君達の春の装ひを知るべきである。○紅の色打目 直衣の下に着た袴。打目は光澤の出し具合である。おほよそ絹に光澤を出すには、「打つ」と「張る」との二種があり、八十段に、「紅の御衣の世の常なる、打ちも又張りたるも、あまた奉りて」とあるのは、中宮が此の兩種のを

係については、全く此の邊に在るといつてよいのである。

作者は「つれづれ、慰むるもの」(一一二一段)の最初に、物語を擧げ、又「うれしきもの」(二三五段)の第一に、「まだ見ぬ物語の多かる」といひ、物語は「一七二段」の中には、住吉、空穂の類以下を數へて居り、是れには挿繪の伴つたもの最多く、それが「長雨例の年よりもいたくして、晴るゝ方なくつれづれ、なれば、御かたがた繪物語などのすさびにて明し暮し給ふ」といはれた繪物語であり、歌繪の草紙も同趣の

通釋

お召しになつてゐたもの。貞文雜記、卷五に、「裝束に打つ」といふ事あり、紅の打衣などの類なり。是れは袴にて打ちて光を出したるなり。後世は板引にかへても、古の儀にまかせて打といふなり。單として、裝束の下に着る單は、春冬は、板引といふは、漆塗の板に絹に糊をつけて張り付けて、能くほしてひきはなせば光出づるなり。蠟を塗りたるが如し」と云つてゐる。序に述べるが、フクサといふのは、やはらかい絹で、「狩衣は」段に、「ふくさの赤色」(二四一段)と見えてゐる。さて此の打つ事は、なか／＼思ふ様に出来上らなかつたものと見えて、「ありがたきもの」の條にも、「かいねり(練絹)打たせたるに、あなめてたと見えておこす」(六二一段)と書いてゐる。是れも參考の爲にいふが、單衣は男の裝束でも最も下になり、「單衣は」の段に、「白き。日の裝束の紅のひとへ。云々。練色(練色)の衣も着たれど、なほ單衣は、白うてぞ、男も女もよろづの事まさりて」(二四二段)とある如く、東帯に紅の單衣は定例であつたが、他の場合は別の色の事が多いので、こゝも裝束集成、卷五に、西三條裝束抄を引いて、「衣之事、或袴とも之を稱す。但三條(轉法輪)家には、東帯の下に重ねれば、纒着とて袴とす。直衣並狩衣の下に用ふるは、莫大長し。是を衣と稱すと見えたり。直衣の下は、夏冬大略差異なし。色は薄色、萌木、紅、黄、蘇芳、紫、紅梅此等少年の人用ふ。白色は長年の人用ふ。皆綾なり」といつたもの。○せばき縁に云々 春註本には、「せばきままに」とあり、「これにこそは」との下の「ぞ」の語が脱ちてゐるが、共に古本に従つた。○片つ方は云々 一五七段にも、「圓座さし出したれば、片つ方の足は下ながらあるに」とあつて、庭先から局を訪問する時は、おのづから斯様な姿體を取る事が多い。

物。これには其のこ
り家として、あけ
くれ書き讀み替みお
はした玉蔓は、假想
の姫君であり、更級
日記の著者は、實在
の人物であつた。而
して其の物語の中で
も、住吉と對にいば
れ、物語の出來初め
の親なる竹取と合せ
て争つた宇津保物語
は、最も多く愛讀さ
れたものであらう。
其の結果が作中の人
物の比較評となり、
優劣の沙汰にも及ん
だ。春秋の争が最も
古い歴史のものでも
あり、鶯時鳥の優劣
論も、此の時代には
起つてゐるが、涼仲
忠の優劣論も、已に
公任卿集に、
圓融院の御時に
やあらん、梅壺

梅壺に残つて居た。其の翌日、頭中将齊信からの御手紙だといつて持つて來たのを見ると、「昨晚鞍馬に參詣し、今晚自邸に歸るには塞がりの方角になるから、それを違へに行く。が、明日は夜の明けぬ中に歸るであらう。其の道すがら貴女の方へ立ち寄つて、必ず話さねばならぬ用件がある。それ故、局の戸をひどく敲いて起す様では見苦しから、さういふ事をさせぬ様に、起きて待つてゐてくれよ」といつてあつたのですが、御匣殿から「お前は どうして局に一人ゐるのか、こちらへ來て寢よ」といつてお召しになつたから、齊信殿の事は忘れて、そちらへ上つた。翌朝まで長く寢てきて起きて、私の局へ下つた所が、留守の女が、「昨晚は誰かがひどく戸をお敲きしてした。で、やうやつと起きましたら、其方が、『主人に話したら、かく／＼の次第で、事がわかる』（だから、さうして主人を連れ戻して來いの意）と仰せられましたけれども、『まさかそんな事は、お聞きになりますまい』と申して、寢てしまいました」と語るの、私もはじめて氣がついて、それは氣がかりの事だなアと思つて聞いてゐる中に、主殿司の女官が使に來て、「頭の殿が申されました。『唯今宮中から退出するのだが、貴女に話すべき事がある』」といふから、私は今始末をせねばならぬ事があつて、お上へあがります。そちらでお目にかかります」と御返事して、局では無遠慮にひきあけて、はひり込まれる様な事があるかも知れぬと、胸がドキドキして面倒だから、梅壺の東側の半蔀をあげて、「こちらへ」といつて御案内をさせて、お待ちしてゐると、庭先を立派な御風采で歩き出して來られた。御装束は、櫻の直衣のひどく花々しく、裏の色澤なども何ともいへぬ程お綺麗なのに、黒紫色の大層濃い指貫に、白く藤の折枝を仰々しく織り亂してあるのを着て、下着の紅の色や澤の出方などは、光り輝く程に見えました。下のお召しの白いのやら薄紫のやらが、幾枚も重な

の涼仲忠といつ
れまされると論
じけるに、し
はらは涼が方
やありけむ。女
一の宮は仲忠が
方におはしける
にや、何れをい
るなどある
に、物ないひそ
と仰せられけれ
ば、ともかくも
いはでおはしけ
るを、いひにお
こせ給うければ
沖つ波吹上の濱に
家居してひとり涼
しと思ふべしやは
と見えて、決して此
の時のが初度ではな
かつた。なほ又、中
宮と作者との間に、
「さりとも中なる少
女とはおぼし御覽じ
けむ、いみじく思
ふべかなる。仲忠が

つて居るのですが、狭い縁に片膝をおろし、片方は下につけたまゝで、少し簾のそば近く寄つて居られるのは、本當に繪に描いたり、物語の中の立派な事にいつてゐるのは、これだなアと思はれました。

御前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少しおち方になりたれど、なほをかしきに、うらうらと日の氣色のどかにて、人に見せまほし。簾のうちに、まして若やかなる女房などの、髪うるはしく長くこぼれ懸かりなど添ひ居ためる、今すこし見所あり、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、舊る舊るしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、處處わななき散りばひて、大かた色異なる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍ども、あはひも見えぬ衣などもなどあれば、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば、裳も着ず、桂姿にて居たるこそ、物ぞこなひにくち惜しけれ。職へなむ參る。言づけやある。いつか參るなど宣ふ。さても夜べ、明しも果てで。さりともかねてさいひてし

面伏なる事をば、いかでか啓しつるぞ」といふ御往復のあつた七四のも、仲忠が童生ひいひおとす人と、鶯に時鳥は劣れるといふ人こそいつらうにくけれ(二二四段)といつてゐるのも、此の段の事あつて後と思はれ、其の間には連絡のあるものである。而して其の順序をいへば、二二四段は田植の頃の事で、此の段に續き、七四段は左衛門の陣に行つた(六四段)後で秋の事であるので、此の一年は、可なり仲忠問題が糸を引いてゐたか様の思はれる。

此の段は初めから非常な熱を持ち、感激を以て、書いてゐる。

かば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京きやうより来るままに、局を敲きしほど、辛うじて寝おびれて起き出でたりし氣色、いらへのはしたなきなど語りて、笑ひ給ふ。頭中將無下にこそ思ひうんじにか。などさる者をば置きたるなど宣ふ。げにさぞありけむといとほしくもをかしくもあり。暫しありて出で給ひぬ。外より見む人はをかしう、内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥の方より見出されたらむうしろこそ、外にさる人やとも思ふまじけれ。

語釋

○おち方 落ち方、即ち盛りすぎてあらう。他に用例の有無を知らぬ、めづらしい語である。○うら／＼と云々 「のどけき」の形容として用ひた例が多く、殆ど同意で、ノンビリとか、ユツタリとか譯してよい。ウラウラは、漢語の遅々に當り、ノドケンノドはノドノドといふ副詞ともなり、長閑をあてて、此の字義がある。○さだ過ぎ サダは盤齋抄に源語類聚を引き、「中央、四十を中齡として、頃過ぎたるか、年のよりたる也」といひ、萩原廣道は、「定の義で、よき程の定まりたる時をいふ」と説く。即ちサダメの略言で、人の品評に乗る頃の若盛とする。是れも一説ではあるが、鹿持雅澄の雅語譯通、「ゆくさくさ」の條下に、古言に時といふ事を之太とも左太ともいへり。集中十一に、「十二にも重載」此のさだ過ぎて」と詠んでゐるとあるのは、「沖つ波へ波の

るので、梅壺の東面の半都あげて、ここにといへば、めでたくぞ歩み出で給へる」といふ齊信のuscitaから、やがて、簾を隔てゝの對談に至るまでの有様、清少自身を書いてゐる如く、何ともいへぬ美しい劇的場面で、作者が感に堪へて見入つた事が窺はれ、それが其のまゝ筆端にあらはれてゐる。前に書いた段の如きも、亦さうである。是れは一方に白眼世を見、冷嘲輕罵以て自ら快とした所のあるのとは、正に反對の現象である。かうして私は彼の性格の愈多角的、變態的なるを思ふものであるが、それも亦時期に

來寄るさだの浦の此のさだ過ぎて後戀ひむかもの歌で、此の説に従ひたいと思ふが、意はなほ同じである。○髪なども云々 髪は黒くて多くて長いのが美人の第一要件であつた。それ故、草子や物語に見える女性の髪は、身長にあまらぬ程の髪はない。わづか十二歳で入内の彰子すらも、「姫君の御有様さらなる事なれど、御髪たけに五六寸ばかりあまらせ給へり」(榮花、羅やく藤壺)といふ。他は推して知るべきである。草子の「短くてありぬべきもの」の中に、「げす女の髪」(一八九段)といつたのは、下衆にはあつたら物だからである。而して是れは自髪でなければ、何にもならぬことであるが、一方には又假髪を用ひた事も随分多いので、此の邊の事は末摘花の姫君が、其の侍女の侍従の筑紫に下るに際し、饒別にやる相當の品もない程の落ちぶれ方であつた爲に、御自分の抜け髪をとり集めてかづらにしたのが、九尺あまりもあつたのを、贈られた源氏といふ事や、或老嫗が、自分の主人の女が死んで、其の死骸を羅城門に棄てられたのを、其の髪が長に餘つて長かつたので、髪にしようと思つて、抜き取つてゐた今昔物語といふ話で、よくわかると思ふ。即ち清少も髪が少いので、ませ毛をして居つたのである。○色異なる頃 喪服用の折柄、自分の喪中なら出仕を御遠慮すべきであるが、御主人に關する側なので、「おほかた」は全體、即ち中宮付の女房全部をこめていつたのであらう。喪服は喪葬令に、「凡天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵」とあり、義解に錫紵は「細布用淺黒色」とあつて、錫の少し時經たものは黒光りするからの名。臣下の喪服も亦準じて知るべきであつて、之を鈍色とも墨染とも稱した。而して其の死者に對する縁なり志なりの親疎、若くは喪期の前後で、色の深淺を異にした様は、玉臺と夕霧の中將とが、其祖母の喪に服した時の事を、「薄きにび色の御服、なつかしき程にやつれて、例にかはりたる色あ

依つて、多少整理の出来るものでないかと考へる。齊信對作者の一段落がついて舞臺がまれば、職の御曹司の夜の場面。中宮を向うにまはして女房達の喋々々々、折とて作者の登場、之を味方に取るか否かが、當然勝負の決する所、彼がすなほに中宮を支持すれば、問題はそれ限り極めて平凡にけりが附く。いつもながらそんな事に抜け目のある彼ではない。忽ち妙な理屈をつけて中宮を壓迫する。さればよ」と女房達は得意である。そこで形勢の不利なるを見て、「この事どもよりは」と話題を一轉して、其の

ひにしも、かたちはいと花やかにもてなされておはするを、御前なる人々は打笑みて見奉るに、宰相の中將は、同じ色の今少しこまやかなる直衣姿にて、纓まき給へるしも、又いとなまめかしく清らにておはしけり源氏といひ、又妹葵の上の歿後、喪に服して居られた頭中將が、十月の更衣に「鈍色の直衣指貫、うすらかに衣がへして、をしくあざやかに心耻かしき様」して參られた由を述べ、又一童女のほどなき柏、人よりは濃く染めて、黒き汗疹、萱草色の袴など、着てゐた事も書かれてゐる以上。萱草色は婦人の袴の色で、萱草の花の色、即うすい赤黄色を爲す。又柑子色。○あはひも見えぬ、重ねて着てゐる衣服の一枚づゝの間。色々のを着てゐれば、襟袖口でそれがわかるけれども、薄鈍のみ重ねて着てゐるので、重なり合ひの美趣が見えぬ。○裳も着ず云々。裳は婦人禮装の時、腰部にまとふ物で、本書の「裳は」の段には、單に「大海」(二七八段)とのみあつて、其の模様は、主として海浦海賦といひ、海波のけしき、貝、海松、濱松の類を、藍や胡粉で摺つたもの。中宮の御留守中だから之を略し、唐衣も着ず、袴姿で居た。源氏、夕顔の巻に、「しびら裳のたつ物、かごとばかりひきかけて、かしく人侍るめり」とあるのは、夕顔が見すばらしい五條の宿に假寓してゐた時でも、かしく侍女がその主人に敬意を表する爲には、なほかごとばかりでも裳をひつかけてゐたのである。○袴姿。ウチキは打ちかけて着るよりの稱か。和名抄、裝束部に、「桂。云々婦人上衣也」とあり、狩谷氏の箋註に、今俗婦人の衣の打掛といふ物は、此の遺だといつてゐる。素より上衣をもいふが、重袴の意にも用ひ、三枚、五枚、七枚など重ねて間に着るものをも、單に袴と云ふ。なほ裝束要領抄後附、女官の部に、「桂といへるは、身に着給ふ所の服にして衣ともいへる是なり。此の桂の下には單、うへには打衣とり重ねて、表着を着て帶し

鋭鋒を避けられた中宮の御氣轉、それが又さながらに其の筆端に躍如とする。そこで話が本筋の齊信に歸つて行く。作者の觀察の細いには一同も舌を捲く。續いて齊信と宰相の君との應酬を聞いて恍惚とする。なかしかりしかの一語には、千萬無量の思ひがある。月次繪巻物の材料として春二月の場面を選ぶならば、是れにまさるものはなからう。四七頁。それで假に之を繪として見る、そこには形態なり色彩なりの、如實な人を引きつけるものがあらう。併し此の文章のうまみは到底まねの出来るものではない。

て、袴を着し腰ゆひてより唐衣着て裳をとりつけたり。古の着用次第、凡かくのごとし。(中略)。又小桂といへるきぬあり。前にいふ桂にはあらで、是は唐衣の代に上に着るものなり。其の小桂に唐衣重ねる例なしといへり。唐衣裳まで一具したるを物の具と云へり。たとへば男官の東帯の如し。唐衣裳などを略して、小桂着たるは、衣冠の如し。猶内々は唯、衣の上に裳唐衣着る例もあり」と見えるので、其の大意を知る事が出来よう。即ちこゝは表着以上を略し、袴のみでゐたものか、又は小桂姿であつたのだらう。○西の京。宮城南門朱雀門前より羅城門に通ずる、朱雀大路を以て平安京を兩分し、大宮から東の京極までを東京(左京)といひ、同じく大宮から西の京極までを西京(右京)と稱し、各京職を置いて統治した。然るに東京は繁昌したが、西京はあまり發達せなかつたのみか、僅に出来た民家も早く荒廢に歸した事は下文にも見え、又慶滋保胤の池亭記本朝文粹に、「予二十餘年以來歴見東西二京、西京人家漸稀、殆幾幽墟矣、人有去無來、屋者有壞無造、其無處移徙、無憚賤貧者居、或樂幽隱已命、當入山歸田者不去、若自蓄財貨、有心奔營者、雖一日不得住之(下略)」とあるのでよくわかる。○寝おびれて。オビルは俗言にボケルといふ意の語。○うんじ。爵の字の音ウツのツを佐行變格のシに重ね用ひる場合、撥音に轉じたもの。クンズ(屈)と同じく一種の音便。

通釋

御庭先の梅は、西のが白梅、東のが紅梅で、少し散りぎになつてゐるけれども、まだ面白いのに、天氣具合がのんびりゆつたりとして、人に見せたい様な美趣である。だからましてや、簾の内に若やかな女房などで、髪がうつくしく長く、肩からこぼれかゝつたりなどしてゐるのが寄りそつて、此の齊信殿と相對してゐた様なら、今少し見所があり、面白かりさうなのであるの

今一つ叙景文に就いて述べるが、小白河の結縁八講の段のみぞ、少し涼しき心地する(六五頁)にしろ、中宮へ初参の段の「あさり歸るや遅きとあげ散らしたるに、雪いとをかし。云々。火焼屋の上に降り積みたるも、珍しうをかし(八八頁)また此の段の、「お前の梅は西は白く、東は紅梅にて、少しおち方になりたれどなほをかしきに、うらうらと日の氣色のどかにて、人に見せまほし(一二九頁)等の如き、長い前後の叙事の間に、極めて簡短な叙景の筆を挿む事ではなが々と描寫してあるより

に、大層盛りが過ぎ、ふるふしい人で、髪なども自毛ではなくて、入れ毛が多いからか、處々ちぢれ亂れて、それに全體が屈申で衣服の色のちがつてゐる時だから、色があるのか無いかわからぬ様な(室内などでは)薄鈍などで、衣服と衣服との重なりあひもわからぬのを着てゐるのだから、少しの立派さも見えぬのに、宮様がお留守であるから、蒙も着ず桂姿で居たのはしくじりて、残念であつた。やがて頭中將は、是れから職へ参上する。傳言はないか。貴女はいつ参るか?など仰せられる。それからおつかぶせて、「それにしても昨晩は、明しもしないで御たづねしたのだ。だつても前以てさういつであつたから、待つて居るだらうと思つて、月の大層明るいのに、西の京から歸つて來ると共に、局の戸を叩いた處が、やうやつと寢惚けて起き出して來た女房の、様子や挨拶の不都合は「まア」などといつてお笑ひになる。ひどくがつかりしてしまつた。どうしてあんな者をば留守に置いたか?などと、疊みかけて仰せられる。それで私も、あの女だもの、なる程さうであつたらうと、お氣の毒にもあり、をかくも思ひました。暫くそんな話をして、中將殿はお歸りになつた。此の場面を外の方から見ると、中將の後姿を見て興味を感じ、簾内にはどんな美人が居るのであらうかと思ふであらう。其の反對に、室の奥の方から見出される時の私の後姿こそ、まことにみすばらしいので、外にそんな綺麗な君達が居られようかと、思ふまいと考へました。

暮れぬれば参りぬ。御前に、人人多くつどひ居て、物語の善き悪しき、にくき所などをぞ定めいひしろひ涼、仲忠がことなど、御前にも

却つて有効な舞臺背景となつて、人物事件を引き立たせる。是れは紫文とは非常な差異のある所。又叙景を主とした文には、逆に人事をちよつとからませてなり此の呼吸は物はづくしの類にまで及ぶ。第一段が「巳にさうで、四季の記事や、評言を進めて行く中に、火など急ぎおこして炭もて渡るもつきづきし」と書いてあるではないか。思ふに平安時代の人ほど、自然を愛し、自然を人事に取り入れた者はない。そこに所謂無前の美的生活が展開した。けれども又反對に、此の時代人ほど、自然に接する機會の乏しかつ

劣り優りたる事など仰せられける。まづこれはいかにとことわれ。仲忠が童生ひのあやしさを、せちに仰せらるるぞなどいへば、何かは。琴なども、天人下るばかり弾きて、いとわろき人なり。帝の御女やは得たるといへば、仲忠が方人と心得て、さればよなどいふに、この事どもよりは、晝齊信が参りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれと仰せらるるに、さしてまことに、常よりもあらまほしうなどいふ。まづその事をこそ啓せむと思ひて、参り侍りつるに、物語の事に紛れてとて、ありつる事を語り聞えさすれば、誰も誰も見つれど、いとかく縫ひたる絲、針目までやは見とほしつるとて笑ふ。西の京といふ所の荒れたりつる事、もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつる。垣なども皆やぶれて、若生ひて』など語りつれば、宰相の君の、『瓦の松はありつや』といらへたりつるを、いみじうめでて、『西の方都門を去れること、いく

た者も少い。愛しつ
つもあまり控する事
が出来ぬ、當然深入
りするの心の側で
なければならぬ。(人
事でいつても同じで
ある)此の心理現象
が即ち幽玄なので、
是れが此の時代の歌
なり物語なりにあら
はれてゐる。けれど
も物語は布行し説明
し過ぎて、自然餘情
を無くする傾向があ
るが、歌は感情が盛
りきれなくて、之を
言語の外に搖曳せし
める。是れが幽玄な
るものの、物語より
も歌に多く含まれる
所以である。枕草子
の文章は、前にも述
べた通り、簡潔であ
り、印象的であり、
暗示的であり、銀鈴
一振、餘韻は風に流
れて傳はるがまゝ、

聞くがまゝといふ感
がある。こゝに私は
其の詩趣を認め、幽
玄を稱へんとするも
のである。北村季吟
がこゝまで見透し
て、本書を幽玄と説
いたものならば今更
一言もない。前に不
十分であつた點を、
聊かいひ足して置く
(四八頁参照)

ばくの地ぞ』と口すさびにしつる事など、かしがましきまでいひ
しこそをかしかりしか。

語釋

○いひしろひ 「いひしらひ」の轉。和訓栞に知の義であらうと云ふ。熟語にのみいひ
て、この動作を爲し合ふ意。「つきじらふ」「ひこ(引)ずらふ」などの用例もある。○涼 源涼。
嵯峨院の御時の内の女藏人腹。光源氏の君と同様、一世の源氏。宇津保物語の主人公たる仲忠と肩
を並べた才人。○仲忠 俊蔭の女が父母に別れて、零落して賀茂川畔に住まつてゐた時、四郎小若
君(太政大臣の子で、後に右大臣兼雅)が一夜通つて來て出來た子。小若君は父母の愛憐が深い爲
に、忽ち通ふ事も出來なくなり、女の窮乏は續いた。仲忠は幼より極めて伶俐で、且母に孝行であ
り、魚を釣つたり果實を拾つて來たりして、母を養つてゐたが、後母をつれて山中に移るに及び、
其の孝心に感じ、熊は其の洞穴を譲つて住まはせ、諸の動物が來て食物を捧げる等の不思議があつ
た。此の間に母から琴を習つたが、さどくかしこく弾く事限りがない。或時帝の北野の行幸に、右
大將(小若君)が御供して其の山の邊などを見、はからずも妙なる琴の音を聞きつけ、其を便りに
尋ね赴いて、妻子に邂逅しつれ歸つた。それから仲忠は宮中に出仕して、中將、宰相から中納言ま
で昇つた。○童生ひのあやしき 此の「あやしき」は奇怪な意としても、下賤の意としても通ずる
が、なほ初のであらう。○琴なども云々 嵯峨院が神泉苑で紅葉の賀を行はせられた時、侍臣が各
舞樂を奏した中に、涼と仲忠の琴曲が互に伯仲の間にあつた。即ち仲忠が弾する時には、風雲動き
日星騒ぎ、蹊のやうな氷降り、雪がふすまの如くに降つて即ち消え、涼代つて弾すれば、仙人下つ

て舞ふといふ奇瑞があつた。仍つて帝は御感のあまり、あて宮といふ絶世の美姫を涼に、第一の内
親王を仲忠に下された。即ち帝のみむすめを得たのは仲忠で、涼には此の事がなかつた。是れが
強ひて中宮に反對せん爲の清少の口實。○あらまほしう あゝもありたいと、希望する意の語。こ
こはお立派と譯してよからう。○宰相の君 積善寺供養の段に、「その後には疊ひとひらをながざ
まに縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君右大臣の子と聞え
けるが御女、宰相の君とは、富小路の右大臣忠顯の御孫、それ二人ぞ上に居て見給ふ」(二三七段)
とあり、門地の最も高くて、而も才のあつた人。同じ段に「宰相とそことの程ならむ」と、道隆か
ら清女と對にいはれてゐるのも、中宮から古今の諧記力を試された時、「宰相の君ぞ十ばかり」(二
十段)と特筆されたのも、時鳥聞きにいつた時の一條殿からの歌の返しを、「宰相の君書き給へ」
(八六段)とおしつけられてゐるのも、中宮御所前庭の草の茂つてゐるのを見て、左中將が「拂は
せてこそ」といつた所が、「露おかせて御覽せむとて、殊更にこそ」(一二四段)と哀にも氣の利い
た警句を飛ばしたのも、中宮の御歌の代筆をして、物忌しに或人の家に行つてゐた作者につかは
し、「此の君の宜はむだにをかしかるべきを」(二五八段)といはれたのも、此の人である。「相尹
の馬頭のむすめ少將の君、北野の三位實原のむすめ宰相の君」(九〇段)とあるのは、同名異人て
あるが、是れは波景舎の御方の女房であつたらしい。實方集に、「中宮の宰相の君の、上のみさ
ぶらふを恨みて、風早き嵐の山のみち葉もしもにはとまるものこそ聞け」は、「中宮の宰相の
君(に敷)七月七日に、七夕の緒にぬく玉もわがごとや夜はにおきみて心かすらむ」の歌が見え、
實方との殊なる交情が思はれるが、こゝに「中宮の」とことわつてあるのも、波景舎のと混ぜぬ爲

てあらう。○瓦の松は云々 白氏文集、卷四、驪宮高の詩中の句。即ち「高々驪山上有宮、朱樓紫殿三四重、遅々兮春日、玉甍暖兮温泉溢、弱々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅、翠華不來歲月久、綺衣兮瓦有松、吾君在位已五載、何不_ニ幸_ニ於其中、西去_ニ都門_ニ幾_ニ多_ニ地、吾君不_レ遊有_ニ深意_ニ、一人出兮不_ニ容易_ニ、六宮從兮百司備（下略）」。なほいつて置くが、詩にいふ、西は、温泉宮が驪山の西にある事をいつたのであるけれども、齊信は唯之を宮城の西方の意に歌つた。齊信のは唯何氣なく其の見た所を語つたので、恐らく此の詩の引用ではあるまい。然るにそれが偶この詩の趣にも通ふので、「瓦の松は云々」と應じたのは、宰相の君の鬼才である。そこに齊信も直に共鳴し、釣り込まれて、覺えず知らず「西の方云々」と口吟する。「かへる年の」の出から、唯々美に酔ひ、興にかされてゐた観客は、更に此の終幕に至つて、深い感嘆のため息とともに、破れる様な拍手の聲を送らぬわけには行かぬであらう。

通釋

日が暮れたからお上へ出ました。すると、御前に、女房達が大勢集まつてゐて、物語の善し悪しや、憎い所などを評論しあひ、宇津保の主人公たる涼、仲忠が事など、宮様も御一緒になつて、其の優劣論などをしていらせられました。それで、私の出て参つたのを、女房達が待ち迎へて、「まづ此の優劣如何といふ事を、斷定しなさい。宮様は、仲忠が子供の頃の生立の奇怪な事を、熱心に仰せられるワ」などといふから、私は「何で涼が宜しくありましようぞ。琴なども、天人が下つて来る程に弾いて、大層わるい人です。ですから、帝の御女（内親王）をも、いたゞけなかつたのです」といふと、女房達は私を、仲忠の味方だと心得て、得意になつて、「ですからさア」などと申すと、宮様は話題をお轉じになり、「此の事なんかよりは、晝、齊信が來たのを、若しお

前が見たなら、どんなに譽めちぎつたらうにと思つた」と仰せられるので、女房達も「さて本當に、いつもよりもお立派でした」などと申しました。それで私も、「先づ其の事を申し上げようと思つて、参りましたのに、物語の事にまぎれました」と申して、晝梅登で對面した事の顛末を、お話し申し上げると、女房達は「皆が見たけれども、そんなに大層詳細に、縫つてある絛や、針目まで見透しはしませんでした」といつて笑ひました。それから引き續いて人々は、「頭中将が『西の京といふ所の荒廢してゐた事から、一緒に之を見る人があつたら、どんなにか哀が深かつたらうにと、感じました。垣なども皆破壊して、苔が生えて』などと話したものですから、宰相の君が『瓦の松はありましたか』と應酬したのを、頭中将はひどく感心して、『西の方都門を去れることいくばくの地ぞ』と口吟した事」などを、口やかましい位までいつたのは、面白い事でありました。

百二十四段

(一)

道隆薨去の翌年、即ち長徳二年四月伊周隆家左遷後の事で、道長を左大臣といつてゐる道長の任官は同年七月二十日又女房達の服装が秋季のものだから、同年八月頃の事と見てよからう。思ひも寄らぬ主家の悲劇、是れも昨年以來道長側との對立が益深刻化した結果でなくて何であらう。かゝる際の流言飛語は、古今ともに附き物である。清少は道長方に關係がある、裏切者だといふので、可なり問題視された様である。而して是には多少の根據もない事はなかつた様である。三七頁 けれどもかういふ場合に、進んで辯解もせず、相手

(二)

道隆薨去の翌年、即ち長徳二年四月伊周隆家左遷後の事で、道長を左大臣といつてゐる道長の任官は同年七月二十日又女房達の服装が秋季のものだから、同年八月頃の事と見てよからう。思ひも寄らぬ主家の悲劇、是れも昨年以來道長側との對立が益深刻化した結果でなくて何であらう。かゝる際の流言飛語は、古今ともに附き物である。清少は道長方に關係がある、裏切者だといふので、可なり問題視された様である。而して是には多少の根據もない事はなかつた様である。三七頁 けれどもかういふ場合に、進んで辯解もせず、相手

の思ふまゝ爲すまゝに放任するのは、作者のいつもの流義である。齊信がそゞろなる虚言を聞いて、いみじういひ落した時も同様である。七〇段そこに彼の女の負けじ魂があり、男らしきがあり、同時に拗れ者の拗れ者たる本色がある。

(三) 作者の里居が續く。人の口は愈うるまい。併しこんな事には少しもお迷ひにならぬ中宮は、どこまでも賢明である。御心には少しのお曇りもない。玲瓏玉の如しとは、眞にかういふお方に適する喩語であらう。頻と清少をお呼びになる。中々應ぜぬ。痛くもない腹を探られたくやしきには、死んで明りを立てるといふ程の意地であつたのだ。(自害といふ事は、此の時代にはまだないが)實は中宮の御周圍に對する反抗である。それで之を引き出す切っかけが中々容易でない。それも最も巧な御さそひで、一切を水に流して出て行く。是れに對する中宮のおしむけが實にうまい。是れには如何なる敵も離間者も、旗を捲いて降らざるを得ぬ。すべてが圓くなさまつて、君臣の情誼は前に倍する。此の段の清少の態度には與し難い所がある。けれども中宮の御心情に對しては、自然と頭が下り、涙が出る。賢明な宮様、おやさしい宮様と、こゝにも更に繰り返して置く。

故殿などおはしまさで、世の中に事出で來、物騒がしくなりて、宮また内にも入らせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなぐうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおぼつか

【参考】 中關白薨去後、政權を其の一家で維持しようとした事と、道長がこれに代らうとする考とは、當然正面衝突を

免れぬ。前にも書いたが七頁等三一條院の御母后東三條院詮子は、弟道長と氣があひ、且其の力量を知つて、之を引上げようとなさる。是れに對しては、大鏡道長傳に、
女院(東三條院)は、入道殿(道長)を取りわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給ひければ、帥殿(伊周)はうとしくもてなさせ給へりけり。みかど(一條院)皇后宮(定子)をれんごろに時めかせ給ふゆかりに、帥殿はあけくれ御前に候はせ給ひて、入道殿をば更にも申さず、女

本文 解釋

さにぞ、なほえかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮に参りたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の装束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしようてもさぶらふかな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩などをかしよう居並みたるかな。御前の草のいと高きを、左中將「なか、これは茂りて侍る。拂はせてこそ」といひつれば、『露置かせて御覽せむとて殊更に』と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。『御里居いと心憂し。かかる所に住ひせさせ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく』など、數多いひつる、語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれげなる所の様かな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の唐めきをかしき事など宣ふ。一いさ、人の憎しと思ひたりしかば、又憎

院をもよからず、事にふれて申させ給ふを、おのづから心や得させ給ひけむ、いとも本意なき事に思しめしける。云々。

とある如く、一條院定子、伊周といふ關係が、可なり故障ともなつた様だが、御母后が理を説き情に訴へ、涙と共に御迫りになつたので、道長へ天下執行の宣旨の下つた事も、大鏡に書いてある。

事此に至つては、如何ともする事が出来ぬ。實権を握つた道長は、陰に陽に伊周一家を壓迫する。成忠の祈禱位ではまだるつこい。其の翌年の事である。大元帥法を修し

く侍りしかば」といらへ聞ゆ。左中將「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

語釋

○小二條 日本紀略、正暦五年八月二十八日の條に見えて、伊周の邸。一三頁に中宮がここに御退出中のこと。中宮御里邸の二條院は、東三條の東町に、同三年新造されたので、積善寺供養の時、行啓のあつたのは此の方。(二三七段)然るに是れが長徳二年の六月八日に焼亡したので、中宮は亮高階明順の宅に渡御されたが、更に小二條に入られたものと見える。日本紀されば前田本に、積善寺供養の段を小二條につくるのは、無論誤である。而してこの伊周邸に、小の字を冠したのは、二條宮と分つ爲のものであらう。○左中將 諸註に齊信だらうといふ。當時齊信は、參議で左近衛中將を兼帯してゐたが、草子中に此の人の事は、初を頭中將、參議に轉じて後を、宰相中將(七二段、一〇九段、一四三段等)といつてゐるから、別人であらう。○黄朽葉 織色では經絲が紅、緯絲が黄。襲色では表裏共に朽葉ともいふが確でない。○紫苑 襲の色。表薄紫裏青。○萩 襲の色。表薄紫、裏青。表蘇芳、裏青。表青、裏濃萌黄。以上説々あつて一定しがたいが、紫苑との區別上第二説がよいのではあるまいか。○宰相の君 一三七頁に見える。○露臺 屋がなく床だけのもの。建物の一部で、仁壽殿の露臺は、五節の時に亂舞などのある所で名高い。○牡丹の唐めき 牡丹は李唐の世に最も愛賞せられ、天香國色等の異名も生じた。我が國にはもとなかつたのを、彼の土から舶載したもので、菅家文章に二篇の詩が見えるのが初めてである。一篇は法華寺の白牡丹の詩其の後のものには彼是れ見え、榮花物語、玉臺に、「御堂の御前の方には、又池の方にかうらん高うして、其の下に薔薇、牡丹、からなでしこ、らん、れんぐゑの花ども、移させ給へり」とある

て、東三條院並道長を呪咀したといふ風聞が立つ、其の上、隆家が花山院を射奉つた。一四頁といふ悪事が露見する。四月二十四日、伊周隆家左遷の事定まり、檢非違使が伊周の邸を取圍みて、宣命を讀みの、しつた。中宮はたゞにもあらで、此の邸に御退出中の事であつたが、えもいはぬ者どもが其のめぐりに立ちこんで、御簾をも引きかなくり、中宮を放ち奉らうとした。二十

八日には、中宮が伊周と手を取つて、離れ給はぬ如き事もあり、(小右記)五月一日には、自ら鉄を取つて、尼となるまでにつきつめられた。

通釋

のは、法成寺の事である。名は音のまゝに呼んで居たので、「名おそろしきもの」(一三四段)の中にも、「ほうたん」と擧げて居り、もと漢土の名花であり、花なき頃の枝葉にも、普通の前栽物と異なり、おのづから「唐めき」といふ感じが伴ふのであつた。○おいらかにも オホヤウ(大様)といふに同じ。讒者に對し、さうムキにならずとも、今少し寛大に考へてやれと、忠告した。故關白道隆公がお隠れになつて、世の中に事件が生じ、物騒しくなつて、宮様はまた宮中にもおはひりにならず、小二條といふ所にお出でになりましたが、別に何といつて嫌だつた事ではなく、唯不快な事があつたから、久しく自邸に下つて居ました。けれども、お側の事が氣にかゝるので、やはりかうしてはよう居られぬやうな氣持でした。すると、或日左中將殿が來られて、いろいろお話がある。其の要點は、「今日は宮様へ上つたら、非常に物哀であつた。女房の裝束はと見ると、裳や唐衣などの時節にあつたのを着飾つて、かゝる際にも拘らず、なまけるといふ事もなく、立派にして奉仕してゐるワイ。御簾の端の隙間からのぞいた所が、中には八九人ゐて、それが各黄朽葉の唐衣やら、薄紫色の裳を着け、紫苑や萩などの唐衣を着た人などもあつて、立派に並んで居たワイ。それから自分は、お庭前の草の延びてゐるのに目がついて、『どうして是れは、こんなに茂らせてお置になるのですか。抜き掃はせておしまひになつたら、宜しいでしょう』と申したから、『露を置かせて御覽にならうと思し召して、わざとかうしてあるのです』と、宰相の君の聲で答へたのです。實に氣の利いた答で、おもしろいと思ひましたワイ。女房達のいふ事には、『貴女の御里居は大層つらい。宮様がかういふ所においであそばす時は、たとひひどいいやな事があるにしても、必ずお側に居る筈のものだと、思し召しておいでになつたかひもない事』など、いろ

(日本紀略、榮花物語) 何ともいへぬ悲哀に加へて、忍ぶ可らざる侮辱をお感じになつた爲と思ふ。何たるおいたばしい事であらう。それでも兄弟二人の運命は、如何ともする事が出来ず、各配所に赴く。清少の此の段に所謂、身の濡衣は、是れから引き續いて起つた問題らしい。故殿などおぼしまさで、世の中に事出で來、物騒がしくなりて」と、唯簡單に事もなげに書き出した一句には、去年の四月から此の四月まで、滿一年にわたる哀史が籠められ、作者が血涙で綴つたものである。

いろいろしたが、それは貴女に話し聞かせ申せとの、意味なのであらうワ。上つて御覽なさい。哀げな所の趣ですよ。露臺の前に植ゑられてゐた牡丹の、唐めいて面白い事はまアなど、仰せられる。で、私は「いいや、是れには譯のある事で。人が私を憎いと思つて居たものですから、私もまた其の人達が憎らしかつたものですから」とお答へ申した。すると左中将殿は、「もう少しまアおほやうな氣でいらつしやいよ」といつて、お笑ひになりました。

げに如何ならむと思ひ參らする御氣色にはあらで、さぶらふ人達の左の大殿の方の人、知る筋にてありなどささめき、さし集ひて物などいふに、下より參るを見てはいひ止み、放ち立てたる様に、見なはず憎ければ、參れなどある度の仰をもすぐして、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、唯あなた方になして、虚言なども出で來べし。例ならず仰言などもなくて、月頃になれば、心細くてうちながむる程に、長女文をもて來たり、御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、ここにてさへひき忍ぶも餘りなり。人傳の

次に此の文章であるが、左中將の會話が如何にもうまい。先づ「いみじく物こそ哀なりつれ」と前提し、「云々、なかしう居並みたるかな」と云々、なかしくも覺えつるかな、と云云、哀げなる所の様かな」と、話頭三轉一々「かな」に結んで、彼を語り此に及ぶ、如何にも其の感に堪へなかつた趣が、看取されるではないか。しかして此の會話の甘味は、畢竟作者の文章の妙技から出て居る。御前の草のいと高いのは、いはずと知れた、お構ひする人がないからである。此の邊の消息は、大鏡、師尹傳の、小一

仰言にてあらぬなめりと、胸潰れてあけたれば、紙には物も書かせ給はず、由吹の花びらを、唯一つ包ませ給へり。それに、いはで思ふぞと書かせ給へるを見るもいみじう、日頃の絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長女もうちまもりて、「御前にはいかに、物の折毎に思し出で聞えさせ給ふなるものを」とて、誰も怪しき御長居とのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬなどいひて、ここなる所に、あからさまにまかりて參らむといひて去ぬる後に、御返事書きて參らせむとするに、この歌の本、更に忘れたり。「いと怪し。同じ古言といひながら、知らぬ人やはある。ここもとに覺えながら、いひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞き、小さき童の前に居たるが、「下ゆく水の」とこそ申せといひたる、などてかく忘れつるならむ。これに教へらるゝもをかし。

語釋

○げに如何ならむと云々 中宮の御様子には、自分を疑つてあられるであらうか、どうであ

條院遜位の條を見て、思ひ半ばに過ぐるであらう。院は道長の壓迫に堪へかねて、遂に東宮をお退きになつたのであるが、其の御在所は、「庭の草もいと深く、殿上の有様も、東宮のおぼしますとは見えす、あさまじうかたじけなげなり」といふ趣であつた事を、大鏡には書いてある。道長を憚つて、寄りつく者もないのである。中宮も丁度是れと同じ憂き目に會つていらつしやる。而して左中將が「拂はせてこそ」といつたのに對して、宰相の君が「露置かせて御覽せむとて、

らうかと、懸念する様な事はない。即ち前々通り、自分に御信任があるといふ事はわかつてゐるが、兎角朋輩の口がうるさく、自分に對する扱ひ振りに腹が立つたのだと、自邸に下つた理由を前に戻つて説明した。○左大臣殿 道長。○放ち立てたる様 此の「放つ」は「身屋は鬼ありとて、皆隔て出して」(六四段)とある「隔つ」と同意。除外し、仲間はづれにする。○あなた方 道長方。○長女 一〇七頁に出づ。○いはて思ふぞ 古今六帖、第五、「心には下行く水の湧きかへりいはて思ふぞいふにまされる」といふ歌の句。山吹の花片をお用ひになつたのは、山吹は極色であるから、之を「口無し」にいひ懸け、「山吹の花色衣ぬしや誰とへど答へずくちなしにして」(古今集、俳諧)など詠んだ歌があり、圓融院の御歌には、「九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をば知る人もなし」(新古今集、雜上)と見え、「いはぬ色」ともいつたから。さて此の歌は、作者自身が六一段にも引き、當時最も有名なものの一。○まづ知るさま 古今集、雜下の「世の中のうきもつらきも告げなくにまづ知るものは涙なりけり」の引用で、涙のこぼれる様子をいふ。

通釋

宮様の御様子には、本當に私を疑つていらつしやるのだらうか、どうだらうかと、お思ひ申し上げる様な風ではないので、唯お側の女房達が「あの人は、左大臣の側の人と、關係筋である」などと、コソコソ蔭口をきき、皆が集まつて話などしてゐる所へ、私が局から上つて行くのを見ては、いひ止め、仲間はづれにしてゐる様で、はじめて經驗する、いやな憎らしい事であるから、退出したので、宮様から「来いよ」と、何度かお召しになつた其のお詞も聞かないで、本當に久しくなつたのを、宮様の御周圍では、私を唯あちら側にしてしまつて、虚の噂なども立つてしよう。いづもとちがつて、仰言もなくて月が重なつたから、心細くて物案じをしながら、外を見つめて居る

殊更に」と答へたのは、かゝる悲哀の極點を、限りなき風雅な御心情に取りなしたもので、是れ以上の詩美はないであらう。否々、取りなしたといふのでなく、人身を假りていらしやる以上、泣きもし悲しみもされたけれど、もあきらめとつししみとに終始して、恨むとか憎むとかいふ事は、毛頭御存じなかつたかの如く見える中宮の御眞心も、亦此の通りであつたに違ひない。徒然草には、花園院御讓位の後の御歌として、
とのもりの伴のみ
やつこよそにして
拂はぬ庭に花ぞ散
りしく
といふ一首を傳へ

本文解釋

御返り參らせて、すこし程經て參りたり。いかがと、例よりはつつましようて御几帳に端隠れたるを、あれは今參りかなど笑はせ給ひ

時に、長女が手紙を持つて來た。さうして、「御前から左京の君を以て、コソソリ下さつたのです」といつて、こゝでさへソウツと隠すやうにするのもあんまりです。では人が取りついでの仰言でないやうだと、びつくりしてあけて見ると、紙には物もお書きにならず、山吹の花葉を唯一つお包みになつてゐる。さうしてそれに、「いはて思ふぞ」と、古歌の句をお書きになつてゐるのを見るにつけても、ひどく感に打たれ、長い間御消息の絶えたのが悲しかつた、其の心も解けて嬉しいので、涙が先に立つのを、長女も見つめて、「女房方は、「お上には、どんなにか何かの機會毎には、あの人(清少)の事を思ひ出していらつしやるものを、どうしたのだらう」とおつしやつて、皆様も不思議な御長居(里邸に)だとばかり、思つていらつしやるやうです。どうしてお上りにならぬのですか」といつて、「ちよつと此の御近邊まで行つて參りましょう」といつて立ち去つた後で、御返事を書いてさし上げようと思ふのに、此の歌の上の句をスツカリ忘れてしまひました。で、「大層變だ。同じ古歌といひながら、是れは名高いのだから、誰も知らぬ人はない。口元まで出かゝつてゐるながら、いひ出されぬのは、どうした事なのか」といふのを聞いて、年のいかぬ童女の前に居たのが、「下行く水の」と申します」といひましたが、どうしてかう忘れたのでしようか。此の子に教へられたのをかしい。

る。拂はぬ庭にに
は数々の思召しがあ
らう。けれども、露
や落花の趣を得て、
之を見返す時、總べ
ては消えて、此の自
然の美に據つて、新
らしい世界が開け
る。それはやがて心
の淨土である。蓮月
の歌に、
宿かさぬ人のつら
さをなさけて
月夜の花の下ふし
と詠んだのも、此の
境に外ならぬ。さて
も美しい御心よ、淋
しい御境涯よ。
なほ此の中宮の人
をさらさぬ御才氣
と、話題に富ませら
れた事とは、二〇段
などを参照して知る
べきであり、宰相の
君の事は前にもいつ
たが珍らしい才女で

て、^宮にくき歌なれど、この折は、さもいひつべかりけりとなむ思ふを
見つけでは、暫しえこそ慰ままじけれなど宣はせて、變りたる御氣
色もなし。童に教へられし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ひ
て、^宮さる事ぞ。餘りあなづる古言は、さもありぬべしなど仰せられ
て、ついでに、^左人の謎謎合しける所に、^右頑にはあらで、さやうの事にら
うらうじかりけるが、^左左の一番はおのれいはむ。さ思ひ給へ
など頼むるに、さりとともわろき事はいひ出でじと、頼もしく嬉しく
て、皆人作り出だし選り定むるに、^左その詞を聞かむ。いかに
ど問ふ。『唯まかせて物し給へ。さ申しては、いとくち惜しうはあ
らじ』といふを、げにと推し量る。日いと近うなりぬれば、^左なほ
この事宜へ。ひざうにをかしき事もこそあれ』といふを、^巧いさ、
知らず。さらばな頼まれそ』などむつかれば、おぼつかなしと思
ひながら、その日になりて、^右皆方人の男女居分けて、殿上人など、よき

あり、實方から歌も
もらつてゐる程だか
ら、其の返歌は勿論、
他の人々とも詠みか
はした事があらう。
日記様のものも書
いて居つたであら
う。けれども何一つ
傳はらぬ。是れはど
こまでも深く中宮に
殉し、山寺にでもは
ひつて、一生を清く
終つたのであらう。
兼囊を脱して、其の
溢れる才氣は、おの
づから草子中に散見
するけれども、實は
清少納言よりも遙に
高踏的であり、韜晦
的な人であつた様な
氣がする。

人人多く居並みて合はするに、^左左の一番に、いみじう用意して、もて
なしたる様の、いかなる事をかいひ出でむと見えれば、あなた
の人もこなたの人も、心もとなくうちまもりて、『なぞなぞ』といふ
ほど、いとこゝろもとなし。『^巧天に張弓』といひ出でたり。右の方
の人は、いと興ありとおもひたるに、こなたの方の人は、物もおぼえ
ずあさましようなりて、いと憎く愛敬なくて、あなたによりて、ことさ
らに負けさせむとしけるをなど、片時のほどにおもふに、右の人鳴
^右瀝に思ひて、うち笑ひて、『やや、更に知らず』と、口ひき垂れて散樂
しかくるに、『^巧籌させ、籌させ』とて、刺させつ。『いと怪しきこと。
これ知らぬもの誰かあらむ。更に籌刺すまじ』と論ずれど、『^巧知
らすといひ出でむは、なとてか負くるにならざらむ』とて、つぎつ
ぎのもの、この人に論じ勝たせける。いみじう人の知りたる事なれ
ど、覚えぬ事はさこそはあれ。『何しかは、え知らずといひし』と、後

に恨みられて、罪去りける事を語り出でさせ給へば、御前なる限は、
「^{人人}さは思ふべし。くちをしく思ひけむ。こなたの人のこゝち打聞
き始めたりけむ、いかに憎かりけむ」など笑ふ。これは忘れたる事
かは。皆人知りたる事にや。

語釋

○端隠れ 此のハタを雅言集覽には、トハイヘドマタの意と解いてゐるが、それは誤り
で、遊仙窟、六に、「見^三十娘半面」^{所引}とある、半か端を充つべきで、ハシ即ち一部分、また半
ばの意。○古言 古歌。「これに唯今覺えむ古言一つづゝき書けと仰せらるゝ」(二〇段)とある
と同例。○謎々合 謎々物語ともいつた。實方集に、「小一條の人々、なぞく、物語す、勝たず負
けずの花の上の露」といひけるに、「すまひ草合する人のなればや」とあるのは、連歌形式を爲
してゐるもの。後のものではあるが、源俊賴の散木并歌集に、「或人の許に謎々物語をあまた作り
て、とかせにつかはしたりけるを、異様に解きたりけるを、又つかはすとてよめる」として、「い
かでもと思ふ心のみだれをばあはぬにとくるものとやは知る」。又「謎々物語よく解くと聞えける人
の許へ、作りてつかはしたりける歌」として、「小倉山みねより出て、行く月も逢坂まではくまなか
りけり」といふ歌を載せて、是れはかける方が歌だから、答も歌であつた筈であり、歌を介しての
此の種の遊戯も流行し、又その方の巧者もあつた事が窺はれる。○頭にはあらで、カタク(固)に
ナシといふ助語のついた形容詞で、語尾を省いて名詞ともしたのであらう。物事のわかりのわるい

こと、愚なことなどをいふ。○らうらうじ 勞々を活用させたもの。巧者。○左の一番 歌會で
は、其の席での上位のものか、道の長老を据ゑるのが例。○頼むるに 頼ませ、あてにさせる意で、
こゝは引き受けるなど譯してよからう。○頼りしく嬉しくて皆人作り出し 此の一句は、春註本
を始め、流布本系統のものには脱ちてゐるが、今は古本に據つて補つた。さて「作り出し」は、謎
謎を味方の者が皆で作し出し、其の中からよいのを選んで、當日用ひる事に定めた。○ひびうに
非常の音語。宇津保、國讓中に、「さては宰相に、我が非常の時にも逢ひ見てやみぬ」の用例があ
るが、源氏、少女には、「おほし垣下あるじ、甚だ非常に侍りたうぶ」「甚だ非常なり。座をひきて
立ちたうびなむ」など、一種の儒者詞として、皆が滑稽を感じた所に用ひてあるから、やはりそれ
が本で、普通の人も使ひ、物語などにも用ひられる様になつたのであらう。○むつかる 腹立つこ
とで、形容詞のムツカシも同原。○天に張弓 弦月のことで、萬葉、三「天の原ふりさけ見れば
白眞弓張りてかけたる夜道はよけむ」から始まつて、世間周知のこと。○鳴詩 和訓葉に、「ヲコ
はもと國の名なり。後漢書、南蠻傳に、烏語人の事委しく見えて、笑はしき事多かり」と語原を説
明し、「をかしき事、滑稽な事をいふが本で、愚な事をも云ふ。○やや 人を呼びかける時にも用
ひるが、こゝはオヤオヤと、事の意外なのに驚いた時などに發する感動詞。○散樂しかくる 一〇
一頁にも見える。フザケかゝる。○口ひき垂れて 口わきをひき垂れるので、相手を愚弄して物を
いふ時のさま。○籌刺せ 延喜式、三十八に、正月十八日の賭射の時、掃部寮の者が刺籌者の座を
設ける由が見え、此の賭弓に設けられたのが始で、競馬、相撲、小弓、闘雞などの競技には、すべ
て之を置き、歌合にも亦同様であつた。串又は枝を以て、勝の場合、筒に立てて心覺えにするの

て、之を數取といひ、多くは左右兩方に置いた。○罪去りける事 謝罪する。○打聞き始めたりけむ 諸本「きこしめしたりけむ」とあるが、是れも古本に従つた。○これは忘れたる事は、これは忘れたのではない、知つてゐながら、あまり馬鹿げて居るから、わざと知らぬといつたのだが、自分の眞實を忘れしたので、是れとは違つて間がわるかつたと、説明を附加した。

通釋

此の御返事をさし上げて、少し時がたつて上つた。御機嫌はどうであらうかと、いつもよりかもきまりがわるくて、御几帳に少し隠れたのを、宮様は御覽になつて、「あれは新參者か」といつてお笑ひになつて、「あれはいやな歌だけれども、此の場合、あゝもいふのが適當だらうと、思つたのだらう。お前に會はないでは、暫らくても氣が晴れまいよ」などと仰せられて、變つた御様子もない。それで私はあの歌をど忘れして、童から教へられた事などを申し上げると、宮様はひどくお笑ひになつて、「さういふ物だ。あまり輕視してゐる古歌は、却つてさうでもあらう」などと仰せられて、其の序に、一のお話をして下さつた。それは、「或人が誰々合を催した所で、愚てはないので、そんな事に巧者であつた者が、『左の一番は自分がいはう。さう思ひなさい』などと引き受けるので、いふがまゝに任せても（さりとも）、下手な事はいひ出すまいと、頼もしく嬉しくて、仲間一同て謎を作り出し、其の中から出来のよいのを選び定める時に、巧者に向ひ、『君のかけようと思つて居る詞を聞かう。どういふのか』などと尋ねた。すると巧者は、『唯だまつて任せて置き給へ。自分がかういつて引き受けた以上は、ひどく遺憾な様な事はあるまい』といふのを、成程と推量して其のまゝにした。愈その當日も近くなつたものだから、左方の人は、『やはり此の事をいつて見給へ。非常にをかした事があるかも知れぬ』といふのを、巧者は、『いやだ、知

【参考】 行成が齊信に次いで作者と交渉の多かつた事は前にも述べておいたが、作者より年少でもあり、且齊信とは性格のひどく異なつた人

であつたから、二人の間に起つた出来事も頗る奮つたものであつた。古事談、第二に、一條院の御時、實方が行成と殿上で口論するの間、實方は行成の冠を取つて小庭に投棄して退散した。けれども行成は、激した様子もなく、靜に主殿司を喚んで冠を取り寄せ、砂を拂つて之を着け、左道にいまする公達かなといつてゐた。それを主上が小菴から御覽になつて、行成は召し仕ひつべき者なりとて、藏人頭に補せられ、實方をば歌枕見て参れとて、陸奥守に任せられたといふ、一の逸話を載せて、如何にも沈鬱な人であ

百十四段

(一) 頭辨行成との交渉の一段である。行成の藏人頭を務めたのは、長徳元年八月から、長保三年八月参議に轉するまで、滿六年間である。而して文中に惟仲を左大辨といつてゐるが、惟仲は正暦五年九月八日、参議右大辨から左に轉じた人で、長徳二年の七月二十日には權中納言に進んだ。随つて行成が頭で、惟仲の左大辨に在官したのは、長徳元年八月から滿一ヶ年間で、而もここには春梅花の季節たる事が見えるから、長徳二年二月の事と定めてよい。

(二) 草子中、對行成の關係を語るもの數段(頁二六六)齊信に對するとは違つて、頗る當りがひどく、きびくとしてゐるのは、所謂人に由つて法を説くもので、行成の態度や人物をも如實に知る事が出来て、興味が深い。なほ委しくは参考の條に述べて置く。

「頭の辨の御許より」とて、主殿司繪などやうなるものを、白き色紙につつみて、梅の花のいみじく咲きたるに附けてもて來たる、繪にやあらむと急ぎ取り入れて見れば、餅談といふものを、二つならべて包みたるなりけり。添へたる立文に、解文のやうに書いて、進上餅

つた様に見える。しかし草子に見える行成は、まことに頑固で一本調子であつた。(四五段参照)そこは或人が夢に冥途に赴いた處が、侍従大納言行成を召さるべき沙汰のあつた時に、或冥官が、行成は世の爲、人の爲いみじく正直の人である。暫く召さるべきでないといつたので、召されなかつた。古事談、第二に傳へる話とも共通する所がある。それに又、随分茶目氣分のあつた事は、此の段や四五段や、又彼の有名な「夜をこめて」の歌を清少が贈るに至つた動機などを見ても(一一七段)わかるので、清少など

本文
解釋

餅一つつみ、例により進上如件。少納言殿に」とて、月日書きて、美麻那成行とて、奥に「このをのこはみづから參らむとするを、晝はかたちわろしとて參らぬなり」といみじくをかしげに書き給ひたり。御前に參りて御覽せさせれば、めでたくも書かれたるかな。をかしようしたりなど、譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。返事はいかがすべからむ。この餅餅もて來るには、物などや取らすらむ。知りたる人もがなといふを聞しめして、惟仲が聲しつる。呼びて問へ」と宣はすれば、端に出でて、左大辨にも聞えむ」と、侍していはすれば、いとことうるはしうて來たり。あらず、私事なり。もしこの辨、少納言などの許に、かかる物もて來たる下部などには、する事やある」と問へば、さる事も侍らす。唯とどめて食ひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし政官のうちにて、得させ給へるか」といへば、いか